

西住家の使用人

青葉白

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

井手上菊代は、西住しほの学生時代からの友人にして、西住家の使用人である。

そんな彼女に、西住姉妹と同年代の子供がいたら、というもしもの話。

主人公は男の娘（※オリ主注意）です。

男の娘なので戦車には乗りませんが、大洗には行きます。

1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
128	117	107	90	76	62	49	38	27	12	1

目次

1話

月曜日の朝のことである。

その少年は、隣室の扉の前でチャイムを鳴らした。

たつぷり30秒は待つてみたが、一向に中からの反応はない。

尤も、それは少年としても分かりきっていたことではあった。

仕方ないと思いつつ、少年は予め渡されていた合鍵を使って中に入る。

それは、毎日のように繰り返されている行為であるし、大洗に来る前から、それこそ熊本にいた頃からの日課のようなものだった。

しかし、少年は未だに慣れるということができていなかった。

部屋に入る度、なにか悪いことをしているような気分になってしまふ。

だから、扉の前で心を落ち着けて深呼吸をするのは一種の儀式というか、彼のルーティーンのようなものだった。息をするようにもっと簡単にできればいいのだが、おそらく、一生できないだろうという確信があった。

靴を脱いで、部屋に上がる。

足音をたてないよう部屋の中へ進むと（少年にとっては癖のようなもので、ほとんど無意識だった）、すうすう、と規則正しく寝息をたっている少女の姿があった。

むにやむにやと、なにやら寝言のようなものも聞こえるが、はつきりとは聞き取れないし、わざわざ耳をすますつもりもなかった。

少年は、地元を離れてなお安心しきったような顔で眠る少女を見て、微笑ましい気持ちになりながらも、一方的に寝顔を見つめているということになにか罪悪感のようなものがふつつつと沸き上がってくる。

なにせ、少年は少年で、少女は少女である。これが互いに、どこか親同士ですら合意の上のことであるというのにいけないことをしているような気分になるのは、もう仕方のないことだった。

叶うのならば、チャイムを鳴らした時点で起きてくれるとか、その

時点で返事を返してくれたら言うことはなかった。しかし、その期待はもう5年以上も抱き続けてきたものだから、ほとんど無理だろうな、と半ば諦めていた。

決して朝に弱いというわけではないのに、この少女ときたら、絶対に1人では起きないのだ（しかも、目覚まし時計の類いは大嫌いときた）。たぶん、きっと、長年の習慣から、少年に起こされるというルーティーンが体内時計のひとつに組み込まれているのだった。

「みほお嬢様」

少年は、折り目正しくベッドの隣に正座をすると、うやうやしく少女の名前を呼んだ。

体を揺らしたり、音を鳴らしたりといったことは不要だった。

大抵の場合、少年が声をかけるだけで少女は目を覚ますのだ。

「うん？…朝あ？」

「はい。朝でございます」

「そっかあ…」

もぞりと体を動かし、顔を半分だけ布団に潜らせる。まだ寝ていたという意思表示だろうが、少年としてはそれを許すわけにはいかなかった。

なにせ、彼女は、日本戦車道の双璧を為す西住流戦車道の後継者候補のひとりだ。

世間一般では、彼女の姉である西住まほが師範代、ひいては家元を継ぐだろうと見られているが、正式にそうなると決まったわけでもない（どころか、彼女らの母である西住しほですら、実態はどうあれ未だ師範代であり、正式には家元を継いでいない）。

事実、戦車道の才能で言えば、妹である西住みほとて負けたものはなかった。尤も、少年に戦車道のこととはよく分からないので、人に聞いた話でしかないが。ただ、それを少年に話したのは、何を隠そう彼女たちの親である西住しほだったので疑う気持ちは起こらなかった。

詰まるところ、世間の予想に反して、西住流の師範代ですらどちらが後継者に相応しいか決めかねているというのが実状である。

だからこそ、彼がここ大洗まで着いてくることになったのだ。

これは、井手上菊代（西住家の家政婦である）の進言でもあったが、結局、彼に大洗に行くよう命じたのは誰もいない西住しほである。

尤も、菊代の進言は、あくまでみほが転校することになったとき、お付きに桜をやってはどうか、と言ったままでなのだが。

母として、娘が知らない土地で一人暮らしをすることを心配する気持ちさが7割。

戦車道の師範代として、怠けた生活は許さないという気持ちさが3割。

おそらくはそんなところだろう、というのが少年の予想だった。いや、心配の気持ちの方がもう少し高いかもしれない。

ただし、彼に命じた表向き理由は、師範代という立場もあってか、後者の意味合いが幾分強いように感じられたが。

そんなわけで少年は、心を鬼にして少女に、西住みほに起きてもらわなければいけないのだった。

わざわざ仲のいい姉妹で後継者争いなどして欲しくないというのが、少年の偽らざる本音であったが、所詮は雇われの身。折角戦車道から離れた生活ができるのだから少しくらい朝はゆっくり寝かしてやってもよいのでは、とも思う。しかし、雇い主の意向に逆らうことはできなかつた。

少年の母は、井手上菊代であった。

彼女は、西住しほの学生時代からの友人であるが、先述の通り、同時に西住家の家政婦でもある。その関係で少年は幼い頃から頻繁に西住本家に入入りしていた。

最初のうちは、母の真似だった。

少年は、年の近い西住家の令嬢に対しても、実にうまく使用人のように振る舞った。拙いながらも敬語を使い、彼女らの話し相手や遊び相手を見事に務めあげたのだ。

そのうち、姉妹の遊び相手以外にも母や他の使用人の仕事を手伝うようになった。

すると、しほも、流石に仕事をしているのに給金を渡さないのは心

苦しいと小遣いを与えるようになり、高校生になると正式に雇用契約を交わしたのだった。

「起きてください、みほお嬢様。ジョギングの時間が無くなってしまいますよ」

「や」

短く一言で拒絶の意思を示す西住みほ。寝起きのせいか、いつも以上に子どもっぽい態度だった。

ともすれば、年頃の少女なら、特に異性には見せたがらない姿な気もするが、それだけ受け入れられているのだろう、と少年は納得することにした（寝起きの部屋に入っている時点で何を今さら、という気もするが）。

みほは、器用に布団にくるまりながら、ぐるんと寝返りをうつようにすると、少年のいる方とは逆、つまり壁のある方へ体をそっくり向けてしまった。

「もう戦車道しなくていいんだもん」

「お嬢様…」

みほは、拗ねたような声を出した。

それもそのはずだった。

みほは、前の学校を追い出されたと感じていた。

実際、それは限りなく正解に近かった。

戦車道全国高校生大会、史上初の10連覇がかかった大事な試合で、みほのとった行動が原因となって、チームは決勝戦で負けてしまったのだ。

少年は、みほと違って、本土にある高校に通っていた（本土の高校は、学園艦にある高校よりもずっと規模は小さい）。

だから、話でしか聞いたことはなかったが、負けたことについて、随分と酷いことを言われたらしかかった。結果、みほはすっかり戦車道が嫌になってしまい、前の学校には居場所がなくなってしまったそうだ。

そして、それを見かねた西住しほから、大洗という戦車道のない高校に転校するように言われてしまった、ということである。

みほのとつたという行動についても少年はだいたいの事情は聞いたが、個人的にはみほの行動は責められるようなものではないし、一般的な道徳からすれば正しい行動をしたと思っっている。さらに、当時のみほは一年生だ。仮に敗退の原因のひとつがみほにあったとしても、その責任を一人に押し付けるといえるのは、少年にはどうにも承服しかねるものがあつた。

しかし、それを表立って庇うことができない立場というものがあつた。

みほは、母は自分を嫌っているのだ。だから自分を叱つたし、熊本から出ていくように言つたのだ。と思つているが、決してそんなことはないのだと、少年はよく知つていた。

もしも、しほが本当にみほのことを嫌っているのなら、自分はきつとここにはいないだろう。

ただ、とある事情から、そんなことを言うわけにもいかなかった。

「お嬢様、いつか奥さまも分かつてくださる時がきます。お嬢様も、戦車道がすべて嫌いになつてしまつたわけではないのでしょうか？」

「…うん」

小さく、ともすれば消えてしまふそうなくらいの声ではあつたが、確かにみほは、戦車道について肯定的な返事をした。

これで、戦車道を嫌いになつてしまつた、と言われなくてよかつた。と少年は心の底から安堵した。

戦車道は、女子の嗜む武芸である。全くの男子禁制というわけではないが、ほとんどは事務方が整備士くらいで、あとは観戦が専門だ。それは少年にも同じことで、しかも西住師範から戦車に乗ることは禁止されていた。たとえ遊びでも、だ。だから、少年に詳しいことは分からない。けれど、みほが楽しそうに戦車に乗つていた姿を覚えているし、彼女たち、家族の絆を繋げていたのは間違いなく戦車だつた。それが、すべて嫌な思い出に塗りつぶされてしまうのは、とても悲しいことのように思えたのだ。

「西住の家に戻つたとき、すっかり戦車に乗れなくなつては恥づかしいでしょう。さあ、顔を洗つて、運動着にお着替えなさつてくだ

さい。お嬢様が戻られるまでに朝御飯の支度をしておきますから」
「…うん、分かった」

もぞもぞと布団が動いたかと思うと、ばさあ、と布団がめくりあげられて、みほのパジャマ姿の上半分が頭になった。半分だけとはいえ、頭を布団にもぐりこませたせいだろうか、後ろの髪があつちこつちに跳ねあがっている。まあ、一時的には手櫛でも戻るだろうし、どうせジョギングから戻ればシャワーを浴びる。見るのは自分だけだろう、と少年は思ったので、余計なことを言うのはやめた。

「何か食べたいものはありますか」

「あつたかいお味噌汁が飲みたい」

「畏まりました」

それならば、今日の朝食は和食だな。と頭の中でぐるぐると冷蔵庫の中身を思いだしながら、献立をいくつか考えていく。

なにはともあれ、みほがやる気になってくれてよかった。腕によりをかけて作らなければ、という気持ちになる。

自分が見ている前では着替えもしづらいだろうと思つて、少年は静かに立ち上がり、台所へ向かった。鍋を取り出し、水を入れる。

着替え、洗顔、ジョギング。戻つてからのシャワーと考えれば、多少手の込んだものを作つても十分に間に合うだろう。

ばたばたと慌ただしく準備をするみほに対し、運動靴は靴箱の中ですよ。と声を送った。

「うん、ありがとう。桜ちゃん」

いつてきます。と言つて、ジャージ姿でかけていくみほを見送つて、少年はゆつくりと朝御飯の支度の続きに戻る。

少年の名前は、井手上桜と言つた。

桜は、その女の子らしい名前を、しかし、嫌つてはいなかった。

同級生からその名前をからかわれることも少なくなかつたが、敬愛する両親がつけてくれた大切な名前だ。なぜそんな名前をつけたのか、と疑問に思うこともなかつたし、同級生たちのからかう様子は、早熟だった桜にはよっぽど滑稽に映っていた。我慢していればそのうち飽きるだろう。彼らも精神が成熟すれば、からかう気も収まるだろう。

う。そんな風に思っていたのだ。

果たして、小学校の4年生になる頃には、桜の名前をからかう生徒はほとんどいなくなっていた。しかし、それは桜の意図したところとは、違うところに要因があったのだが。

同級生たちの精神が成熟したというのは確かだった。

そして彼らは、桜の容姿が非常に優れているということに気がついたのだ。

井手上桜は、正真正銘男子である。遺伝子学的には間違いなくそうであるし、本人の性自認も男性のそれである。男性としてのシンボルもすっかりと備わっていた。しかし、冗談や揶揄を抜きにして、10人が10人、彼の性別を女子と答えてしまう程度には、可憐な外見をしているのだった。それも、大変魅力的な、という形容動詞がつけられるくらいの容姿である。

ともすれば、それは年々洗練されていくようで、小学生の頃は男子用の服を着ていれば、まだなんとか、男の子？と答えてもらえるくらいだった。しかし、それも中学生になる頃には、男子用の制服を着ていてもなお、なんで彼女は男子用の制服を着ているの？と不思議な顔をされるほどになった。僕は男だ、と答えた際に、ああ、そういう……という反応をされたことは、温厚な桜にとっても、特に腹立たしい出来事のひとつである。

要するに、^ア触^ンれては^{タツ}い^{チャ}けない^プ事情と認識されるようになったのである。

桜は、しばらくそのことに気づいていなかったが、たとえ気づいたところで、違うのだと叫べば叫ぶほど、分かっているから、と生温かい反応を返されてしまい余計にやるせない気持ちになるのだった。

せめて華奢な体でなくなれば、と思つて筋トレをはじめたこともあったが、半年ほど続けても一向に筋肉がつかないのでそのうち諦めてしまい、それも個性であると受け入れるようになったのが中学2年生のことである。

また、髪を短くすれば女子に見えないのでは、と思ひ立って、いつそ坊主にしようとしたこともあった。しかし、家族だけでなく、西住

姉妹からも大反対にあい、終いにはしほから戦車関係以外では唯一となる「バリカン禁止令」なるものを出されるに至ったので断念したということもある。結局は、常識的な範囲で、というしほからのお達しを守りながら（桜は坊主にすることを非常識とは思っていないが）、行きつけの床屋で短くしてもらったのだが、完成した自分の姿を鏡で見て、ボーイッシュな女の子にしか見えないという感想を自分で抱いてしまったというオチがついた。

そんな、およそ他人には共感してもらえないだろう悩みをもつ桜少年であつたが、それを知つてか知らずか西住みほは、桜のことを幼い頃から一貫して「桜ちゃん」と呼んでいる。男女の違いがよく分かっていない頃には一緒に風呂に入ったこともあるし、みほは桜がいる前でも気にせず着替えをすることがあつた。

まさかとは思うが、みほにまで女と思われているのではないか。そんな風に心配になって、意を決して尋ねたことがある。

「みほお嬢様は、その、お着替えの際に私が同じ部屋にいるのは、気になつたりはしないのでしょうか」

ただし、流石に言葉は選んだ。

突然、井手上桜の性別が男か女か分かるか、といった質問をするのは、あまりに失礼だと思えたのだ。

桜は、いったいどんな言葉が返ってくるだろう、と不安になつた。これで女と勘違いされていれば、膝から崩折れる自信があつた。恥も外聞もなく泣いたかもしれない。

おそろおそろといった様子で桜が尋ねたが、みほは一瞬、何を言われているか分からないという顔になつた。

「ほえ、桜ちゃんは家族だから、恥ずかしくないよ」

それは、雷に撃たれたような衝撃だつた。

みほと桜は、雇用主の子供と使用人という関係であつたが、幼い頃からそれこそ兄弟のように育ってきた。口では似たようなことを桜も言ったことがあつた。みほお嬢様もまほお嬢様も家族同然の方である、と。慕っているのも嘘ではなかつた。

しかし、心の底では、所詮自分は使用人であると一線を引いている

ところがあつたし、きつとみほにも同じように思われているだろうと
考えていた。家族と言っているのも、口先だけのことであると思つて
いたのである。

自分というものがあまりにも浅ましく感じられて、とかく恥ずかし
くなった。

みほは、自分のことを本心から家族として信頼してくれていたの
だ。

それを自分は、男だから女だからと。低俗で、ともすれば下劣の輩
であるように思えて仕方なかった。自分の心というものが、酷く汚れ
たもののように感じられた。

そんな自分のこともみほは家族と呼んでくれたのだ。

だから、桜は、もつと誠心誠意、西住の家のために働こうと心に決
めた。

自分は素晴らしい家で働いているのだと、一層強く誇りに思うよう
になって、桜はますます熱心にみほやまほのことをお世話するよう
になったのだ。

いや、しかし、それでも。

いかに桜の外見が少女のようであっても、その中身は年頃の少年な
のである。

笑顔で話しかけられれば、あの娘はきつと自分のことが好きに違
ないと勘違いするくらい、純心で安直で単純な思春期の少年の心を
持っているのである。

異性の部屋に入れば、なんとも言えない甘い匂いが鼻孔を刺激し、
脳がくらくらにやられるのだ。

ましてや、みほもまほも、それぞれタイプは違うが美少女と言つて
も過言ではない容姿をしているし、体つきも少女から女性へと成長し
ている真つ最中。些か、年頃の青少年には刺激が強すぎた。

例えるなら、桜少年の理性はチャーチルの正面装甲並みである。こ
れが通常の男子高校生なら、八九式の装甲がいいところだろうか。そ
れくらい、桜少年は女性に免疫があつたし（女系の西住家で育つたお
かげだろう）、理性も強い方だった。対して、みほやまほの魅力という

ものは、ヤークトテイガーの主砲クラスである。要するに、相手が悪すぎた。

想像してほしい。

可愛らしい少女が、信頼しきった様子で自分にだけ無防備な寝顔を晒しているのである。それも、憎からず思っている相手だとしたらどうだろう。

そんなもの、手を出さなければ嘘だ。男として終わっている。

しかし、みほは桜のことを家族として無邪気な信頼を寄せている。それを裏切るくらいなら、桜は腹を切って死ぬだろう。死ぬべきだ。

だから、みほに悟られてはいけない。そんな葛藤を抱えていることすら、気づかれてはいけない。男だとか女だとか言う以前に、井手上桜は、西住みほの使用人であり、兄弟であり、家族である。

「いや、男なんだけどね」

耐えきれず、ぼそりと独り言が漏れた。

桜は最近になって、自分は何かを間違えたんじゃないか、と思うようになってきたのだ。

何かって？

それはたぶん、生まれてくる性別だ。

桜は、エプロンをしていた。

料理をしているのだから、当然である。その下に着ている制服を汚すわけにはいかないだろう。

その下に着ている、大洗の制服を汚したりしたら問題だ。

だって、何着も替えの制服なんて持っていないのだ。

染みとりなんて、忙しい朝の時間にやりたいことではなかった。

ちなみに、桜は女顔であるし、体つきも華奢だ。しかし、意外と自分の顔は嫌いではなかった。嫌いではなかったが、じゃあ、似合うからといって女物の服を着たいかと言うと、それは別だった。たまに着物を着させられたり、まほやみほの服を着させられたこともあったが、それはあくまで冗談の範疇で、家の敷地の中に限られていた。

桜は、そういう事情を抱えた人ではなかったし、女になりたいと思っただけでもなかった。たまたま、女らしい顔に生まれついてしまっ

ただけなのだ。

さて、話は変わるが、みほが転校した学校は、学園艦の上にある。学園「艦」というのだから、それは船であるし、当然ながら普段は海の上を航行しているわけだ。そういうわけだから、学園艦に住んでいる以上は学園艦にある学校に通うしかないし、大洗の学園艦には一つしか学校がなかった（おかげで生徒数は高等部だけで9000人というマンモスっぷりである）。

また、本土に行く方法は、学園艦が寄港するか、ヘリでも使わない限りは無理である。そして、通学のためだけにヘリを使うような馬鹿はいないし、仮にいたとしても、桜にヘリの操縦は無理だった。

つまり、桜が高校を卒業するためには、みほと同じ学校に通って、単位を取得するしかないのである。

そう。みほと同じ、大洗女子学園に。

…もしも、井手上桜が女として生まれていれば、こんなに複雑な思いをすることはなかっただろう。

色んな意味で。

2話

「桜くん」

ある日のことだ。

いつも通り家の掃除をしていると、桜は母に呼び止められた。

桜は働く手を止めて、母と向かい合うようにして立ち上がった。

悲しいかな、身長は同じくらいだった。

桜の母は、井手上菊代といった。

彼女は、桜の雇い主である西住しほとは学生時代からの友人であり、同時に西住家の家政婦という立場だ。

桜にとっては、母であると同時に、同僚であり、仕事の上司のような存在である。仕事の指示を受けることもあったし、指導を受けることもあった。

西住家も大概だが、桜と菊代の関係も普通の親子とは一線を画していた。それを選んだのも桜自身なので文句はないのだが。

「なんででしょうか、母上」

「奥さまがお呼びです」

「奥さまが？」

西住本家において、奥さまと言えば、それは西住しほのことを指した。

西住しほは、西住流戦車道の師範代にして次期家元であり、実質的には家元同然の仕事をこなしていることもあって対外的にもそのように扱われている。女系の西住家において、一番偉いのはしほであると言って過言ではなかった。

しほは、先述の通り、桜にとっては雇い主だ。

しかし、意外なことにしほは公人としてでなく、私人として桜に接することも多かった。もしかすると、彼女の子供たちよりその機会は多かったかもしれない。その場合、愚痴を聞かされることもあったし、母の友人として話を聞いてくれたり、大人としての意見をくれたこともあった。たぶん、友人の息子という、丁度いいくらいに肩の力を抜ける相手だったのだろう。普通の人の親としての顔を見せた。

いつも気を張っていては疲れるというものだ。

「失礼します」

呼び出されたのはいつもの執務室ではなかった。

そう言えば、今日は来客があったはずである。

しほに来客があるのは珍しいことではないが、相手が高校生とあつては少し気になった。

それも、黒森峰の生徒でもないというし何事だろうか。

果たして、がらりと襖を開けて中に入ると、見慣れない制服（セーラー服によく似ているが、胸当ての部分が緑色である）を着た少女が机を挟んでしほと向かい合いに座っていた。しほは、相変わらずの黒スーツである。

少女は、赤っぽい髪を黒のリボンで結んでツインテールにしている。背丈は、かなり小さい。ともすれば、小学生にも見えるくらいだ。桜は、今日のお客様は高校生と聞いていたので少しばかり面食らっていた。

だが、何も面食らったのは、桜だけではなかった。

その少女、角谷杏もまた、桜の容姿に驚いていた。

こんな話があった。

角谷杏は、大洗女子学園の生徒会長である。

彼女は、とある依頼をするために、わざわざ学校を休んでまで熊本
の西住本家にやってきていた。というのも、どこから西住みほが黒
森峰を転校するという話を聞き付けたのだという。そして、もしもそ
の話が本当であるとしたら、是非大洗に転校してきてほしいというこ
とだった。

しほは、彼女の情報網に驚いたし、どんな手を使ったかしれないが、
こうして西住流の次期家元との面会にまでこぎ着けた手腕に並々な
らぬ執念のようなものを感じていた。

しほも最初は、大洗に戦車道がないということは知っていたし、み
ほが戦車道をしたくないと言うのなら、転校先としてすすめるのもあ
りじゃないかと思った（少しばかり熊本からは遠すぎるが）。しかし、
わざわざしほにお願いをしにくるといふ時点で、何らかの思惑がある

ことは察せられた。ひとりやふたり、生徒数を集めるためだけに生徒会長が直接動いたりはいらないだろう。

「大洗に戦車道を復活させようと思っっています」

真面目つたらしい顔でそう宣言した杏には、ある種の覚悟が感じられた。

小さな体に何か重たいものを背負っているような、そんな不退転の覚悟である。

責任感の強い娘だ。しほは微笑ましいと思うと同時に、深く同情した。

しかし、それと自分の娘が利用されることとは別の話である。

「戦車道を復活させるだけなら、言葉は悪いですが、勝手にやればよろしいでしょう。戦車を集め、人を集め、お金はかかりますが、外部から講師でも呼べばよろしい。そういうお話なら、うちの門下生を貸すというのも吝かではありません。しかし、あなたはみほが欲しいとおっしゃる。それは、何故ですか？」

杏は、重々しい空気の中、汗を垂らしながらしほのプレッシャーに耐えていた。

心臓の音がうるさい。ともすれば、口から心臓が飛び出してしまいうるさく、そうなくらいに暴れている。

本音を言えば、今すぐにも逃げ出したいという気持ちでいっぱいだった。

杏は、学生としては肝の座った方であるが、対面するのは西住流の次期家元である。大人でもしほを苦手とする人間は少なくない。子供と侮ってくれるような相手ではなかったし、視線が合えば、首に刀を当てられているような錯覚に襲われた。

この相手に、嘘や誤魔化しは通用しないだろう。むしろ、学生相手に誠実に向き合ってくれている。大人を相手にするのと同じように、礼には礼を、不義理には不義理を返してくると思われた。

一秒、二秒と、少しだけ目をつぶって、角谷杏はすべてを話す決心をした。

「…学園艦の統廃合。そんな話があるのはご存じでしょうか」

「噂程度であれば。なんでも、学園艦の維持にも運営にもお金がかかるから、ということですが、まさか？」

「ええ、そのまさかです。大洗の学園艦は、来年の3月を以て解体となります」

しほは、話のスケールに驚かざるを得なかった。

学園艦には、数千人、規模によつては数万人という生徒が住んでいて、さらにその家族などの居住者も決して少なくない人数が暮らしているのである。それが解体されるとなれば、人々への影響は計り知れない。転校すればいい、引越しをすればいいという問題ではないのである。場合によつては、生活すら危ぶまれる人だつて出てくるだろう。

「大洗には、目立った実績がありません。生徒数も年々減少の一途です。学園艦を解体する。廃校にすると言われてしまつても、反論の材料がありませんでした。ですから」

「戦車道、ですか」

「はい。近々戦車道の世界大会が予定されていて、文科省も力を入れてようとしていることは知っていましたから」

しほは、深く息を吐いて、そして、天井を見上げた。

みほが欲しい、と言つた角谷杏の置かれた状況が理解できたからだ。

「啖呵を切りましたか」

「それ以外に道がありませんでした」

大した娘だとは思っていたが、角谷杏という少女は、しほの想像以上だった。

こうして戦車道の選手を探していることからすると、何某かの廃校を撤回する条件を受け入れさせたのだろう。

それは、決して簡単な条件ではないのだろうが。

しほは、西住流の師範とは別に、高校戦車道連盟の理事長も務めている。文科省とはそれなり以上に関係があるし、最近ではプロリーグ設置委員会の委員長の打診もされていた。だから、どれほど文科省が戦車道に拘らざるを得ないかを知っている。おそらく、それ以外の

カードでは、交渉のテーブルにつくこともできなかつただろう。そういう意味では、まさに起死回生の一手だったことに違いはない。

果たして、自分が高校生だった頃に、同じ状況で同じような結果を掴みとることができただろうか。

もはや感心を通り越して、驚きの境地である。

「幸い、大洗には過去に戦車道をやっていたという記録がありましたし、訓練に使えるそうな場所にも心当たりがありました。尤も、それは20年も前のことでしたし、当時の戦車はほとんどが売られたようで、書類を確認しても残っているのは僅かに数輦といったところでしたが」

「それでよくも…」

しほが呆れたような声を出すと、杏は困ったように笑った。

「他にありませんでしたから」

しほは、杏の笑顔を痛々しいとすら思ってしまった。

はあ、とため息が漏れる。

しほの脳内では、様々なものが浮かんでは消え、消えては浮かんでを繰り返した。

それは、西住流の次期家元としての立場であるとか、娘の進退であるとか、世間の声とか、まあ色々である。何分、抱えているものが多かった。

勘違いされることも多いが、しほは決して情に疎い人間ではない。堅い物言いを好むところはあつたし、姿勢の良さや顔つきの鋭さも相まって、鉄の女とまで言われることもあつた。しかし、それは単に私の区別がはっきりしているというだけであつて、実際には、休みの日には家族サービスをするような、どこにでもいる普通の母親である。それこそ、娘と近い年齢の子供が困っている姿を見て、無体な真似はしたくないと思つてしまうくらいには至極全うな倫理観を持っていた。

「…黒森峰には、まほがいます」

「存じています。それを知った上で、私にはお願いをすることしかできません」

そうやって、角谷杏は静かに頭を下げた。

しほはだんだんと、自分がどちらとして話しているのか分からなくなってきた。

しほにとつて、戦車道と娘のことはどちらも重要なことで、しほ自身複雑なのだ。そこに他人の事情まで絡まれてしまつては混乱するのも仕方がなかった。

「知っていることかもしれませんが、特に高校の戦車道では、学校間の力の差が明確です。ここ10年程は、上位に入賞した学校の名前もほとんど代わり映えがしません。日本戦車道の一流派の師範として、こ言うのはよくないかもしれませんが、戦車を動かすということは、一朝一夕でどうにかなるものではありませんから、敷居が低いとは言えないでしょう」

角谷杏が、そんなことは分かっている、という顔をした。

分かつたうえで、なお一縷の望みにすがり付くほかないのだ。

けれど、しほが言いたいのはそういうことではなかった。

「つまり、まぐれが期待できるような世界ではありませんし、たとえみほが転校したところで、結果を出せるとは限りません。いえ、寧ろ新設チームをいきなり勝たせるなど、あの子でもほとんど不可能でしょう。その時、力が及ばなかった。廃校にしまったという負い目を、あの子に負わせたことはありません」

母としては、みほが大洗に行くことで、戦車道をすることで、心にさらに深い傷を負うのではないかという心配がどうしても消えてくれなかった。しかし、人の親として、全うな大人としては、角谷杏に力を貸してやりたいとも思う。そして、西住流の師範代としては、みほの才覚も知っているし、敵に塩を送るような行為だ。つっぱねるべきだという考えと、みほの戦車道の才能がこのまま埋もれてしまうのを惜しいと思う気持ちとがまぜこぜになっていた。

そんな、絶妙のバランスでしほの心の天秤は左に右に揺れに揺れた。

おかげで、しほはどうにも踏ん切りをつけることができないでいる。けして、しほに意地悪をするつもりはないのだが。

すると、思い詰めた表情の杏が、何事かを話し出した。

「これは、娘さんに話すつもりはありません。いいえ、既に知っている生徒会のメンバーのほかには、誰にも話すつもりはありません。たとえば、戦車道に参加してくれた生徒にも、戦車道は、生徒会長たる私の我儘で、廃校ははじめから決まっていたものと、そのように伝えるつもりです」

折角なら楽しんで欲しいですから。

角谷杏は、健気だった。

子供ひとり。数万人という人生は、その肩には重すぎる荷だ。それを、逃げることなく、諦めることなく、誰かに押しつけることもなく、抱え込もうとしている。優しい娘だ。優しすぎて、今にも潰れてしまいそうなほどに。その結末が、全てを失うことなのだとしたら、そんな報われないことはない。

しほの中で、ようやく心の天秤がどちらか片方に傾いた。

「…いくつか条件があります」

しほが言うと、杏が大きく目を見開いた。

やがて、ぎゅ、つと目を瞑ると、何かを堪えるようにして、ゆつくりと目を開ける。しっかりと姿勢を正して、震えるように声を絞り出した。拳が、強く握られている。

「聞かせてください」

しほは、みほが大洗に転校した場合でも、戦車道を拒絶するようなことがあれば、それを尊重して欲しいと言った。勧誘をすることは構わないけれど、選択の自由は与えてあげて欲しいと。

杏は、少し躊躇ったあと、分かりました。と頷いた。

そして、ふたつめに、今日の話について、みほには黙っていて欲しいと言った。

しほがみほに戦車道が続けて欲しいと願っていることが知れれば、遠慮をしてやりたくもない戦車道が続けようとするかもしれない。純粋な、みほの気持ちで選んで欲しいから、というのが理由である。他にも、廃校のことが伝わるかもしれないという危惧もあった（大洗の生徒会長がわざわざ熊本を訪れるというのは、かなり奇異なこと

ある)。

杏は、それが条件なら、と半分納得していないような顔で頷いた。

「それと、もうひとつ」

「なんででしょう」

「これが見つつめであり、しほにはもしかすると一番重要な条件かもしれないなかった。

「みほの他に、もう一人、受け入れて欲しい生徒がいます」

「生徒、ですか？」

大洗は、生徒数の減少も問題のひとつであった。だから、一時的とはいえ、生徒数が増える分には大歓迎である。一人と言わず、二人でも三人でも受け入れる土壌はあるつもりだった。

尤も、その生徒に何の問題もなければ、の話であるが。

「私の友人に、井手上菊代という女性がいます。この家の家政婦なのですが、彼女の息子をみほと一緒に転入させて欲しいのです」

「なるほど、わかりま……、え？」

淀みのないしほの口調に、杏は勢いで頷いてしまいそうになったが、どうにか堪えた。そして、自分の聞き違いかと疑ったが、よくよく考えて、聞き違えるような単語ではなかったと思い直した。

「ちよ、ちよっと待ってくださいー！」

らしくもなく、角谷杏は大いに狼狽したが(普段の彼女は飄々として、何事もうまく受け流すような性格である)、然もありなん。

角谷杏は、大洗女子学園の生徒会長である。

要するに大洗は、所謂女子校であり、誰ぞの息子ということならば、転入させたい生徒とは男子ということになる。

「ど、どうしてその、井手上さんの息子さんが転入という話に？うちは女子校なのですが…」

「存じています」

きつぱりと言い放った。勘違いとか、言い間違い、聞き間違いという線はたち消えた。

「桜は、…ああ、菊代の息子のことなのですが、彼は、うちの使用人のようなものです。幼い頃からみほやまほの遊び相手をして、そのうち身の回りの世話をするようになりました」

「失礼ながら、息子ということは、その、さくらさん？は、男性ですよね？」

「ええ、男の子です。ですが、兄弟のように育ったせいでしょう。みほもまほも、性別というものを然程気にせずに接していました。それで、ええと、一人暮らしというのは、その、親としては心配になるものでしょう？」

西住しほは、戦車道においては鬼だとか、そうでなくても竜だとか虎だとか、とかく厳しい訓練で知られているし、門下生ですら恐れる女傑であることは間違いないのだが、一旦戦車道を離れてしまうと、ぶつちやけモンスターとは言わないまでも過保護な親だった。

娘たちが黒森峰の寮で生活することになったときも、心配のし過ぎで暴走し、遂には菊代に怒られたくらいである。公私の区別がはつきりしてるのは良いのだが、バランスの取り方がなんとも極端だった。それでいて、娘たちにはそういう姿を隠そうとするのだから、誤解が生まれるのも仕方がない。

「言わんとすることは分かります。ですが、男性を学内に入れるというのは少し。いえ、そういうことを危惧しているのではなく、生徒として、というのが…。もう少し、上の年齢の方では難しいのですか？それでしたら、教師ということで受け入れることもできると思うのですが…」

杏は言葉を選びながら、まあ平たく言えば、嫌だということを伝えようとした。

しほの推薦(?)する人物だから、人格的に問題はないのだろうが、学校の規律と安全を任せられるものとしては、心配をし過ぎて悪いということはない。何より、女子の中にひとり男子が混ざったとして生徒たちがどう思うか。

「その、質問を返すように申し訳ないのですが、角谷さんが心配されているのは、具体的にはどういうことでしょうか」

「単に、女子校に男子が入学するということが前例のないことですの
で。世間的にも、風聞はかなりマズイでしょう」

来年にはなくなるのだから、今さら評判がどうこうと気にするのも
変な話だが、だからといって、厄介ごとが起こると分かっているもの
を受け入れたくはない。だったら、多少年齢を誤魔化すとかして、女
性の使用人を紛れ込ませたほうがリスクは低いように思われた。そ
の手の工作なら、小山が得意である。

そんなことを提案しようとしたところで、先にしほが口を開いた。
「でしたら、女子として入学させるのはどうでしょうか」

「はい。」

「桜は、本人に言うか怒るかもしれませんが、あまり男の子らしい容姿
ではなくて。この辺りでは、美人三姉妹と昔から有名だったんです
よ」

そうやって昔を懐かしむようにして微笑むしほの姿は、なるほど親
馬鹿だな、と杏が思ってしまうのも仕方がないほどだった。

「変に説明をするより、見せたほうが早そうですね。少し、待っていて
ください。桜を呼びます」

そうやってしほが、近くの女中を呼びつけて、件の桜少年を呼んで
きて欲しいと指示を出した。違和感なく着物を着こなし、黒の髪が目
を惹くような美人であった。杏には、いったいいくつだろうかと、い
まいち年の頃がつかめなかった。

その人物こそ、井手上桜の母親、井手上菊代であったということとは、
杏には分からないことだった。このときよくよく観察をしていけば、
このあと来る桜少年と似た顔立ちをしていることに気がついたかも
しれない。二人の関係性を考えれば、桜が菊代に似ているのである
が。

杏は、内心で先々のことを思っ、どうしたものだろうと煩悶した。
もちろん、はりついたような笑みを崩すことはなかったが、意外な
親馬鹿っぷりを見せられては、少年の容姿に期待はできなかった。親
馬鹿というか、友人馬鹿とでも言えればいいのだろうか。ある程度の鼻
屑目が入ったものだろう、と杏は予想した。

なにも、杏は美醜に対して拘りが強いというわけではない。一応、人並みの美醜の感覚は持っていたし、劣っているよりは優れているほうがいいとも思っている。だが、それで他人を評価するつもりはなかった。ただ、今回ばかりは重要なことだった。

「失礼します」

襖の向こうから声が聞こえた。

杏は、さっきの女中さんかな、と思った。

がらりと襖が開いて、顔を見せたのは着物を着た少女だった。

年の頃は自分と同じくらいじゃないかと思つた（杏自身の見た目は同年の少年少女に比べるとかなり幼く見えるが）。背は自分よりも高いが、際立って高いというほどではない。おそらく160の前半くらいだろう。姿勢がいいから、もしかするともう少し低いのもかもしれない。割合短く切り揃えられているが、混じりけのない綺麗な黒髪で、大きいたれ目がちな瞳は、穏やかな気性を感じさせた。化粧っ気はないが、鼻先もすつと通っており、下手なアイドルなんかよりよっぽど美人である。

「よく来てくれました。角谷さん、桜です」

「え？」

杏は、しほの言葉に一度しほの方を振り向いて、すぐに少女のほうへ視線を戻した。

いや、彼女が件の桜という少年なのだとしたら、少女と呼ぶのはおかしい。

おかしいが、杏にはそれが少年であるとはどうしても思えなかった。

着物（それも女性用である）を違和感なく着こなしているというのもそうだが、顔立ちは明らかに少女のそれである。先程の声だって女中さんと間違うほどであったし、部屋に入ってきてからの所作は、自分が自信を無くすくらい一々女性らしかった。それはもう、しほの勘違いとか、冗談を疑いたくなるほどである。しかし、今日は4月1日ではない。

「桜、こちら大洗女子学園の生徒会長を務めてらっしゃる角谷杏さん

です」

「井手上桜と申します」

「え、ああ、角谷です」

よろしく願います、と頭を下げる仕草ですら、見入ってしまうほど綺麗だった。おかげで杏は、少し反応するのが遅れた。

もしも本当に目の前の人物が男なのだとしたら、神様は残酷である。杏は、そう思わずにはいられなかった。

しほが、これまでの話を桜にする。

みほが転校することや、その転校先に大洗を選ぶよう杏がお願いに来たこと、大洗が戦車道を復活させようとしており、そのためにみほに来て欲しいこと、しほとしてもみほには戦車道を続けて欲しいと思っていることなど、廃校のこと以外はおおまかにそのほとんどを伝えていた。

すると桜が、ひとつよろしいでしょうか、と口の端をひくひくときせながら質問をした。

「なんででしょう」

「私は男なのですが、どうして女子校に通うことになったのでしょうか」

そうですよね!という共感と、そうなんですか!?という驚愕とがいつぺんにやってきて、杏の脳内は盛大に混乱状態に陥った。

「大丈夫です、桜。あなたなら絶対にバレません」

「バレるバレないの問題ではないのです、奥さま。世間一般の常識に照らした『倫理観』のお話と、私の『精神衛生的な負担』の話をしているのです」

「倫理観など、何を今さら。みほの着替えだって手伝っているでしょうに」

ぶんつ、と杏はツインなテールが暴れるくらいの勢いで桜の方へ振り向いた。

何やら聞き捨てならないことを聞いた気がしたのだが。具体的には、そこな男(仮)が変態かそうでないかの瀬戸際のようなことがある。

「…人間きの悪いことをおっしやらないでください。あくまでお洋服の準備をするだけで、一から十までお手伝いしているわけではありません」

桜は、極力下着姿などを目に入れないよう配慮はしているし、みほが着替えはじめれば部屋を出るように気をつけていた。まるで変態を見るような目を向けられるのは心外である。

ただ、みほの下着を用意しているのが桜であるということは、絶対に杏に知られてはならないことだった。見た目がどうこうじゃなく、間違いなく話が拗れる。警察などに駆け込まれでもしたらコトである。

「それに、お嬢様のお着替えを手伝うことと、男が女子校に入り込むこととは関係ないでしょう。言ってしまうえば、騙すようなものですし。下手をすれば犯罪です」

「ですが、女の裸には慣れていてしょう？」

「奥さま。人間きが悪すぎます」

人間きが悪いし、言葉の選び方が最悪だった。

杏が何やら性犯罪者を見るような目を向けている。

重ねて言うが、桜はみほが着替え出す時には目を逸らすか部屋を出るかを必ずする。だから、もしも万が一仮にも見えてしまうことがパーハップスあるとしたら、それはもう事故なのだ。事故だから、ひやつほうとかラッキーとか眼福とか、そういう下世話な感情を抱いたりはいしない。ただただ、ごめんなさいと心の中で謝って、静かに記憶という名前の写真入れフォトアルバムに仕舞い込むのだ。

桜としては、二度とかかわり合うつもりのない相手だから、杏に何を思われても平気といえれば平気だが、少なくとも同じ年頃の異性から向けられたい視線ではなかった。それに、何かの間違いでみほ相手におかしなことを喋られるのは困る。

しかし、そんなことはつゆ知らず、というか意に介さず、しほはマイペースに話を続けた。たぶん、気心の知れた桜がいることで公人としての仮面が剥がれてきている。杏にもそろそろ、西住しほという人物が分かり始めてくる頃だった。

「桜は、みほが遠い場所で暮らすのも心配ではないのですか？」

「奥さま。お言葉ですが、過保護が過ぎます。心配なものも分かりますが、もうお嬢様も高校生なのですから、奥さまにもそろそろ子離れをなさっていただかないと」

「桜は、菊代のようなことを言いますね」

「母の背中を見て育ちましたから」

毅然とした態度で答える桜の姿に、杏はそれなりに好感を抱いた。

ともかく誠実そうな男（仮）である、と評価を2段階くらい心の中で上方修正する。杏に読心能力でもあつたら違つただろうが。

それはそうと、そろそろ援護射撃をしなくては話が流れてしまうのでは、と俄に焦りだしているのだが。杏には、なんともしほの旗色が悪そうに見えた。

だが、しほと伊達に西住流の看板を背負っているわけではない。公人としての仮面が崩れようと、海千山千の口達者共とやりとりをしてきた経験は本物である。

「しかし、黒森峰でのことがあります」

「それは…」

そう言われてしまうと弱い桜だった。

実際、黒森峰で起こったあれこれを後から聞いて桜はずいぶんと心を痛めたし、みほのことを励ましてあげたいとも思った。それこそ、自分が離れた場所にいるということでも、もどかしい気持ちになったのは確かだ。落ち着かない様子でうろろうとする桜の姿もしほには見られている。

「過保護だということは、重々承知しています。しかし、二度目はあの子も耐えられないかもしれません。もしものことがあったとき、支えてくれる誰かが必要なのです。桜、あの子のこと、お願いできませんか」

「うう…」

しほが、じいっと桜のこを見つめた。

これが、大洗が共学で、女装という障碍がなければ桜としても二つ返事である。確かに、みほのことは心配だったし、みほのお世話をす

ることは最早生き甲斐と言っても過言ではない。黒森峰が女子校でさえなかつたら、きつと付いていったらうと自分でも思う。

しほのことを過保護と言ったが、桜とて大概である。

しかし、女装をして高校に通うというのは絶対に嫌だし、男として譲れないものがあつた。

何せ、ただでさえ女に間違われることが多いうえに、最近では男子のクラスメイトから熱い視線を向けられ、背筋の凍る思いをしたばかりである。

一度でも受け入れてしまえば、何となく、戻れなくなるような気がして怖かつた。

「角谷さんからも何か言つてください！男が女子校に通うのは、無理ですよね!？」

桜が、懇願するような視線を杏に向けた。相変わらず、男には見えない。ともすれば、ちよつと泣きそうな顔は、うまい具合に庇護欲を誘う。女子の武器としては立派なものだ。

杏の中で、世間体とか、学校の将来とか、生徒たちの安全とか、風紀とか、西住流とのコネクションとか、少年の自尊心とか、書類の偽造とか、露見したときのリスクとか、そういういろんなものが天秤のそれぞれに乗つかつていく。

杏は、うーん、うーん、と悩んで（脳内の話で、実際には数秒もかかっていない）、先にしほの言葉が割り込んだ。

「桜、あまり角谷さんを困らせるものではありませんよ。ね?」

「…問題ありません」

杏は、目を瞑ることに決めた。

「え?・ねえ。ちよつと?角谷さん!？」

だから、無情にも生け贄になることを見捨てた瞬間、桜少年がどんな顔をしていたのか杏には分からない。ぐあんぐあんと肩を強く揺すられているが、きつと気のせいである。

「ちよつと、無視しないでください!・聞こえてるでしょ!?!目を合わせてください!!」

ただ、できる限りの便宜は図ってあげようと心に誓つた。

3話

「それじゃあ、また後でね」

「はい、いつてらっしゃいませ」

にこにことした顔で手を振ってくれるみほに嬉しくなりながら、桜も小さく手を振った。

そのままみほは教室に入って行って、扉の近くにいたクラスメイトに挨拶をする。その姿を満足げに眺めてから、桜もゆつくりと自分の教室へ向かった。

みほは、無事にクラスに受け入れられたようである。

桜は、少しだけ寂しいとも思ったが、それ以上にみほの喜ぶ顔を見られることが一番だ。

何より、人見知りとは無縁と言ってもいいみほの性格である。

心配するのはお門違いというものだった。

桜は、大洗ではみほと違うクラスになった。

みほはA組で、桜はC組である。

というのも、しほが「授業中も一緒にいては気の休まるときがないでしょう」という、桜に対してなのか、みほに対してなのか、ともかく配慮のようなことを言ったためだった。

そんな配慮ができるなら、自分が学校に通う必要はなかったんじゃないか、と思う桜である。正直、女装をして通うくらいなら高校は卒業できなくてもいい、と本気で考えていたくらいだった。大洗でみほのお世話をするだけなら、たぶん喜んで了承したと思う。

右を見ても左を見ても、桜に見えるのは女子のセーラー服姿ばかりである（桜本人も同じものを着ているが）。

みほが一緒でなくても、気の休まるときはないように思われた。

「おはようございます」

「あ、おはよう、井手上さん」

そうは言っても、怪しい行動をして男ということがバレては身も蓋もない。全くクラスメイトと交流をしないなど、どうぞ怪しんでくださいと言っているようなものである。適度に、浮きも沈みもしない程

度の立ち位置を確保する必要があった。

そもそも転入生というのは、放ついても向こうから人が寄ってくるようなステータスである。うまく観察をすればだいたいクラスの間関係も見えてくるし、程よくいい顔をしていれば嫌われることもない。みほがいるのでお昼の誘いや放課後の誘いは断らざるを得なかったが、休み時間に雑談をする程度の相手には困らなかった。

「ところで井手上さんは選択科目は何にする？」

「必修のやつですよ。ええっと何がありましたっけ」

「えー、なんだっけ。茶道とか？」

「あとは、華道と書道と香道と、忍道、仙道、弓、長刀、合気道」

「うっわ、全部覚えてるの？」

「だって中学から毎年同じだもん。覚えちゃったよ」

桜は、自分の机の近くでかわされる会話に耳を傾け、適度に相槌を返しながら荷物を鞆から取りだし席につく。

もっぱら話題は必修選択科目についてのようだが、当然ながら戦車道の話はなかった。

当たり前か。復活するのは今年からで、まだその発表もされていない。

さて、どうしたものか。

会話の流れからして、結局何かしら候補をあげることになるのだろうが、それはまあ、適当に答えてもいいか。華道でも茶道でも。どちらも触り程度ならやったこともあるし、話を合わせるくらいは造作もない。結局のところは、どうせ戦車道を履修することになるのだろうし。

所詮授業の一貫であるとはいえ、必修選択科目はコマ数も多く、特に戦車道の場合は放課後まで練習は続くかもしれない。何せ目標が目標である。そのため、みほと違う科目を選んでしまうと、学校での行動がほとんど別になってしまう危険性があった。それでは本格的に、何のために転校してきたのか分からなくなる。

尤も、しほからの戦車に乗るな、という禁止令は今も継続中である。見た目が女子の桜であっても、その性別は男。女子の武芸である戦車

道に深く関わるのは許さないという方針は徹底されていた(精々が姉妹の勉強を手伝うくらいである)。だから、戦車道を選択したとしても、練習に参加したり、試合に出場したりといったことはできない。じゃあ、何をやるんだ、という話になるが、その辺りの特例対応は、事前に角谷会長とも擦り合わせ済みである。

「それもこれも、全部みほが戦車道をやると決めたららの話であるが。みほが嫌がれば、すべての計画はご破算である。」

朝のことを考えれば可能性は低いと思う。低いと思うが、ゼロであるとは言い切れない。みほはときたま、思いもよらない突飛な行動をすることがあった。こればかりは、桜にも予見しようがない。

「で、結局井手上さんは何やるの?」

「そうですね。華道なんてよろしいのではないのでしょうか」

「流石井手上さん。女子力たかーい!」

きゃっ、きゃっ、と盛り上がる少女たち。クラスメイト

桜は、淑女のお手本のような笑顔を浮かべてみせた。

桜の場合、女子力という言葉は必ずしも誉め言葉であるとは限らなかった。寧ろ、女々しいと言われているようで嫌っていた時期もある。尤も、今は女性としての演技をしているのだから、たぶん喜ぶべきなのだろう。

ちなみに桜は、前の学校では忍道をとっていた。そのあたり、なんだかんだ言って桜も男の子である。∴想像していたものとはだいぶ違ったが。どちらかと言うと近代スパイを育成するような内容であり、手裏剣や忍術といった漫画チックなあれこれは皆無である。

キンコーン、と鐘がなる。

学園艦でも聞きなれたチャイムが流れるので、少し安心した桜だったりするのだが、黒森峰では違ったということを知り、大洗が良く言えば伝統的、悪く言えば古いということに気づいて悲しくなった。

「井手上さん、今日も?」

ともかく、昼休みだった。

クラスメイトにお昼を誘われて、それを断るのは日課のようになっていた。

「ええ、すみません。約束が」

「いいっていいって。西住さんだっけ？仲がいいんだね」

桜は人当たりもよく、何より美人ということもあってグループに引き込まれたがる生徒も多かった。学校での桜は、母を参考にして楚楚とした大和撫子を演じていたので、彼女たちからすると物珍しくもあり、憧れのような視線も浴びていたのである。

また、桜としても、騙していることは悪いと思うが、クラスメイトと親しくなりたいという気持ちはあった。しかし、戦車道の始まっていない今、学校でみほと接することのできる数少ない時間のひとつが昼休みである。どちらを優先するかと言われれば、迷うことなく後者だった。

「それでは、失礼します」

桜は逸る気持ちを抑え、あくまで丁寧な頭をさげる。

そして、お弁当の包みを掴むと、スキップをするような気持ちで学食へと向かった。桜は無意識かもしれないが、その表情は満面の笑みである。

そんな桜に対して、怪しげな視線を向けるクラスメイトたちの姿があったことは、当然気づくはずもなかった。



桜が学食についた頃には、だいぶ席も埋まって繁盛している様子が伺えた。

さて、みほはどこにいるだろうかと辺りを見回していると、聞きなれた声が自分の名前を呼んでいることに気がついた。

「さくらちゃんー！」

声のした方を見ると、みほがぶんぶんと手を振ってくれている。

桜は、にこにここと笑っているみほのこことを見つけ、心が温まるのを感じた。

それは、一服の清涼剤というか、ともかく自分を隠すのでいっぱいといった生活だが、彼女の笑顔が見られるのなら、いくらでも頑張ろうという気持ちになれるものだった。

「お待たせしてしまいましたか？」

「ううん。全然」

にここにことみほが答える。

まるで待ち合わせをする恋人同士のような会話だな、と桜は思った。

すると、みほとは違う声に話しかけられる。

「まるで待ち合わせをするカップルみたいな会話だね」

そんな風にからかうような口調で話しかけてくるのは、決まっている。

「こんにちは、武部さん」

「やつほー、桜。金曜日ぶり♪」

右手でピースサインを作って笑顔を見せてくれる彼女は、武部沙織といった。

桜からすると、みほの友人という関係性になる。尤も、沙織からすれば、とつくに桜も友達というステータスに更新されているだろうが。

軽くウェーブのかかった明るい色のセミロングの髪に、軽く化粧もしているのか、今風の女子高生という感じの少女だ。性格も明るく、友達思いで、しかも家事も万能ときている。共学出身の桜からすれば、きつとクラスに男子がいたらモテモテだろうな、と思うくらい的好物件であるのだが、ここ大洗が女子校のためお相手には恵まれていないらしい。それどころか、趣味が結婚情報紙を隅々まで読むことと公言して憚らないあたり、中学から女子校に通っているせいだろう、恋に恋する残念系女子が爆誕していた。

是非とも大学ではモテモテ道を歩んでいただきたい。

「ほらほら、立っ^ていては^ご飯が食べられ^ませんよ」

そんな風に声をかけて、席に座るよう促したのは五十鈴華という少女である。彼女も沙織やみほと同じクラスであり、すっかりみほと仲良くなった友達のひとりだった。

華は、なんでも家が華道の家元らしく、みほの苦勞にも理解を示してくれるという、桜からすると、ありがたいやら羨ましいやら複雑な

相手である。いい人なことは確かであるが。

さて、五十鈴華と言えば、長い黒髪を腰まで垂らしたおっとり系の美人である。背も女性にしては高い方であるし、スタイルもいい。言葉遣いも丁寧だし、お淑やかなお嬢様という感じだ。それでいて、しつかりと自分の考えを貫く強さを持っている。古きよき、大和撫子を体現したような少女であった。

：桜は、なんとなく自分とキャラが被っているような気配を感じているが、華はお嬢様だし、何より天然だ。一方で自分のみほの使用人であり、しつかりもの。同じ大和撫子キャラでも、十分住み分けはできると確信していた。そもそも、大和撫子のように振る舞っているのは、桜の場合は演技のつもりである。

「それにしても、五十鈴さん。随分と食べますね」
「そうですか？」

華の前にあるトレイには、大盛りのラーメンと、これまた大盛りの白米。それと大皿いっぱい酢豚があった。これにみそ汁があったが、完全におまけである。

（見た目はともかくとして）男子高校生であり、食べ盛りとも言える桜であるが、ちよつとその量は勘弁してほしいというのが正直な感想だ。食べ切れないことはないだろうが、たぶん午後の授業には集中できなくなる。お腹が苦し過ぎて。

これだけ食べて、理想的とも言えるプロポーションを維持しているあたり、普段はどれだけ体を動かしているのだろうか。

「あー、華はいくら食べても太らない体質だからねえ」

「なにそれ、羨ましい」

ぐいつ、と体を乗り出して華に詰め寄ろうとするみほ。それを、危ないですから、と手で押さえようとす桜の姿があった。

なお、他人を羨ましがるほどみほが太りやすいということはない。むしろ、よく運動をしている方なので人より食べるし、余計な脂肪が体に付きにくい方である。今だって、桜手製の弁当は、学食の日替わり定食よりは多いくらいの量がある。だからといって、華と同じほどに食べていたら分からないが。

「ああ、もう。食べてる時に立ち上がるから、口元にソースがついてるじゃないませんか」

桜は立ち上がって、みほの顔をハンカチで拭いてやった。拭いている最中にもみほがもごもごと何やら言っている様子だったが、ちようど口元を拭いているものだから、何を言っているかは分からなかった。

「相変わらず、ふたりは仲良しだねえ」

「姉妹みたいです」

沙織と華が、それぞれ微笑ましいものを見るような顔をする。

途端に桜は恥ずかしくなった。

完全に意識からふたりの存在が消えていた。見せるつもりはなかったし、見られるつもりもなかった。

「ひ、あ…」

「どうかした？桜ちゃん」

みほはいつも通りだ。というより、元々子供っぽいところのあるみほである。今の行為も当たり前のものと認識しているし、いつものことと言えばいつものことなので、気にするようなことではないのかもしれない。

しかし、桜からすれば、自分の素とも言える姿を見られたようなものなのだ。女装をして、大和撫子のような演技をしてまで、自分が男だということを隠そうとしているのだから、素の自分など見られたくないに決まっている。そのうえ、自分がみほの世話をしている姿を家族以外に見られるのは、なんだかとても気恥ずかしかった。

「な、なんでもないです…」

ぶしゆううう、と顔を真っ赤にして席に戻る。

しかし、桜が気にしているほど、演技と桜の素に差などないし（あつたらみほが指摘している）、世話焼きという特性は寧ろ好意的に映っていた。女装だって、突然人前で脱ぎ出したりしない限りはバレようがない。言ってしまうば、気にしすぎだった。

ところで、みほと桜の関係は、本来は雇い主の子供と使用人というものだが、流石に学校でそのような関係性を表にすることは躊躇われ

た。そもそも、使用人がいるような家など普通ではない。そして、集団というものは普通でないものを拒絶するようにできていた。もしも自分のせいでみほが苛めにあったりしたら、きっと桜は自分のことを許せなくなるだろう。本質が西住家のお嬢様という社会ステータスにあるのだとしても。

だから、事前に桜は、みほによく言い含めておいたのだ。

自分達の関係は仲のいい幼馴染みであって、家同士に特別な関係はないし、井手上桜は西住みほの使用人ではないのだ、と。

すると、桜が拍子抜けするくらい気軽に、分かった。という返事がみほから戻ってきた。

あまりに物分かりが良すぎたため、本当に分かっているのかしばらく不安だった桜だが、こうして何事もなく学校生活を送れているあたり、下手なことは言っていないのだろう。

ちなみに、桜は普段、みほのことを「お嬢様」と呼んでいるが、学校にいる間は努めて「みほさん」と呼ぶように気を付けていた。同級生のことを「お嬢様」と呼ぶ生徒は変だろう。それが渾名だったとしても。尤も、なかなか言い慣れないので、気を抜くと「お嬢様」と呼んでしまいそうになるが、言い出しつぺは桜本人である。毎晩みほの写真に向かって、「みほさん」と名前を呼ぶ練習をしている甲斐もあって、今のところはぼろを出さずに済んでいた。

これでたぶん、どちらかが失敗をしない限り、お嬢様だからと苛められることはない。大洗は戦車道が盛んではないらしいし、西住という名前だけではお嬢様かどうかの区別はつかないはずである。幸い、西住の家は質実剛健を良しとするので、みほの金銭感覚や生活習慣もあまり世間離れたものではなかった。

尤も、沙織や華といった友人を得ている時点で、桜の心配も杞憂だったかもしれないが。

なお、前置きとして、幼馴染み云々は学校の関係者に対する説明だ、としつこいくらいに言ったのだが、果たしてみほは理解しているだろうか。普段から使用人でないと思われるのは困る、というのが桜の本音である。何せ、みほのお世話は桜の生き甲斐であるのだから、

建前がなくなったら、もう山に入るしかない。

閑話休題。

「昔から一緒にいるもんね、桜ちゃん」

「ソウデスネ」

「地元が一緒なんでしたっけ？」

「そうなの。よく家に遊びにきてくれてね。ね、桜ちゃん」

「ソウデスネ」

みほが楽しそうに話をしているが、話題はもっぱら地元のことと桜のことだった。

桜としては、うっかりみほが、西住の家のこととか、桜が使用人であることとかを話してしまわないか気が気でない。特に後半。下手をすれば桜が男だということがバレかねない。

かと言つて、そろそろ私の話はいじやないですか、などと不自然に話を切ってしまうのも躊躇われた。想像するだに怪しすぎる。

「へえ、みほの家ってどんなの？なんか大きそうだよねー」

「えつとねえ、こう門があつて、お庭があつてね。あ、お庭には昔使つてた戦車がー」

「つてわあああああ!!」

「桜!?!」

桜は、自分がどう見られるかも度外視して、とにかくみほの迂闊な発言を誤魔化さないと、と思つて精一杯だった。その方法が大声を出す、というのはいかにも子供染みた発想だったが。あまりのことに沙織が目を見開いて驚いている。

怪しいとか不自然とか、そういうのは余裕があるから考えられることである。

「お庭！ええ、ありましたね。子供が走り回るにはちようどいいくらいのお庭でした」

「ええ…う…そうかなあ」

みほが不満そうな顔を見せた。

実際には、子供どころか大人が走り回つてもちよつと疲れるくらい広い庭が拡がっている。何せ、庭でかくれんぼをしたときには使用人

のほとんどを動員してもみほを見つけられなかったほどである。

まさか、そんなエピソードを正直に話すわけにもいかない。西住の家は、地元どころか日本でも有数の名家なのだ。西住家の人間にとつては懐かしいと思えるほのぼのエピソードでも、世間一般からすれば、嫌みなお金持ちアピールと受け取られるかもしれない。折角できた友人にみほが引かれるところなんてみたくなかった。

しかし、ここ大洗には、それに匹敵する名家のお嬢様が暮らしていた。しかも、天然度合いで言えばみほとどっこいで、桜のようにそれを止める役割もついていない。

五十鈴華は、両手をぱん、と叩いて、実に嬉しそうにおっとり微笑んだ。

「まあ、西住さんのお家にもお庭があるんですね。是非、一度伺ってみたいです。わたくしの家もお庭があつて、庭師の方が結構立派に整えてくれてるんですよ」

華の家は、華道の家元である。みほの家と比較しても、どちらも日本の伝統的な武芸における流派の宗家であり、一口に名家と言っても日本的な色の強い家柄であるなど共通点も多い。家の造りも同じ和風建築だった。

「華の家は特殊だから。普通の家には池とか木とか、そういうのはないからね」

「あら、そうなんですか？」
「お願いだから自覚して」

沙織が額に手を当てて、はあ、と小さくため息を吐いた。

きつと、同じようなやりとりを繰り返してきたのだろう。沙織の苦労が偲ばれた。

もしかすると、苦労人同士ということで話が盛り上がることもあるかもしれない。尤も、桜の場合は、幼い頃からの使用人で、沙織の場合は、純粋な友人関係としての世話焼きである。沙織の人柄のよさが垣間見えた。

「でしたら、今度皆さんで遊びにきてください。自慢のお庭なんですよ」

しかし、沙織の言葉を本当の意味では理解していないのか、なおもここにこととした調子で話す華は、もしかすると大物なのかもしれない。隣で苦い顔をしている沙織にも気づいていない様子だ。

なかなかの箱入り娘感というか、世間知らず感はみほのほうがマシなように感じられた。

「悪い子じゃないんだけどね。ただ、世間様とズレがあつて」

分かります。と言ってしまったていいものか、少し悩んだ桜だった。

4話

「あら？教室の前に誰かいますよ？」

「ん、ほんとだ」

華が疑問を投げかけ、確かにその通りだと沙織が反応を見せる。

食事を終え、教室に戻っている途中だった。

みほの教室の前に、3つの人影が威圧感みたいなものを発しながら仁王立ちしている。

桜は、そのうちの1人の顔に見覚えがあったし、他の2人も写真で見ることがあった。

「…生徒会の方ですね」

生徒会長の角谷杏さん。副会長の小山柚子さん。そして、広報の河島桃だ。

尤も、桃に関しては桜も、思ってたのとなんか違う、という感想を抱いていたのだが。

というのも、杏以外の生徒会メンバーについては、杏の携帯に保存されていた写真で顔を確認したくらいである。あとは、簡単にどんな人物か杏の印象を聞いただけ。つまり、実際に会うのははじめてだった。

まあ、どんな説明を聞いたか、その詳細は置いておくとして、少なくとも扉の前で仁王立ちする桃の姿は、如何にも「デキる女性」という感じで、融通の利かない生真面目な学級委員長という印象を受けた。これがもう少し年齢を重ねていけば、バリバリのキャリアウーマンだとか、社長秘書だとかに例えたところである。桜の苦手なタイプだ。

とにもかくにも、杏の説明にどれだけ個人の主観が含まれていたのか分からない。分からないが、少なくとも桜には、とても事前に聞いていたような人物には思えなかった。杏の、一言で言うなら発泡スチロールみたいな奴、という評価は、てんでの外れのように思えて仕方がない。発泡スチロールなんて、淡々とした顔でビリビリに破いてしまいそうな怖さがあった。

それは、もしかすると気のせいだったかもしれないが、きらんと桃の片眼鏡モノクルが光って、そして、桜たちの方へぐるん、と勢いよく視線を向けられた。

そして、つかつかつか、と桃が代表するかのよう歩いて近づいてくる。杏が、あ、と何か言いかけたのが見えた。

並んでみると、遠目に見たよりは大きく感じなかったが、それでも女子にしては背が高い方だろう。だいたいまほと同じくらい。悲しいかな、桜よりも少し高いようだった。

「西住みほだな」

その声音は、本当に同じ学生かと思うくらい冷たいものだった。ともすれば、見下されていると感じたかもしれない。しほが公人として使う声音に近いものがあつた。

そのあまりの迫力に、桜の警戒のレベルが上がる。自然とみほを庇うように前に立った。

すると、ますます桃の視線が鋭くなり、つられて桜の表情も険しくなる。一触即発という空気があたりを漂った。

「何のご用でしょうか」

「…なんだ、お前は」

桜が訝しむような口調で尋ねると、不快感を隠さない調子で桃が言葉を返した。

ほとんど背丈の変わらない二人が（正確には桜の方が少し小さい）、剣呑な雰囲気の中睨みあっていた。

片や横暴なことでは有名な生徒会の役員で、片や転校してきたばかりの華奢でお淑やかと評判の大和撫子である。しかも、一段と大人しそうな見た目の少女を庇っているという立ち位置であれば、どちらが悪役かということは誰の目にも瞭然だった。

それを見て、華だけは少し、憧れのタイムマンが始まるのかしら、と内心わくわくとしていたが、至って常識人な沙織や柚子はどうしたものかと慌てていたし、杏は、何をしてるんだあいつらは、と軽く胃が痛くなるのを感じていた。残念ながら、このあともっと痛くなる。

杏が桃に伝えていないのは、西住みほが黒森峰を転校した詳しい理

由と、桜が男であるという2点のみだ。つまり、桜が消極的には味方であり、不興を買わないほうが賢いということは、いくら桃だつて理解しているはずであった。尤も、ハリネズミのような性格の桃のことだ。自分を強く見せようとするのはいつものことだし、生徒に対して高圧的に接するきらいがあった。この事態を予想できなかつたのは杏の失敗だつたとも言える。

杏は、もつときつく言い含めておくべきだつた、と後悔した。一人先行させたのも失敗だつた。

ちなみに、桜の件について敢えて話をしなかつたのは、桃に隠し事が向かないと判断したためであるが（桃の失態で桜の性別がバレるという未来がありありと想像できた）、みほの転校の理由を教えなかつたのは、その境遇を知つた桃が情に絆されてしまうことを恐れてのことだつた。短絡的で直情的で、癩癩持ちのとんでもない阿呆だが、そういう真つ直ぐさは杏も嫌いではない。そういう所に、少なからず杏も救われてきたのだ。ただ、折角決意したところを隣で騒いで掻き乱されては堪らない、というのも事実だつた。

「かーしま、下がれ」

「はっー」

杏が言うと、意外なほどあっさりと桃が横に退いて、のっしのっしと杏と柚子が近づいてくるのが見えた。

顔を合わせたのは久しぶりだが、やはり小さいな、というのが桜が杏に受ける印象だ。

「いやあ、悪かつたね、うちの河嶋が」

へにやあ、と笑いながら杏が言う。謝っているのだから、からかつているのだから、いまいち判断のつかない飄々とした口調だつた。西住の家ではもう少し堅い口調だつた気もするが、たぶんこちらが素の口調なのだろう。演技とも少し違う、相手に合わせた口調というやつだ。

敢えて、桜はそれをしなかつた。

「私、犬の散歩は手綱リードを手放さないのが、最低限のマナーだと思うんですよね」

「だからごめんつてば。許してよ」

思わず語気が強くなった桜に対し、杏の飄々とした態度は変わらな
い。まあ、ここで突然弱腰になつても不自然だし、杏にすれば部下かわしまの
前ということもあつた。

すると、きよとん、とした顔で桃が言葉を挟んだ。

「…会長、この少女はどうして突然散歩の話を？」

声は大きくなかつたので、聞こえたのは杏と桜だけだつたかもしれ
ない。沙織や華にも声が届いていたら、桃のこれまで作つてきたイ
メージは台無しだつた。

その瞬間、桜も桃を警戒する気持ち薄れ、杏の言つていたことが
何となく分かつたような気がした。

言つてしまえば、杏の話した「残念なやつ」という言葉の表現が
しつくりきたのだ。しつかり者だとか、怖い相手という印象がきれい
さっぱり霧散していくのを感じる。発泡スチロールという表現も、な
んとなく理解できた。色を塗れば立派なコンクリ塀に見せることも
できるが、少し近寄ればハリボテであると簡単にバレる。

杏を見ると、笑つているのは確かだが、その表情の中に疲労のよう
なものがうつすらと感じられて、桜は少しだけ杏のことを気の毒に
思つた。

「心中お察しします」

「分かつてくれるかい？」

すっかり毒気を抜かれた桜が、杏のことを慮るような発言をする
と、幾ばくか真剣なトーンで言葉が返された。

しかし、桃の反応は芳しくない。

桜と杏が分かり合つているなか、それでも彼女らが自分のことにつ
いて話しているとは夢にも思つていない桃である。挙げ句、会長は犬
好きだつたのだろうか、知らなかつた、などということを考え始める
始末だ。

「はあ」

何も分かつていなさそうな桃の様子を見て、杏と桜は二人揃つてた
め息を吐いた。

すると、くい、くい、と制服の裾を引っ張られた。

誰かと思えば、当然みほである。

「桜ちゃん、その人と知り合いなの？」

それは、あまりに予想外な質問だった。

桜から間抜けな声が漏れる。

「へ？」

「なんだか、仲良しそうに見えたから。お友達？」

真ん丸の可愛らしい目を上目遣いにして、まっすぐと桜に向ける。じいーつ、という効果音が聞こえるくらいに見つめられた。お友達だったら紹介して？という声が聞こえるようだった。

桜は、そんなみほの仕草を、可愛いなあ、地上に舞い降りた天使かな？こんな可愛い人のお世話ができる自分は世界で一番の幸せ者なんじゃないかな？と益体もないことを考えながらも、杏に対して随分と親しげに話しかけてしまった失敗に今更ながら気がついた。桜は転校生であり、杏は在校生、それもひとつ学年の違う相手で、そのうえ生徒会長だ。軽口を叩くにしては、相手が悪い。

「えと、これは」

桜は盛大に焦った。

まさか生徒会長と談合が行われているなどと、みほに疑われてはたまらない。

桜は所詮みほのお世話係で、杏の事情も聞いているから力になってあげたいとは考えているが、何においても優先されるべきはみほ自身の意思である。余計な疑いのせいでみほの選択に影響を与えてはいけないし、万が一嫌われたりしたらこの世の終わりだ。

これでみほは馬鹿ではない。寧ろ、察しはいい方だ。普段は細かいことを気にしていないというだけである。そうでなければ、戦車隊を率いるなんて、とてもやってられないだろう。

桜は、見た目にはにこにここと笑顔を浮かべているが、内心では思考回路がオーバーヒートするほどの勢いで言い訳を探していた。尤も、桜はあまりアドリブの得意な方ではないし、みほに嫌われるかもしれないという心配があつては、いつも以上に思考は空回りをした。

「いやあ、井手上ちゃんとは、この前廊下で話したんだよ。生徒会だか

ら、転入生のことは知ってたし。色々相談事もあったみたいだし。ね、井手上ちゃん」

さりとそれらしいことを杏が語った。焦った様子もなく、実に自然な振る舞いのままである。ともすれば、本当にそんなことがあったかもしれないと桜が錯覚するほどに。

桜と杏は、桜が転入してきてからは一度として会っていない。西住の家で会ったきりで、あとは何度かメールをしたくらいだ。電話で話したことも皆無である。

桜には、杏の意図するところは理解できていないが、自分でうまく言い訳が思いつくわけでもない。ましてや、これを否定することも余計にみほの杏たちへの疑念を深めることになってしまうと考えた。

桜は、杏の騙りに乗っかることにした。

「あ、はい」

「そのあとはどう？学校には慣れた？」

「お、おかげさまで」

そいつはよかった。そんなことを言って、杏は笑いながら何度か小さく頷いた。

あまりに堂に入った演技であり、杏の言葉を疑うものは誰もいないだろう。実際には、本当のことなんてひとつも話していないというのに。桜は流されるままである。

それにしても、だ。西住の家での一件からも分かりきっていたことではあるが、杏のそれは並大抵の度胸ではない。一組織の長ともなると、これくらいの胆力がなければやっていけないのだろうか。桜は、見習いたいと思うと同時に、真似できたら全うな高校生としてはダメなんじゃないか、と複雑な感情を抱いた。

杏が聞けば、なんだかんだ涼しい顔をして女子校に紛れ込める井手上ちゃんには言われたくないかなあ、と言ったに違いない。その原因のひとつが自分にあることは棚にあげて。

尤も、杏の肝が座っているからといって、その内心が平静であるとも限らないのであるが。

「それで、本題なんだけど。井手上ちゃんの後ろにいるのが、西住ちゃ

ん。そうだよね」

「え、えと。西住みほです」

「角谷杏です。よろしくね、西住ちゃん」

杏は、ますます笑みを深くして、みほに向けて右手を差し出した。流石にこの流れでみほを庇い続けるのも失礼に見えると思い、桜はそつと脇に避ける。すると、おずおずとみほが杏の手を握った。

「ええっと。よろしく、お願いします」

どこか、相手の反応を伺うようならしくない仕草である。みほの表情に笑顔はなかった。

しかし、それも仕方ない。みほからすれば、全くの初対面の相手であるし、何より杏は先輩で生徒会長だ。そのうえ、何やら自分を目当てに待たれていたと気づいてしまつては、全くの無用心というわけにもいかなかった。

そして杏も、おや、と思った。

桃に対する桜の第一印象ではないが、これでは聞いていた話と違う反応だ。

桜やしほから聞いていたみほの性格は、快活で、ともすれば奔放とも呼べるほどであると聞いていた。曰く、小学生がそのまま高校生になったようである、と。とりわけ、初対面での距離感の詰め方は、物怖じとか人見知りという概念を母のお腹しほの中に忘れてきたと言われるほどだった。事実、大洗に転入してすぐにクラスに馴染み、その日のうちにクラスの大半と連絡先を交換したというのだから大したものである。噂は杏の耳まで聞こえてきた。

さて、どうしたものか。そんなみほにすら警戒されたのだ。

杏は、どのように話を切り出したものか迷ってしまった。

当初は、正面から策を弄せずお願いをしようと思っていた。

しほから頼まれていたということもあるし、あまり強引にことを進めるのは心象もよろしくない。無理を言っても、モチベーションは上がらないと思われた。ただ戦車道を復活させればいいという問題ではないのである。やるからには、本気になつてもらう必要があつた。

しかし、こうも警戒をされてしまつては、単なるお願いでは弱い

ではないか、と思い直しているのが現在だ。

思えば、桃の態度もよくなかった。桜と剣呑な雰囲気になってしまったのは間違いないくマイナスポイントだ。もしかすると、みほには悪い印象を与えたかもしれない。

尤も、最初からそれを予測できなかった自分が悪いのだし、間違っても桜に文句を言うつもりはなかった。桃は、もう何というか今更だ。飼い犬の罪は、飼い主の責任である。

すると、あえて露悪的に振る舞うということも考えた。

既に生徒会は横暴な組織という一般生徒からのイメージもある。桃の態度からも自然に映るだろう。脅迫とまではいかないが、無理やりやらされている、という逃げ道を作ってやったほうがうまくいく場合もある。特に「家」という柵を気にする相手なら有効に思えた。

ただ、程度を間違えてしまえば、桜に嫌われるという心配があった。そうなったとき、みほが戦車道をすると言っても、反対をしたり、最悪しほに連絡をして連れ戻させたり、といった事態にもなりかねない。ともすれば、本人に嫌われるよりも厄介だ。

杏は、ますます胃がキリキリと痛くなってきた。

桃や柚子の前だから不敵に笑っていられるが、本音を言えば、今すぐに全部を投げ出したい気分である。よりにもよって、なんで今年なんだ。廃校の話も、来年や去年だったらよかったのに。とんだ貧乏くじだ。そんな悪態を我慢していた。これは今日に始まった話ではないが。

当然ながら、そんな内心は、おくびにも出さない。

角谷杏は、虚勢を張るのは大得意なのである。

「そんなに緊張しないでよ。ちよっとお願いしたいことがあるだけなんだから」

自分で言ってる、無茶を言ってるなあ、という自覚はあった。

果たして、杏の選んだ手段はお願いをするという当初の方針を踏襲するものだった。

ただし、ばか正直にお願いをするのでは芸がない。一捻りを加えるつもりだ。

西住みほは、子供である。

それは、しほや桜の評価だった。

杏は西住みほをよく知らないが、二人ほど西住みほに詳しい人間は、他には姉の西住まほくらいしかいないだろう。世界で西住みほに最も詳しい三人のうち二人が意見を揃えたのだから、きつと間違いないと判断した。

杏は、西住みほを子供と見立てて、どうすれば戦車道を進んでやるだろうかと考えた。

幸い、杏には子供をノせる手段に心当たりがあった。

というのも、ごく身近に、子供のまま大人になったという人物がいることに気がついたからだ。

言わずもがな、河嶋桃である。

必ずしも同じというわけではないだろうが（むしろ同じであっては困る）、傾向が似ているのなら、イメージはしやすい。桃を動かすのは簡単だ。

つまり、挑発するか、おだてるか、である。

尤も、桃と杏の関係性に限れば、それは陶酔の域であるから、大抵指示ひとつで素直に動いてくれる。偶にうまくいかないのは、桃の暴走か、桃の阿呆さを計算しきれないときがあるからだ。しかし、最初から桃が従順だったかといえ、そんなことはない。昔を思い返せば、そういえばそんな風に操縦していた。

杏は、いくつか頭の中でパターンを考えて、最も穏当に済みそうなパターンを選択した。つまりは、おだてる、ということである。

それはこんな感じだった。

実は大洗女子学園では、20年も前に戦車道をやっていたという実績があるが、今ではすっかり廃れてしまった。しかし、文科省から数年後の戦車道の世界大会に向けて、全国の高校や大学に戦車道に力を入れるよう要請があった。協力すれば、支援もあるということと復活させようと考えているが、当然ながら戦車道の経験者は大洗にはほとんどいない。さて、困ったぞ。というところに転校してきたのが西住みほである。最初は指導をお願いできないかと思、みほの経歴や

ら、過去の試合の記録やらを調べ漁った。すると、当初の目的を忘れてすっかりとファンになってしまったのだ。特に桃などは繰り返し繰り返しみほの試合のビデオを見るような有様で、今日も緊張やら興奮やらでおかしな態度をとってしまったらしい。大変申し訳ない。しかし、どうかお願いを聞いてもらえるなら、戦車道の授業を取ってもらえないか。是非是非、一緒に戦車道をやってもらえないか。私たちにはあなたしか考えられないのだ。

とまあ、要約するとそんなことを話した。

特に、あの時の試合がどうだとか、あの作戦は見事だった。あなたが考えたのか、素晴らしい。とか。そんな風に褒め称すと、みほは頗る機嫌をよくして、すすんで試合の解説をはじめたりした。突然のことに沙織や華はぼかんとしている。桃や柚子も同様だった。

そして、杏の奇特なところは、これをまったくのアドリブで話しているということだった。おだてると決めたこともついさっきのことだから、当然と言えば当然のことである。しかし、それが嘘だと分かっている桜にも、まるで杏が本当にみほのファンであるように思えてきた。

自分は戦車道については素人だから。そんな前置きで、試合や戦術については詳しく語らない。キーワードだけをあげつつあって、さも見入ったように熱く語るが、実際に詳しい情景を話しているのはみほだ。うまいやり口であると感心した。

結局、予鈴が鳴るまでの間、みほは自慢げに話し続け、杏は適度に合いの手や称賛を挟んで盛り上げた。みほも最後にはすっかりと警戒心を無くした顔で手を振って、詳しい話はまた今度、とごく自然に了承を取り付けたような雰囲気を作り、杏たちは三年生の教室に帰っていった。

嵐のような出来事も、過ぎ去ってしまえば静かな時間が生まれる。

杏たちの後ろ姿が見えなくなった頃、すっかり生徒の少なくなった廊下で、みほが桜の方へからだを向けた。その表情は、花が咲いたような笑顔だった。

「いい人たちだったねっ！」

◆ その夜、桜はしほに一通のメールを送った。

『無事、お嬢様は戦車道を再開されることになりました。』

しほからは、ありがとうございます。

非常に短いメールだけが届けられたが、受信した時刻を見て、しほの逡巡した様子が思い浮かばれ微笑ましくなった。もつと沢山のことを書こうとしたが、送る直前に書き直したのだと思われる。

しほも桜も、互いの生活習慣はだいたい把握している。メールを受信したのは、桜がそろそろ眠ろうとベッドに入った頃だった。

5話

「やあやあ、井手上ちゃん」

「どうも。ご無沙汰しています」

杏とみほが対面を果たして数日後のこと、桜は生徒会室に呼び出されていた。

呼ばれたのは桜ひとりであり、わざわざひとりで来るよう注意書があったため、珍しくみほとは別行動である。

「わざわざ生徒会室まで来てもらって悪いねえ。それもひとりで」「いえ、それは構わないんですけど……」

ちら、と桜は杏から視線を外し、別の人物のことを見つめた。

茶色の髪をポニーにした、おっとりとした雰囲気のある少女がいる。背は平均的だが体つきは恵まれており、特にその胸元の大きな二つの膨らみには桜も思わず視線を吸い込まれてしまいそうになった。

彼女の名前は小山柚子。生徒会の副会長である。

部屋の中には、桜と杏、そして彼女の3人がいた。

桜は、来客用と思われるソファに案内される。柚子がかちやりとコーヒーを運んでくれた。

前かがみになって、柚子が長テーブルにコーヒーの入ったカップを置く。首元の隙間から肌色の何かが見えそうになって、桜は慌てて視線を横に外した。

よっ、と声をあげて、杏が大きな背もたれ付きの椅子から降りる。てつこてつこと歩いて、桜の対面のソファに腰を落とした。

「さて、井手上ちゃん。ちゃんと話すのは久しぶりだね。どう？学校には慣れた？」

「おかげさまで。って、この前、そんな話をしませんでしたか？」

「廊下でね。でも、あれは誤魔化すためのお芝居みたいなものだったし。ん、ありがと」

どういたしまして。小さく声を発して、柚子が杏の前にもコーヒーを置いた。

そのまま、杏と桜が向かい合う様子が見えるような位置に柚子は座

る。桜から見れば右側で、杏から見れば左側だ。ともすれば、立会いを見守る審判のようにも見えた。お誕生日席と言い換えると、途端に楽しげな雰囲気、漂うが。

ふと気になつて、桜は部屋の中をきよろきよろと見廻した。

生徒会室というだけあつて、なかなか広いし、物も多い。壁には何やら額縁に入れられた絵画のようなものまで飾られていた。しかし、はて、何かが足りないような。

うん？と少し悩んで、桜はとあることに思い至つた。

「河嶋先輩は？」

「ああ、河嶋は人払い。あいつがいると、話がしづらいからにえー」

「ね」とも「に」とも聞こえるような絶妙に気怠い語尾で杏が言う。わざわざ人払いをするということは、つまりそういう話をしようということである。しかし、それにしても柚子の存在はどうなのか。桜が訝しむ様子を見せると、杏はひらひらと手を振つた。

「小山のことは気にしなくていいよ。西住ちゃんのこと話してるし、井手上ちゃんのこと話してる。書類仕事は、ほとんど小山の仕事だからね。河嶋と違って話も通じるし」

「あ、あははは…」

桜には何も言えなかつた。まさか、よく知らない先輩のことを影で馬鹿にするわけにもいかない。尤も、擁護することもなく苦笑いで誤魔化すあたり、口にしないというだけで、ほとんど雄弁に語っているようなものなのだ。

ところで、杏たちと話した翌日に、桃が単身、みほの教室までやってくるという一幕があつた。違う教室にいた桜は、慌てた様子の沙織に呼ばれて急いで駆けつけたのだが、どういうわけかサイン色紙を片手にみほと握手をしている光景を目撃した。前日の桃の態度を思い返して、盛大に頭の中がハテナで一杯になった桜だったが、聞けばサインをねだりに来たということである。みほは喜んでサインをしたらしい。桃は家宝にすると行って帰っていった。

「桃ちゃん、本当に西住さんのファンになつたみたいで。昔の戦車道の雑誌を集めろなんて言ってきたのよ？」

「それはそれは…」

ビデオを見せたらしいとは聞いたが、果たして何を見せたのか。そういうゲームよろしく、洗脳するようなビデオでもあるのだろうか、この生徒会には。だとすれば恐ろしいことである。先日の戦車道のレクリエーションの映像もその類かもしれない。

尤も、みほの信奉者^{ファン}が増えるということは、桜にとっても喜ばしいことである。今度、秘蔵のみほコレクションを持ってきてあげよう。「そ、それにしても、ぐっくり」

柚子のなにかを呑み込んだような音が聞こえて、急に桜は背筋が寒くなった。

気のせいか、熱心に身体中を見つめられているような気がする。頭の前からつま先まで。じっくり、ねっとり観察されるような視線を感じた。視線の主は間違いなく柚子である。

「こ、小山先輩？あの、私に何か…？」

桜は、似たような視線に覚えがあった。転校前の学校で、よくクラスメイトの男子から向けられていた視線にそっくりだ。自意識過剰というわけでは、きつとない。彼女にしたい女子ランキングに自分の名前が載っているのを見つけて以来、ずっと感じている視線だった。

「小山ー。井手上ちゃん怖がつてる」

「え、あーっ、ごめんなさい!？」

すさまじい勢いで、何度も何度も頭を下げられる。柚子が頭を下げるたび、頭のポニーが前後に激しく揺れた。さながら、ポニー自体がお辞儀をしているようだ。

「井手上さんが本当に男の子かと思ったら、その、気になっちゃって。ごめんなさい」

「ああ…」

そこまで知られているのか。考えてみれば当然だった。

桜を入学させるために、少なくとも労力を使って書類を用意してくれたのだろう。書類仕事は柚子の仕事とも言っていた。

「男がこんな格好をしていてすみません」

桜は惨めな気持ちになった。

杏は、ともすれば共犯者のようなものだが、柚子は違う。普通の女子からすれば、桜のような人間は気持ち悪いのかもしれない。しかも、ここ大洗は女子校だ。警戒されるのも当然のことである。

しかし、柚子は、そんなことないよ。と励ましてくれた。

「とつてもよく似合ってる。本当に。全然男の子に見えないよっ！」

だから自信持つて。と柚子に両の拳を握って応援されたのだが、それはそれで悲しくなるのが、男の性というものである。残念ながら、桜の性自認は男なのだ。女の子に憧れているというわけではないし、女装が趣味ということもない（それはそれとして、遊びと称してみほやまほの服を着させられることは嫌いではないが）。たまたま女らしい顔つきで生まれてしまっただけで、筋骨隆々のイケメンになりたいと憧れたりもするような普通の少年なのである。だから、当然のことであるが、恋愛の対象は普通に女の子だった。

そんな桜からすれば、柚子は大変魅力的な女の子に映った。性格ばかりは分からないが、顔、スタイル、しぐさ、匂い。そういう外見の要素でいえば、とびつきりだ。柚子に対してそういう特別な気持ちはないにしても、男の子に見えないなどと言われてしまえば、深くダメージを負ってしまうのも仕方のないことだった。男の尊厳みたいなものはボロボロである。

尤も、柚子に悪気は一切ないのであるが。

だからこそ、桜も強く言えないので厄介だったし、女の子にしか見えないという見た目も、そのおかげで女子校に紛れ込んでもバレないで済んでいるのだから複雑な気分だった。

「足も男の子とは思えないくらい細かいし、腰も、うん。ちゃんと食べてる？」

「食べてますよっ」

桜とて育ちざかりの男の子だ。普通の女子に比べれば食べる方だろう。

尤も、つい最近知り合った彼女と比べれば、流石に小食の部類に入ってしまうだろうが。あれは規格外だ。本人は、華道には集中力が

要りますから、と答えていたが、何の理由にもなっていない。

なお、完全に余談であるが、桜のウエストのサイズは、世の女性が聞いたら嫉妬するくらい細かったりする。なにせ、平気でみほのスカートが穿けるくらいだ。やはり、男子としては何かが激しく間違っている。

「スカートでの歩き方もばっちりだし、案外井手上ちゃんも楽しんだりしてねえ」

「滅多なことを言わないでください。この状況を楽しんでいたら、本当の本当に変態じゃないですか。歩き方は、みほお嬢様をいつも見えていますから。真似をするくらいは簡単です」

「いやあ、それはそれで変態っぽいと思うけどね？」

杏は、苦笑いのようなものを浮かべながらそんなことを言った。

杏にとつて井手上桜は、おおむね常識人であり、自分に負けず劣らずの苦勞人という認識である。面倒に巻き込んだという負い目もあるし、同情的と言つてもいい。しかし、ただ一点、西住みほに関する事柄についてだけは、井手上桜は結構な変人であると疑っていた。

桜は、男子高校生という割に性欲が薄いというか、女子に対して興味を持つている様子があまり見られない。枯れている、というわけではないのだろうが、あまりにも淡泊だ。それは、結果的に大洗へ桜を招き入れることになった杏にとつては好都合だった。これが普通の男子と同じだったなら、一体どんな問題を引き起こしたか分からない。

しかし、一方で、桜の西住みほに対する親愛の情は驚くほど深い。例えるなら、学生らしい純真な恋心ではなく、依存とか、執着に近いように感じられる。今のようにならんと重いことを口走することもあった。それも、本人としては無意識に。いつも見ているなど、ストーカーの常套句だ。

これは杏の想像だが、女子全般への興味のようなものが、桜の場合、全部西住みほにだけ注がれているのだと思われた。

例えば、仮に女装をせずに、みほの身の回りの世話だけを役目として大洗に来ていたとしたらどうだろう。それはそれで、桜は学園内に

盗聴器とか監視カメラとかを設置して、みほの周囲を探ろうとしたかもしれないし、みほの携帯にGPSを仕込んで居場所を把握したり、みほの登下校を電柱の陰から見張ったりということもしたかもしれない。

勿論、すべては杏の勝手な想像の話であるし、杏だって本当にそうだと信じているわけではない。ただ、そういうストーリー染みだたことをしそうな危うさが、桜からは感じられたというだけである。

実際には、年ごろの男子らしく、柚子のおっぱいにどぎまぎしたり、華の髪の毛にくらくらときていたりするのだが、杏にそれを知る術はない。まさか、実際どうよ、なんて酔っ払いのようなセクハラをかますわけにもいかないし、尋ねたところでぼろを出すような桜ではなかった。

閑話休題。

「と、ところで井手上さん。その、スカートと言えば、その中には何を？ 下着は」

柚子が尋ねると、桜は途端に遠い目になった。

桜にとってその話題は、大洗での学園生活における、触れてほしくない事柄ベスト3に入る。そもそも、女装関係はだいたい触れてほしくない話題ばかりなのだ。地雷原というか、本人の身体中に爆弾がまき付いているようなものである。爆発すれば、被害が最も大きいのは桜本人だ。

「あの、…その質問に答える前に、ひとつだけいいでしょうか、小山先輩」

「う、うん、なあに？」

柚子が促す。しかし、桜は、なにやらもじもじと言いよどむような様子を見せた。

柚子は、どうしたのだろう、と心配になり、杏は、なんとなく続きが読めたような気がして、にやにやと笑みを浮かべている。

やがて、決心したように柚子のことを強く見つめた。

「どうして、大洗の制服はこんなにスカートが短いんですか!？」

桜は、自分の太股の半分も隠せていないスカートを目指して、悲鳴のような声をあげた。

それに答えたのは杏だった。

「えー、可愛いじゃん。何か問題あった?」

「問題大ありです!内地の学校でもこんなに短い風紀委員が黙っていませんし、それに、ここは海の上ですよ!少し風が吹いただけでぱん、下着が見えそうになるじゃないですか!」

勢い余って長テーブルを叩く桜。どうどう、と宥めようとする杏の姿があつた。

「膝下とは言いませんから、せめて膝上5cmくらいになりませんか、これ」

「うーん。井手上ちゃんが制服を直すのは構わないけど、それ逆に周りから浮かない?」

「だから諦めたんです」

不思議なことに、この学校の生徒は誰もこのスカートの短さに違和感を持つたりはしないらしい。大和撫子を体現したような華でさえ、スカートの丈はみんなと同じだ。おそらくは大洗こいが女子校で、異性の目を気にする必要がないからだろう。だから、桜は幾度なくクラスメイトのパンツを見ている。いい加減に慣れた。

「で、パンツは?」

「言いたくないです。察してください。あと下着って言うってください」

桜には、変態の汚名を被る覚悟はできていなかった。

いや、言わないという時点で、杏たちにもなんとなく想像ができるというか、男物のパンツは穿いていないのだろうな、と分かっってしまうのだが。だとしても、明言することだけは避けたかった。言わば、シユレーディングのパンツである。

しかし、そんな桜の諦めの悪さを馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばすように、杏はけたけたと声をあげて笑いだした。

「あつはつは!パンツパンツ!あんまり女子に幻想を抱かない方が

いーよ、井手上ちゃん。女子だつて下ネタは言うし、いろいろとだらしがないからね。特に、ここは女子校だから。今後が辛いよ?」
「いえ、既に思い知っています」

女系の西住家で幼い頃から生活してきた桜ではあるが、西住の家はどちらかというとお堅い気風の家である。私生活がだらしないということであれば、みはやまほで思い知っているが、それも片づけが苦手とかそういうレベルの話で、こども開放的な雰囲気には覚えがない。あけっぴろげ、とでも言えばいいのだろうか。とにかく遠慮がなく、雑である。転校初日から、実は結構なカルチャーショックを体験している桜だった。

「だとしても、角谷会長たちは私が男だつて知ってるわけじゃないですか。気になりますか?」

「全然?」

あっけらかんとした態度で杏は笑う。柚子は、私は少し、と遠慮がちに呟いた。女子としては、柚子が正しい。

「見た目は完全に女の子だもんねー。物腰も柔らかいし、男つてことも忘れそうになる。あとは、そうだねえ。おっぱいがないね!」
「あつてたまりますか!」

桜は吠えた。

杏は、あごに手をあてて、じろじろと桜の上半身を眺める。自然、桜が両手で自分の胸を抱くようにして身じろぐ仕草を見せた。やはり、これが男というのは間違っている。仕草は完璧に女子のそれであり、その場に居合わせた柚子などは桜に保護欲をかきたてられた。

「ふうん。女装の定番と言えば、胸に詰め物、つて聞いたこともあるけど、それはしてないんだねえ」

「なんかもう、そこまでやったら終わりのような気がして」

何を今更、という言葉在必死で我慢する杏と柚子。傍目にはスカートを穿いて女装をしている時点で行くところまで行っているような気もするが、本人的には譲れない一線のようなものがあるのだろうか。たぶん。

「まあ、これでも全然違和感ないから凄いですよねえ。お化粧とかも

してないの?」

「変な注目を集めたくなかったので。風紀委員の目もありますし」

「ああ、それは正解だったかもね。うちの風紀委員は厳しいから」

口頭注意くらいで済めばいいが、徹底的に調べられたら、どんなぼろが出るか分からない。身体中を触られたりしたら間違いなくアウトだ。杏も人のことを言えないが、強引などころがあると有名だった。

「ま、井手上ちゃんならそんなに心配はしていないけど、くれぐれもバレないようにしてよ? 廃校の他に、大きな問題は御免だからね」

「言われなくても分かってますよ。私だって、警察のご厄介にはなりたくありませんから」

ため息を吐きつつ、桜が言った。

桜としても甚だ不本意ではあるが、女子校に通うと決めた以上、絶対にバレるわけにはいかない。最悪の場合、西住の家にも迷惑がかかるのだし。それに、警察に捕まってしまえば、以降みほの世話をすることは許されなくなる。何せ、世間からは女装をして女子校に入り込んだ変態と見られるわけだ。事情が事情とはいえ、西住の家にも世間体というものがある。

尤も、事情を知っている杏や柚子の目から見ても、桜のそれは、とても男とは信じられない容姿である。人前で裸にでもならない限りはバレることはないと思われた。もしかすると、上半身を晒したところでバレないかもしれない。

「そういや、着替えとかトイレはどうしてるの? まさか、クラスメイトの前で脱ぐわけにはいかないよね」

「体育の時は、体が弱いと先生に話して見学にしてもらってます。そのため書類も、奥様に用意してもらいましたし。だから、着替えの必要はないんです。でも、お手洗いは、その」

微かに頬を赤らめる。その反応で杏も柚子も事態を察した。

「ま、トイレは個室だし、井手上ちゃんなら変なこともしないだろうから、別にいいんだけどね」

「変なこと?」

「ほら、盗撮したりとか」

「しませんよ、そんなこと……」

呆れたように桜が言った。

その反応に、まあ井手上ちゃんならそう言うだろうね。と一応の安心を感じた杏である。

「ところで、私を呼んだ用件って、結局何だったんですか？まさか、私の近況を確認するため、ということはないでしょうし」

「うん。それも用件のひとつなんだけどね。本題としては、戦車の話かな」

「戦車。戦車道のことですね。それで、結局何人くらい集まったんですか？」

「えーっと、何人だっけー。小山」

でろん、とだらしなく椅子に身体を預けた杏が間延びした口調で椅子に尋ねる。間髪を入れず柚子が答えた。

「井手上さんを含めて19人です。もう締め切りも過ぎましたし、これ以上増えることはないかと」

「だつてさー、井手上ちゃん」

「あのおう、それ、前にも言いましたけど」

「うん？ああ、わーってるって。井手上ちゃんは戦車には乗せない。西住師範との約束だしねー」

杏がぱたぱたと手の平を揺らした。

桜が気にしたのは、戦車道のメンバーに桜がカウントされていることについてである。

戦車道をするにあたって、現状集まった人数ではとても足りているというとは言えないのが実情だ。それこそ、大っぴらに誰でもいいと言わねにもいかないが、素人であってもやる気のある生徒なら大歓迎である。まずは頭数を揃えることが先決なのだ。

しかし、桜には戦車に乗れない事情というものがあつた。

桜とて、戦車道に興味がないというわけではない。むしろ、一般人よりも戦車道に縁深い家で育ってきたのだし、なにより、敬愛するみほやまほが心血を注ぐ競技である。訓練や試合の様子をみほから聞

くのは桜の楽しみのひとつだったし、実際に足を運んで応援に行ったこともあった。しかし、しほは桜が戦車に乗ることをけして許しはしなかった。どころか、戦車道に関わる事柄から徹底して遠ざけようとした節がある。

それは、やはり戦車道は女子の武道だということが深く関係した。仮に桜がその道に進みたいと思っただころで、男子というだけの理由で将来の道は確実に閉ざされる。プロアマ問わず、選手はおろか指導者でさえ男性の姿は一つもないのだ。ならば、最初から関わり合いなど持たせるべきではない。というのが、しほの考えであった。

そのことを桜はよく理解していた。理不尽であると思っただころはない。桜は早熟で、賢い子供だった。

ともすれば、観戦も禁止されそうなものだが、桜が見たいのは戦車に乗っているみほやまほの姿であつて、戦車そのものではなかった。いくら観戦を繰り返したところで戦車にも戦術論にも詳しくならなかった桜を見て、しほも観戦くらいはいいか、と許したようである。

「二応、私たちもやるつもりだから、全部で22人だねえ」

「へえ、生徒会の皆さんも参加するんですか」

「そりゃあ、言い出しっぺだからね」

桜が言うのと、杏は当然とばかりにうなずいた。

しかし、直後に肩を竦めてこう切り出した。

「と言っても、あんまりでしゃばらないようにするつもりだけどね。西住ちゃんにはのびのびとやってほしいし。うちらが旗振っちゃったら、西住ちゃん、やりづらいでしょ？」

確かにみほは大洗唯一の戦車道経験者だが、二年生で、しかも転入してきたばかりの、言っしまえば新参者だ。たいして生徒会は3人ともが3年生である。遠慮、をするかは置いといたとしても、他の生徒がどう思うかは分からない。ならば、頼りない生徒会を演出して、実績のあるみほに権限を委譲するという流れのほうが混乱も少ないだろう。尤も、演出するまでもなく、早々と桃の仮面ははがれるだろうが。

「その配慮はありがたいですが、対外的な折衝はお願いしますよ。お

嬢様も、そういうことは経験がありませんから」

「勿論勿論。その辺は河嶋に任せてるよー」

「え?」

桜は、何か聞き間違いをしたかと思った。

「そんな顔をしなさんな。井手上ちゃんの心配も分かるけど、あれで広報としては優秀な奴だね。イベントの企画、手配、宣伝。まあ、その辺りは意外とうまくやれるんだよ。ただ、戦車道のこと、つてなるとはじめてだから、分からないことだらけだろうし。井手上ちゃん、サポートよろしくね」

杏がにしし、と笑った。

杏の様子に嘘は見えない。尤も、息を吸うように嘘をつくのが杏の得意技だ。嘘だったとして、桜に見抜けるとは思えない。嘘を嘘と見抜けない以上、嘘を言っていないと信じるしかなかった。

「会長がそうおっしゃるのなら、信じますが…。でしたら、そうですね。できればエキシビションのようなものを早めにやりたいです」

「ほう、その心は?」

「お嬢様が戦車にお乗りになる姿を見たい、というのもあります。一番は、それが手っ取り早いからです」

「手っ取り早い?」

「どんなに西住流の娘。黒森峰の元副隊長、と口で言うよりも、一回見せてしまうほうが説得力があるでしょう? 相手は素人ですから、万が一ということもありませんしね」

「おお、黒い黒い」

桜が、にやりとあくどい笑みを浮かべると、杏がそれを囁し立てる。じゃあ、それでいきましよう。とスケジュールを組み始めるあたり、柚子も大概イイ性格をしているようだった。

「それと、履修者と戦車のリストがあれば見せてください。軽く周囲を洗います」

「ああ、うん」

杏は軽く桜の発言にひいていた。杏の想像は、けして想像というわけではなかったのかもしれない。

すると、おずおずと柚子が桜に話しかけた。

「ええと、ごめんね。井手上さん。履修者のリストはあるんだけど、その」

「どうしました、小山先輩」

「あのね。戦車のリストはないの。昔使っていた戦車の記録はあるんだけど、ほとんどが売られてしまつて。でも、その数が合わないの。売つたり、処分したりすればその書類があるはずだから。だから、たぶん、どこかにはあるんだと思う」

「う、ううん？あー、つまり？」

桜は嫌な予感がした。予感というか、空気から察したようなものだが。

杏が、あつけらかなとした口調で言った。

「戦車の実物はいっこだけ。あとは、行方不明だね」

途方に暮れるとはこのことだった。

6話

「あれ、この子……」

戦車道の履修者の一覧をぱらぱらと捲って眺めていると、見覚えのある名前が見つかった。

尤も、仲がいいというほどの相手ではなかったが。というか、まともにしたこともない。たまたまクラスメイトだから、という理由で覚えていただけである。

「どうかした？」

桜が手を止めたことに気がついた柚子は、桜の近くまでやってきて、徐に椅子の後ろから桜の眺める履修者のリストを覗きこんだ。

ふわあ、つと甘い香りが広がる。ともすれば、ほんの少しで柚子の髪が桜の頬に触れるほどの距離だった。桜は、気持ち体をずらして、柚子にリストが見やすいようにしてやった。

柚子は、桜が動いたことに気づいていない様子だった。

桜は、一瞬だけどう言っただけのものかと悩んだが、気になった以上言わないのもなんだか収まりが悪い。結局は言うことにした。

「小山先輩、そういうの気を付けたほうがいいですよ」

「へ、なに？」

柚子は、まったく無意識のようだった。

桜は、差し出がましいとも思ったし、男の自分が言うのはいかにも気持ちが悪くとも思ったが、柚子は来年には高校を卒業し、順当にいけば大学生になる。勿論、柚子が女子大学に進学するということも考えられるが、いずれにしろ異性と交流する機会が今よりも増えることは確かだろう。知った仲でもないが、これから世話になる相手だ。忠告をするくらいはタダである。嫌われたら、そのときはそのときだ。

「先程も言いましたけど、こんなナリでも私は男ですから。男にあまり無防備に近づくの、よくないですよ。先輩は大変可愛らしい方ですし、気があると思って、勘違いをされても困るでしょう？」

しばらく、何を言われたのか分からない。そんな顔で、柚子は桜のことを見つめる。

やがて、顔中を真っ赤にして、勢いよく飛び退いた。

「か、か、か、かわ…っ！」

なにか信じられないことを言われた、そんな様子だった。息の仕方を忘れたかのように、延々、口をぱくぱくと開けたり閉じたりを繰り返している。顔の色も相まって、夜店の金魚を連想させた。

桜も、いくらか気味悪がられるくらいのは覚悟していたが、それにしたってあまりにもオーバーなりアクションである。桜にしてみれば、当たり前のことを言っただけのことなのだが。

柚子の容姿が優れていることは、誰の目にも明らかだ。桜でなくとも、男なら見惚れるのは当然のことだし、可愛いというのはお世辞でも何でもない。これだけ容姿が優れていれば、告白のひとつやふたつ、受けたこともあるだろうに。

そこまで思い至って、そういうえば大洗は女子校だったということに気がついた。

つまり、沙織と同様に、異性に対する免疫がないのである。

ますます将来が心配になった。

「ぶっ、あっはっはっ！こ、小山っ！かおっ、顔がっ、茹で蛸みたいになってるよ！はっはっはっ！」

ひいひいひい、と腹を抱えて杏が笑う。ともすれば、そのままよじきれてしまいそうだ。

ますます柚子が体を小さくさせた。

ばんばんばん、とソファの空いたところを叩く。一頻り笑ったあと、杏はすっかり冷めてしまったコーヒーに手を伸ばした。

「いやあ、笑った笑った。やるねえ、井手上ちゃん。こんなに小山が取り乱すの、はじめて見たよ。意外に初心なんだねえ、小山」

杏は、笑いすぎで目元に浮かんだ涙を指で拭いながら、にやにやと意地の悪い笑みで柚子のことをからかう。柚子には何かを言い返す気力はないようだった。

「ずずず、とコーヒーを飲んで、その苦さに顔をしかめた。」

「ま、青春は大いに結構。好き合うなり付き合うなりするのはふたりに任せるけど、その前に面倒事にも付き合ってもらわないとね」

「っ、つきあつ!？」

すつ頓狂な声をあげたのは柚子である。

いい加減うんざりとした桜は、杏のことを責めるようなじとーつとした目で見つめた。

「会長、話が進まないのですが」

「あー、うん。小山をからかうのはまた今度にするよ。あんましやると、後が怖いしねえ」

にはは、と苦笑いのようなものを浮かべた。

温厚な人間ほど、というのによく聞く話だ。

幸い、杏は見極めることがうまいので、柚子を怒らせたことはない。しかし、桃がまずいことを言って柚子を怒らせた場面は何度か見たことがあつた。確か、一言も口をきかなくなつて、終いには河嶋が泣き出してしまったのだった。

はじめの頃は、まさか柚子が桃に対してあんなに怒るとは思わなかつたから、杏もどうすればいいか分からなくなつて涙が滲んだことを覚えている。これでこの関係もおしまいか。そんな風に寂しくなつたものである。

柚子は、静かに怒るタイプだった。

「それで、話は戻るけど、リストを見てどうかしたの、井手上ちゃん。知り合いでもいた？」

「いえ、知り合いというか、同じクラスの人がいたので」

「ふうん、お友だち？」

「いえ、話したこともないです」

しれつとした調子で桜が言い放つ。すると、杏がまた声をあげて笑いだした。

杏という少女は、意外と笑い上戸なのかもしれない。

「そういうところ、結構冷たい人間だよね、井手上ちゃん。それで、ええと。同じクラスってことは、井手上ちゃん何組だっけ？」

「C組ですね。2年C組」

「C組、C組、つと。へえ、この子が」

杏もテーブルに広げられた紙束の中から一部を拾いあげて文字を

追った。そこには、履修希望者の名前と所属のクラスが書いてある。2年C組。その文字列が、井手上桜の隣以外にもうひとつ見つかった。

「秋山ちゃん。秋山優花里ちゃん」

声に出してみても、杏には聞き覚えのない名前だった。



秋山優花里という少女は、いわゆる人見知りというやつだった。

というのも、彼女には友人らしい友人がおらず、同世代の相手とも何を話せばいいのかまるで分からなかった。昔はそんなこともなかったと思いたいのだが、今ではもうすっかりだ。

彼女は、幼い頃から戦車に興味があった。それは、並々ならぬ、と形容してもいいほどで、彼女の部屋にはたくさんの戦車グッズが溢れかえっている。それらのほとんどが、少ない小遣いをやりくりして買っただけの戦利品のようなものだった。

親が特別戦車に興味を持っていたというわけでもない。むしろ、せっかく集めた模型や雑誌類を、こんなに沢山あっても邪魔だから、と捨てられそうになったこともある。テストの点が悪かったら、と人質(?)に捕られるのもいつものことだ。

あまり女の子らしい趣味でない、と理解を得るのも難しかった。

世間では戦車道というスポーツがあったが、いかんせんマイナーだった。それよりも野球やサッカーという球技の方がよっぽどメジャーだったし、バレーボールや卓球など、女性が活躍するスポーツも他にいくらかもあった。ニュースで取り上げられることは少ないし、テレビでの中継もほとんどない。

それでも、優花里が最も熱中したのは戦車だった。

当然ながら、そんなに熱中する戦車のことは他人にも語りたくなるものだ。

小学校に入ったばかりの頃、優花里は近くの席のクラスメイトに熱く戦車についてよく語ったものだった。

低学年のうちは、まだよかった。耳を傾けてくれる人もいたし、戦車に興味を持って一緒に盛り上がってくれる人もいた。

しかし、優花里は生まれも育ちも大洗の学園艦の上だ。戦車道なんてとつくに廃れていた、大洗の学園艦である。当然周りに戦車など動いていないし、戦車道をやっている人もいなかった。懐かしいと語るのは、優花里の親よりも上の世代になる。

優花里以外のみんなは、そのうち戦車に興味を持たなくなった。子供の興味関心など、移り変わるのは早いものだ。どれほど優花里ひとりが熱烈に語ったところで、実際に目にするともなければ自然と興味は薄れていく。

もつぱら話題は、流行りのドラマだとか、歌やおしゃれの話にシフトしていった。その話に、悲しいかな、優花里はついていけなかった。すると、優花里はますます、ひとりの時間を戦車に費やすようになった。熱心に雑誌を読み漁り、戦車のスペックを頭に叩き込んだ。模型を組み立てては、それを一日眺めて過ごしたこともある。

友人などできるはずもなかった。

ならば、戦車道のある学校に行けばよかったのでは、と思われるかもしれない。しかし、前述のとおり、優花里は生まれも育ちも大洗の学園艦だ。内地からやってきた他の学生らと違い、実家がそもそも学園艦の上である。また、優花里の家はけして裕福というわけでもなかったし、そのことを優花里もよく知っていた。たまの遠出が精一杯の贅沢だ。家に余計な負担をかけるような選択は、優花里にはできなかったのである。

これが、内地に家があったなら、どちらにせよ一人暮らしになるのだから、と割りきることでもできただろうが、もしもの話をしても仕方がなかった。

高校に進学して、ああ、これからもひとりで退屈な3年間を過ごすのか、そんな風に思った。今さら、クラスメイトの話題についていけないはずもないし、興味を持つこともできない。あからさまな苛めがあったわけではない。その点は幸いだった。ただ、相手にされないだけ。透明人間のように毎日を過ごした。

空虚な一年間が過ぎて、優花里は二年生になった。

高校の生活では、何も変わらない。せめて内地の大学に行って、戦

車道関連のサークルに入ろう。そのために進学に困らない程度の学力をつけよう。それだけが学校に通い続ける理由だった。自分が変わることにやなくて、環境が変わることに期待した。

転校生がやってきた。

転校生は、井手上桜という名前だった。

「学園艦での生活は初めてなので、色々教えていただけると嬉しいです。どうぞ、よろしくお願いします」

綺麗な人だった。

背は、平均か、女子にしてはやや高い方だと思った。おそらく、160よりは大きいか。体つきは華奢だが、不思議と頼りないという印象は受けなかった。むしろ、姿勢がよく、仕草も一々気品があつて、優雅とか、格好いいという印象を受けた。もしかすると、いいところのお嬢さんなのかもしれない。

髪は夜空のような漆黒で、肩口に届かないくらいに短く切り揃えられている。しかし、輝くような艶があつて、よく手入れをされていることが遠目にも分かった。

そして、顔立ちは驚くほど整っている。

大きくたれ目がちな目元は、淑やかさとか奥ゆかしさというものを感じさせたし、シミひとつない白い肌は絹のように滑らかで、きつと触れれば泡のように柔らかいのだろうなと思わせた。

彼女は、あつという間にクラスの人気者になった。

ともすれば、その整いすぎた容姿は、異質に映つたり、やつかみの対象になつたりするものだが、彼女にその心配は無用だった。

彼女は、容姿だけでなく、性格までも優れていた。

誰に対しても笑顔で応対し、決して相手を否定するようなことを言わなかった。知識もあつて、流行にも詳しかった。

このうえ、趣味が料理や裁縫だと言うのだから、神様の鼻屑もここに極まれり、だ。大和撫子は絶滅していなかったのである。

優花里も、彼女と話してみたいと思つた。

あつという間にクラスに打ち解けた彼女を見て、彼女なら、こんな自分のことも受け入れてくれるんじゃないかと思つたのだ。

戦車に詳しくければ最高だが、知らないなら知らないで話を聞いてくれるだけでも構わなかった。

けれど、長い孤独ぼっちという期間が、優花里から話しかける勇気とか、そういうものをすっかり奪ってしまっていた。

結局、桜が転校してきてから一週間以上、優花里には桜と話すきっかけが見つけられず、横目で桜の姿を追いかけるだけの日々が続いた。

「あもう、秋山さん」

いつも通り、今日も一日が終わる。放課後になって、あとは帰るだけだった。

不意に声をかけられた。目を向けると桜がいた。

「い、井手上さん!?!」

まさか話しかけられるとは思っていなかった優花里は、まだ人の残る教室で派手に驚いてしまった。椅子から立ち上がる音が響き、注目が集まったのを感じる。ただ、おかしな呼び方が出なかったことに心底安堵した。

すると、ふわりと桜が笑った。

「ああ、よかった。名前、覚えててくれたんですね」

それは、寧ろ優花里の台詞だった。

片や、クラスの人気者。片や、クラスの日陰者。ともすれば、優花里の名字を知らないクラスメイトだっているかもしれない。桜にクラスメイトだと認識されていたことにも驚いているくらいだ。

しかし、優花里が本当に驚くのは、ここからだった。

「もし、よろしければ、このあと一緒に帰りませんか」

教室中のざわざわが、ぴたっ、と止まった。

そして、え?という言葉がどこから聞こえる。

それは、優花里の口からだったかもしれないし、他のクラスメイトからだったかもしれない。ともかく、そんな小さな呟きが聞こえてしまいくらいには、教室の中は静まりかえっていた。

嵐の前の静けさ、という言葉があるが、それはまさしくこんな状況をさすのだろう。

やがて、たくさんの叫び声のようなものが響いた。



「あの、よかったですか?」

「はい?何がです?」

桜たちは、混乱に陥った教室を見捨てて、さつさと帰路についていた。

優花里は、誰かと一緒に帰るなんて小学校の集団下校以来である。何を話していいのかわからない。

ただ、突然の桜の行動には疑問のようなものを感じていた。何より教室中があんなことになったのだ。質問をしても、おかしいことではないと判断した。

「だって、いつもはA組の西住、さんと一緒に帰ってるじゃないですか」

噂話とか、そういうことに疎い優花里でも知っているくらいのことだった。

すると、いかにも恥ずかしい、という表情を桜がつくった。

「ああ、知られていたんですね。…いいんですよ、たまには別に帰ることがあっても」

嘘である。

もしも心の底から言っているのだとしたら、それは井手上桜の偽物を疑うべきだ。もしくは、洗脳か催眠術の類いである。

「いくら幼馴染みと言ってもね。いつでも一緒なんて、気が休まらないでしょう?」

「…はあ、そういうものですか」

桜は、しれっとした口調で語った。

どこかで聞いたような言葉だったが、優花里は疑わなかったようである。

ちなみに、桜は嘘を考えるのは得意ではない。基本的には善良で、感情を素直に表現する桜には、どうしても嘘を考えるということが向いていなかった。

しかし、嘘を演じるということに関しては、桜はプロフェッショナル

ルである。何せ、一日の半分を自分の性別を偽って生活しているのだから、得意でなければ務まらない。

つまり、基本的な設定とか、台本とか、そういうものを用意されれば、それを演じるくらいのごことは造作もなかった。監修は、もちろん角谷杏である。

「今日は、その、どうして誘ってくれたんですか」

優花里が尋ねる。

これは、当然予想されて然るべき質問だった。

「秋山さんと、お話ししてみたいと思ったからですよ。折角クラスメイトになれたんですから、仲良くしたいと思うのは変ですか？」

「それは…」

優花里には答えられない問題だった。

だって、優花里はそうじゃないから。いや、仲良くなれるものなら、仲良くしたいと思う。何も、好きで透明人間をやっているわけではないのだ。ただ、優花里にはそのための努力ができないというだけである。

けれど、それが普通の高校生として異端だということくらいは、流石の優花里でも分かっていることだった。

「そう、ですね。はい」

だから、特別な何かを期待した優花里は、少しだけ落ち込んでしまった。いや、言葉は徐々に小さくなって、顔は俯きがちになった。傍目には、すっかり落ち込んだ素振りの完成だ。どうにも、家族以外と会話をしなかった影響で、表情を繕うという機能がうまく働かないらしかった。つまり、それだけがつくしきっていた。

しかし、そんなことには気がつかないフリをして、桜は会話を続けようとした。一々触れてやるよりも、時には無視してやった方が円滑にコミュニケーションができることもある。

コミュニケーションの基本は、とにかく話をさせてやることだ。トークに余程の自信がない限りは、自ら話をして盛り上げるよりも、話しやすい話題を振って盛り上がったように振る舞う方が何倍も楽である。

「それで、秋山さんは普段どんなことをされてるんですか？ご趣味とか。日課のようなものはありますか？」

「趣味、ですか」

話のとっかかりとして、趣味という話題は実に優秀だ。

共通の趣味なら自然と盛り上がることも多いし、詳しくない趣味なら、聞き役ということでも相手に好きだけ語らせることができる。

尤も、読書や映画など、無難な回答をする相手は要注意だ。大抵、人には言いづらい趣味を隠していて、気を許すまで時間がかかることも少なくない。

すると、優花里は一瞬何かを考えるような素振りを見せたあと、おずおずと、恥ずかしいことを暴露するみたいに話し出した。

「…そうですね。強いて言えば、トレニング、でしようか」「トレニング？」

それは、まるつきり予想外の回答だった。

ただ、でまかせとか、にわかとか、そういう感じはしなかった。

「何か目標があるわけじゃないんですが、とにかく体を鍛えたくて。ランニングとか、筋トレとか、本を参考にやってるんです。部活もしていないのに、と思われるかもしれません」

優花里は、ほんのり頬を赤くして、そんなことを言った。

しかし、桜は、そんな優花里の顔には目もくれず、じろじろと、スカートから覗く脚とか、長袖に隠れた腕とかに目を向けていた。そこに、そういういやらしい気持ちは微塵もない。

ただ、触ってみたい。

純粹に、それだけだった。

これを、男性の格好で言葉にしたなら、警察を呼ばれたって文句は言えない。言えないが、桜は今、まったく都合のいいことに女子の格好をしている。傍目には桜が男子と分かる人もいない以上、合意が成立していれば、大きな問題はないように思えた。

天下の往来とはいえ、二の腕を触るくらいのこと、女子同士のちよつとしたじゃれあいである。

そんな言い訳で、桜は倫理観よりも興味の方を優先させた。

脚を触るならアウトだが、二の腕はギリギリセーフである。素肌じゃなく、制服の上から触れるというのもポイントが高い。いや、高いから何だ、という話だが。

「あの。二の腕とか、触らせてもらっても？」

「え？あ、はい」

優花里は、言われるままに右の二の腕を触りやすいように差し出した。

それに吸い込まれるように、桜の掌がゆつくりと優花里の腕に迫る。

むに。

むにむにむに。

むにむにむにむにむにむにむにむにむにむに。

桜は立ち止まり、荷物までおろして、一心に優花里の二の腕を揉んだ。真面目な顔で揉んだ。

優花里はされるがまま、恥ずかしいやらむず痒いやら、よく分からない気分だった。

たつぷり1分以上は揉んだだろうか。

やがて、満足したのか優花里の二の腕から手を離れた桜は、ふらふらと歩いていって、近くの塀に両手をついた。表情は暗く、今にもため息を吐きそうだった。

「い、井手上殿！どうかしましたか!？」

「…いえ、何でもありません。世の不条理を嘆いていただけです」

なんとということはない。ただ落ち込んでいただけである。

優花里の二の腕は、桜のそれよりも太かった。しかし、不要な脂肪で膨らんでいるのではなく、しっかりと筋肉がついたことよって大きくなった二の腕だ。引き締まっていたいい筋肉をしている。見せるためではない、動かすための筋肉だった。

桜がどれだけトレーニングを重ねても、手に入れられないものがそこにはあった。

きつと、優花里と腕相撲でもすれば、桜は手も足も出ずに負けるだろう。

「率直に言って、羨ましいです。私もトレーニングを日課にした時期がありました。秋山さんのようにはなれなかった。どうにも筋肉がつかなくて、そのうち面倒になって止めてしまいました。心が弱かったですね」

「そんな」

そこに、誇らしいという表情はなかった。

むしろ、苦笑いのようなものが浮かんでいた。

「私だって、何度も止めようと思いましたが。こんなことをしたって何にもならないし、意味ないし、いつも辛い、止めたって、そんな風に思ってる」

「だけど、続けた」

話せば話すほどに項垂れていった優花里が、桜の言葉に顔をあげた。

「本当に綺麗な筋肉です。今も、毎日のトレーニングを欠かしていないんだって、分かります。本当にすごいです。尊敬します」

これは、桜の素直な気持ちだった。

女性は、どうしても筋肉を発達させるホルモンが少ないために、男性に比べて筋肉がつきにくい。それこそ、見た目に分かるほどの筋肉をつけるには、年単位の努力と運動以外に食生活にも気をつけなければ無理だろう。頭が下がる思いだった。

優花里は、泣きそうになった。

「秋山さん……？」

「い、いえ。すみません。そんなこと、つ言われたことなくて……」
いつか戦車道をするのを夢見て、ずっとトレーニングを続けてきた。

装填手とか、操縦手とか、筋力がなければ務まらない役割もある。経験では、どうしたって劣るのだ。せめて、体くらいは負けないものを作りたかった。

けれど、女の子らしくないから、親には止められた。本当に戦車道ができるかも分からないのに、太くなっていく腕を見て、脚を見て、お気に入りの服が着られなくなって、自己嫌悪に陥ったこともあった。

他のクラスメイトたちと比べて、自分は醜いんじゃないかという強迫観念にもとらわれた。着替えの時間が大嫌いになって、部屋でも衝動的に姿見を叩き割りたくなっただけでもあった。

そんな全部が、桜の言葉で報われた。

「私、今日秋山さんを誘ってみて、本当によかったって思います。秋山さんが、こんなにがんばり屋な人だったなんて、全然知らなかったから」

「井手上、さん」

桜の頭から、杏の用意した台本は、綺麗さっぱりなくなっていた。

生徒会に集められる限りの優花里の情報から、考えられる質問、その回答。そこから展開されるだろう会話のパターンを杏が文字に起こし、桜はまさしく寝る間も惜しんでそれらを頭に叩き込んだ。桜からアドリブが実は苦手と聞いた杏の精一杯のサポートだった。そんな、周到に用意された全部を桜は鮮やかに無視をした。

その方がいいと思えたのである。

「ねえ、秋山さん。呼びづらかったら、好きなように呼んでくださって構いませんよ？私は、それを気にしませんし、それが秋山さんらしさだと思うから」

ね？と桜が笑いかけた。

これは結果論であるが、もしも桜が、機械的に台本の中から台詞を選んでいたなら、優花里は桜の言葉に感激することはなかったかもしれない。美辞麗句を並べられて、ほどほどに気分をよくしたかもしれないが、きつとそれで終わっていた。

吹っ切れることはできなかつたに違いない。

「井手上殿おー!!!」

「うわあ!?!」

気が付けば、優花里は桜に抱きついていていた。

それは、まったくの不意打ちで、桜には優花里を避ける余裕もなかった。

尤も、仮に避けられたとしても、桜の男の子の部分が避けることを拒否したかもしれないが。

甘くていい匂いが鼻腔から頭の中に入り込み、桜の思考をぐずぐずにさせた。

よく鍛えられた腕でがっちりホールドされて、桜はまったく動くことができなかった。けれど、胸のあたりに感じられる、ふによん、とした柔らかい膨らみは、間違いなく女性のそれである。あまり密着をされると男ということがバレルのではないか、という心配もわいてくるが、そんな心配よりも、一秒でも長くこの素敵な感触を味わっていたという思いも否定できなかった。

いくら見た目が華奢で女らしいといっても、桜は思春期真っ只中の男子高校生である。

正直、適度に鍛えられてはいても、ところどころ柔らかくいろいろなとたまらない女子の体を抱きしめたいとか、あのふわふわの髪の毛の毛を突っ込んでくんかくんか頭の匂いを嗅ぎたいだとか、そういう衝動に駆られたのは確かである。

けれど、それでも、僅かに井手上桜の理性が勝った。

「あ、秋山さんっ!?!ちよ、ちよつと!!」

桜は、空いた手のひらでなんとか優花里の背中を叩いて、優花里を正気に戻そうと試みた。それは、まるでプロレスのタップアウトを彷彿とさせたが、興奮しきった優花里は気づいていないようである。桜の声も耳には届かないらしかった。

「私、嬉しすぎて死にそうですっ!」

「私は社会的に死にそうですっ!」

ますます強く抱きしめられる。

ある意味では、どんな拷問よりも辛い仕打ちだった。

7話

「いっpegがみ殿ーっ！」

わはーっ、という効果音を頭に付けたくなるような満面の笑顔を浮かべて、優花里はぶんぶん勢いよく手を振った。これを仮にクラスメイトが見たなら、あまりのキャラクター性の違いに双子かドッペルゲンガーを疑っただろう。

その視線の先には、当然ながらと言うべきか、桜がいる。

桜は、すこしばかり疲れたような表情を浮かべていた。

結局、昨日は、あれから優花里が満足するまで往来で抱きつかれ続けた桜だったが、夜になっても優花里の体の柔らかさだとか、髪から香るいい匂いだとかが思い出されて、一向に寝付くことができなかったのである。

気休めとばかりに、滝行の如くシャワーを頭から浴び続けて、せめて鼻の奥に残る優花里の匂いだけでも忘れようとしたが、温度設定を上げすぎたのが良くなったのだろう、早々にのぼせてしまい、余計に具合を悪くしてしまった。

寝起きの調子は最悪だったと言っていい。

それでも、いつもと同じ時間に起きて、みほの朝食や着替えを準備したのだから、桜の使用人としての意地というか、矜持は大したものである。

「…おはようございます、秋山さん」

「おはようございますっ！井手上殿っ！」

元気いっぱい挨拶をする優花里。

さて、問題である。彼女は今、どこにいるのだろうか。どこで待ち構えていたのだろうか？

くいくい、と桜の制服の裾が引っ張られた。

「どいちんやっまっ。」

みほが可愛らしく、こてん、と首をかしげて桜に尋ねる。

正解は、桜とみほの通学路だ。

より正確には、マンションの出入り口のすぐ外である。

ともすれば、ストーカーか何かと間違えられも文句は言えない。
みほからすれば、全く見知らぬ女子が出待ちをしていたような状況だ。

尤も、黒森峰では少なからず遭遇した事態ではあったのだが。アイドルかスターのような扱いを受けていたのは、今は昔のお話である。

「彼女は、秋山優花里さん。私のクラスメイトですよ」

「西住みほ殿ですよねっ！はじめまして、秋山優花里と申します」
「びしい！と敬礼をする。まるで軍人のようだった。

それにしても、だ。人見知りの設定は、はて、どこへ行ったのだろうか。昨日のおずおずとした態度や雰囲気は皆無である。人好きのする笑顔を浮かべ、ハキハキと喋っていた。

「ふうん、この人か…」

「おじよ…みほさん？」

みほが何事かをつぶやいた。しかし、それは桜の耳には届かなかつたらしい。

みほはとことこと歩いて行って、優花里に近づいた。

そして、ゆっくりと右手を差し出した。

当然だが、握りこぶしの形ではない。パーの形に手のひらは開かれている。

尤も、心はこれっぽっちも開かれていないのだが。

「はじめまして。桜ちゃんの『幼馴染』の西住みほです」
「ん？気のせいかな？」

桜には、みほが「幼馴染」という単語を言った時、少しばかり強調するようない方だったように感じられた。

一体どんな表情をしているのか、桜からは窺い知ることができない。当然だ。桜からは、みほの後ろ姿しか見えないのだから。

しかし、みほのことだ。きつと、いつものように朗らかな顔で笑いかけているに違いないと思った。

実際、みほは完璧な笑顔を浮かべていた。

口も目も眉の形も、すべてお手本のような笑みの形だ。

100点満点である。

ところで、これは全く関係のないことだが、笑うという行為は本来攻撃的なものであり、獣が牙をむく行為が原点である。

いや、全く関係のないことだが。

「どうもどうも。井手上殿の『クラスメイト』の秋山優花里です」

(いや、それ既に紹介済みですけど!?)

不思議なことに、優花里も自己紹介をし返した。何回自己紹介をするつもりだろう。

それはそれとして、優花里も「クラスメイト」という単語を強調したような気がしたのだが、それも気のせいだろうか。桜にはまったくわからなかった。

にこにこ笑顔で握手に応じる優花里。ぎゅっと、握り返された。

優花里は、もともとは戦車道の大ファンである。当然、みほのことも知っていた。高校戦車道の強豪、黒森峰の元副隊長にして、西住流家元の娘。そんなみほは、当然、優花里にとっては憧れの相手だった。テレビは録画してあるし、雑誌は穴が空くほど読み込んだ。それこそ、優花里にとつてのアイドルかスターが西住みほである。

これが、桜と出会う前であれば、優花里の心の支えは、彼女になっていたかもしれない。なにせ、憧れの人が転校してきて、チームメイトとして一緒に戦うのだ。夢に思い描かなかったか、と言えば嘘になる。

しかし、偶然とはいえ、優花里の鬱屈した心を救ったのは桜なのである。

憧れのスター選手と生まれて初めてできた友達。どちらに懐くかと言えば、当然後者だった。

「仲良くしようね（しましようね）」

手を離れたのは、全くの同時だった。

そして、みほはくるりと体ごと後ろを振り返り、優花里はにこにことした笑顔のままつかつかと桜のいる方へ近づいてくる。

そして、訳が分からないまま突っ立っている桜の腕を掴み、自分の腕を絡ませた。

それは、まるで異性のカップルが腕を組んで歩く時のような距離感

で、ふに、ふに、とそれなりに大きな胸が桜の腕に当たってしまった。
桜は頭が沸騰しそうになった。

「なっ！なっ！なっ！なっ！なっ！なっ！」

みほが奇声を発する。

「ばびゅーん、と2人の近くまで飛んできて、腕と腕の間に手の平を挟み込む。そして、ぐいぐい、つと2人が離れるようにそれぞれの体を力任せに押しつけた。」

桜の想像していた以上に、みほは力が強かった。

「何をやってるのかな?!?かなっ?!?」

2人の間に入り込んで、みほは優花里に詰め寄った。

「はて、なにか?」

「何かじゃないよっ！腕っ！腕を組むなんて、何?どういう関係!?!」

「どうもこうも。仲のいい友人同士ならば普通のことでしょう?」

普通じゃない。

桜がそう叫びたくなったのも仕方のないことである。

しかし、悲しいかな。

これまで仲のよい友人のいなかった優花里は、他人との距離の詰め方がよく分かっているのだ。ともすれば、仲のいい『異性の』友人とならば不自然でない行為も、同性の友人同士がする当たり前の行為として誤解し得るのだった。

そんなことあるか?と言われるかもしれないが、実際にあったのだから仕方ない。

優花里は、全く何を言われているのか分からない。そんな顔で小首を傾げた。

「ダメなの！あなたは桜ちゃんに近づいたらダメ！」

「そんなあ!?!横暴ですよお！」

「ダメだったら、ダメー!!桜ちゃんわたしなの！わたしの、桜ちゃんなんだから！」

「ズルいですっ！井手上殿独占禁止法の施行を求めます！」

みほが両手を広げて、優花里が桜に近づけないようガードする。

優花里は、前後左右、フェイントをかけながら桜に近づこうとする

が、みほのデイフェンスは突破できないようだった。

「あ、あのう、そろそろ行かないと学校に遅刻しますよ？」

ようやく脳が正常に戻ったらしい桜が、見かねて声をかける。しかし、一向にふたりの動きは止まる様子が見られなかった。桜をゴールに見立て、終わりのない、というかルール無用の1 on 1が繰り広げられる。やがて、いくら言っても無駄ということに気づいた桜は、調子が悪いこともあって、スカートを押さえながらその場にしゃがみこんだ。立っているのに疲れたのである。

果たして、このボールのないバスケットはいつまで続くのだろうか。

いくらなんでも体力が無尽蔵ということはないだろうが、さて、『遅刻確定』とどちらが先だろう。桜は、ぼんやりと空を見上げ、流れていく雲を眺めていた。

あ、ソフトクリーム。



その後の登校の風景も、筆舌に尽くしがたいものだった。

優花里は事あるごとに桜に引付こうとして、みほに遮られるを繰り返した。

終いには路上で喧嘩になりそうだったため、見かねた桜が仲裁に入り、手をつなぐことで一旦は収まった。右手がみほで、左手が優花里である。

優花里はるんるん気分での登校となったが、みほは依然として不機嫌な様子を隠すことはなかった。らしくもない半眼で、常に優花里のことをにらみ続けていた。

仲良く手を繋いで登校はみほの教室の前まで続き、いざ別れる、という段階になって、「桜ちゃんと離れたくない」「わたしも桜ちゃんの教室に行く」とみほが駄々をこねはじめた。

桜がどれだけあやそうとしても収まらないので、無理くり沙織と華が抱えて教室の中に運んでいった。

「ようやくふたりきりですねっ！井手上殿」

満面の笑みで優花里が言う。

そうですね。とは、答えたくなかった。

答えてしまうと、優花里のことを受け入れたように思われて、さらに暴走しそうに思えたからだ。

桜にしてみれば、どうしてこうなった。としか言いようがなかった。

当然だ。桜には、優花里が孤独ぼっちを拗らせていたことなど知る由もないし、大したことを言った自覚もなかった。

確かに、杏の用意してくれた台本は逸脱したが、こんなことになるとは全くの予想外である。

「えへーっ、井手上殿おー」

鉄板の上で溶けたバターみたいな表情で桜にしなだれかかる。

(なんだこれ?.....なんだこれ?)

筋金入りの演技力のおかげで、依然、顔だけは笑顔を保っている。きつと、端からは分からないだろう。

しかし、心の声は、困惑でいっぱいだった。

いや、優花里は可愛い女の子だし、嫌われるよりは好かれる方がいいに決まっている。好意を向けられるのは、そう悪い気分ではなかった。

しかし、こうも引つ付かれてしまうと、そのうち男ということがバレルのではないかと内心ではひやひやするものだ。ぱつと見では少女かもしれないが、真正正銘、体は男なのである。ないものはないし、付いてるものは付いている。反応は正常だ。

それに、何より、みほからの「ふうん、その女の方がいいんだあ」みたいな視線を向けられることに堪えられなかった。

さて、みほがいなくなると、ますます優花里は桜にべったりになった。

それは、例えば、国語の授業で。

「先生！教科書を忘れたので、井手上さんに教科書を見せてもらってもいいでしょうか！」

「ええと、秋山さん？井手上さんとは、席が遠いでしょうか？隣の席の人に見せてもらいなさい」

「いえ、私が席を移るので心配はいりませんっ！」

「…そういう問題ではないのですが」

それは、例えば、美術の授業で。

「あの、秋山さん。…あまり、私の方を見つめないで欲しいのですが」
「お気になさらず」

「その、私ではなく、課題の石膏像を見てください。絵が書けないで
しょう?」

「お気になさらず」

「え、いや、あの…」

それは、例えば、休み時間。

「井手上殿、どちらに?」

「あ、その、お手洗いに…」

「では、一緒に参りましょうか!」

「いやあ、出来ればひとりで行きたいなあ、なんて…」

「さあさあさあ、参りましょう参りましょう」

「いや、あの、ほんとに…っ!」

桜は、たった一日で疲労困憊になる有り様だった。



「井手上殿—!一緒にお昼を食べましょう!」

当然のように、お昼の時間にも優花里は桜に声をかけてきた。

それも、学食まで追いかけてきて、だ。

桜は片手で頭を押さえて、はあ、と小さくため息を吐いた。

授業が終わるとほぼ同時、クラスで作ってきたイメーヅも忘れて、
全力ダツシユで逃げ出したはずなのだが。

ぽかーん、という顔で優花里のことを眺める沙織と華。

みほに至っては、「がるるるる」と、人の言葉を忘れたかのように
唸り声をあげ、優花里のことを威嚇する始末だった。

「どうどう、みほさん。どうどうどう」

どうにかこうにか、みほのことをなだめすかして、席に座らせる。

5人ということなので、2人と3人に分かれて、対面で座ることに
なった。

片方は沙織と華。もう一方が、桜を真ん中にして、みほと優花里で左右を囲う。

「はい、井手上殿。あーん」

「あ、ズルいー！ほら、桜ちゃん。あーん！」

みほと優花里が、それぞれスプーンとか箸とかで、桜にご飯を食べさせようとする。

桜としては、勘弁してくれ。というのが本音だった。

「あの、そんなことをしていただかなくても、自分で食べられますので…」

「わたしのごはんが食べられないの!？」

「いや、みほさんのお弁当、作ったの私ですし…」

みほは、酔っぱらった会社の上司みたいだった。

「ふふん。その点、私のごはんは学食ですから。はい、井手上殿」
「ですから、ひとりで食べられますって」

口を尖らせるみほ。一方、優花里の表情は笑顔のまま変わらないが、一向に箸がどけられる様子はない。一口大のから揚げが桜の視界に浮かんでいた。

「いやあ、これはこれは。桜、モテモテですなあ」

「揶揄わないでください」

にやにやと楽しそうにしているのは沙織だ。普段からモテ道だなんだと言っているだけあって、こういう話題には食いつきがいいようだ。

華のように、目の前の料理にだけ喰いついていればいいのに、と思わずにはいられない。

「それにしても、ええっと、秋山さんだっけ？私たち以外にも、ちゃんとクラスにも仲のいい子がいたんだね。安心したよー」

ぐるぐると納豆をかき混ぜながら、沙織が言う。桜としては、優花里と仲良くなったという自覚はなかった。一方的に懐かれた、というだけである。

そもそも、広く浅く。特定の相手をつくらないのが、大洗での桜の処世術だ（勿論、みほは除く）。どうせ本当のことは明かせないのだから

ら、仲良くなったところで高校にいる短い間だけの付き合いになる。卒業をした後で連絡を取り合うこともないだろう。深入りするのも馬鹿らしい。

「はい、井手上殿」

「桜ちゃん！あーん！」

だから、こんな事態は桜の想定外なのである。

「どっちを食べるの（んですか）!？」

声を揃えて、優花里とみほが迫る。左右両方から食べ物が出されても、桜としては困るしかなかった。

「自分の分で精一杯です！」

桜が叫ぶ。すると、華が、ぴんつと手を高く伸ばした。

食べられないなら、私が食べます。そういう意思表示だった。

◆

「いやあ、やつちやったねえ、井手上ちゃん」

午後の授業は、1回目の戦車道の時間だった。

集まった生徒は、全部で22人。尤も、桜も予め知っていたことなので、驚くことはなかった。

初回の授業では、履修する生徒同士の顔合わせと、戦車の搜索が行われることになった。

当然のことながら、何も手掛かりがない、と杏が正直に言ってしまったものだから、生徒たちからは不満の声があがる。しかし、肝心のみほだけが、「学校探検楽しそう！」とテンションを上げたので、他の生徒たちもそれ以上何かを言うことはできなかった。

さて、みほたちが戦車の搜索をしている間のことだ。

生徒会室には、杏と柚子と桜、いつもの3人が揃っていた。

当然のように桜も戦車の搜索には誘われたが、やることがあるから、と血の涙を流しつつも断るしかなかった。杏たちに呼ばれている、と言われては、流星のみほも我儘を言うことはできなかったのである。

ちなみに本来の生徒会役員である桃は、倉庫の前で監督役のようなことをしていた。戦車道は授業の一環ということになっている。最

低でも一人は責任者が現場にいないとだめだろう、ということになった。

ぽつねん、と一人残されて、捨てられた子犬のような目を杏に向けていたことが、桜にはひどく印象的だった。

閑話休題。

「すみませんでした。折角、角谷会長が準備してくれたのに」

桜が頭を下げる。

さて、生徒会室にこもり、3人で何をしているかと言うと、昨日の優花里との一件を報告していたのだった。加えて、午前中の優花里の様子。つまりは、想定以上に懷かれて困っている、ということの説明していた。

「いやいや、いいって。いいって。こつちも言ってみただけで、本当に台本を覚えられるなんて思ってなかったし。むしろ、よく覚えたなあ、つてくらいだよ」

桜は頭を下げているが、杏にも柚子にも桜を責めるつもりはなかった。

そもそもが、会話のパターンを全て予習して挑むなど無理があつたのだ。当然ながら、パターンの中に筋トレの話題などなかった。

「そもそも秋山ちゃんのパーソナルデータが不足してたからね。所詮は結果論。台本通りやったところで、同じことになったかもしれないし、もっとひどいことになったかもしれない。ま、戦車道には前向きみたいだし、結果オーライじゃない？井手上ちゃんがうまく手綱を握ってさえくれれば」

すると、桜は露骨に嫌な顔をした。

「それができるなら、こんなことにはなつてませんよ」

「そりゃそっか」

桜が疲れている原因の9割は、優花里だ。

思考が理解できない、というのもそうだが、一番に頭を悩ませているのは、みほととの関係性である。こればかりは、言って聞かせたところで改善できるとも思えなかった。

「せめて、みほお嬢様と仲良くしてくれれば…」

優花里としてはそんなつもりはないのかもしれないが、優花里が桜にべつたりの様子を見せると、決まってみほは不機嫌になるのだ。マウントを取っているというか、煽られているような気分になるようだ。すると、当然、みほと優花里は喧嘩になる。

どちらも感情を隠すことには長けていない。寧ろ、素直に表現してしまう性質だ。おかげで、ふたりのギスギスした雰囲気は、どんな馬鹿にも感じ取れるほどだった（桃でも察する程だと言えば、その程度が伝わるだろうか）。

「それ、正直、意外だったよ」

「何がですか？」

杏が椅子に深く座り込んで、しみじみと呟いた。

「西住ちゃんだよ。存外、井手上ちゃんの一人相撲ではなかったんだねえ」

てつきり杏は、桜ばかりがみほに執着しているのだと思っていた。みほは、まあ、特別な感情は抱いていないのだろうと。しかし、みほの優花里への態度を聞く限り、そんなことはなかったらしい。寧ろ、かなり独占欲は強いようだった。

（まあ、考えてみれば、当然か。幼い頃からずっと一緒にいて、自分を絶対に肯定してくれる相手。そういう感情は抜きにしても、手放したくはないよねえ）

ましてや、みほの精神性は子供っぽいと聞いていたし、実際に話した感じでもその通りだと思った。みほの桜への感情は測りかねているところだが、仮にそれが、他人にお気に入りの玩具を触られたくない、という感情に近いのだとすれば、理解もできる。

「大事に思っていただけ、というのは、個人的には嬉しいものですが。…あの空気に挟まれるのは、なんとも」

思い出しただけでも、胃がきりきりと痛みだす。

そのうち、近所の内科に通いつめることになるかもしれない。

「けどまあ、仲良くやってもらわないとねえ。一緒の戦車に乗るのに、ふたりの仲が悪いってのもねえ」

「えっ？」

「柚子が疑問の声をあげた。」

「秋山さんと西住さんを同じ戦車に乗せる気なんですか？」

「そりゃあねえ。他に選択肢もないし」

そう言つて、杏は一枚の紙を取りだし、机の上に転がっていたペンに手を伸ばした。

かりかりと名前らしきものを書きながら、それらをぐるぐると丸で囲んでいく。

「二年生が、確か6人。さっきの様子を見る限り、仲良しグループって感じだねえ。ここでひとつ。それと、珍妙な格好をしたのが4人。ここは、クラスも一緒だし、下宿も一緒。ふたつめ。あとは、バレー部か。ここも一緒がいいねえ。つてことでみつ。さて、小山。このグループのどこかに、秋山ちゃんを混ぜるのはどう思う？」

「ええつと。ちよつと、難しそうですね。井手上さんの話を聞く限り、秋山さんはあまり、出来上がった空気に馴染めるタイプではないと思います。それに、彼女たちは彼女たちで、その、濃いですから」

柚子は、先ほどの倉庫内での顔合わせの時間を思い出していた。

言葉を選んだが、控えめに言つても、変わり者の集まりとしか言いようがない。特にバレー部と歴女。風紀委員のように、服装についてガミガミ言うつもりはないが、あの恰好のまま普段の学校生活を送っているのだとすれば、正気の沙汰とは思えなかった。

「私も、概ね小山の意見に賛成だね。どこに混ぜても、試合の間、戦車に乗るくらいのことではできると思う。だけど、これから大会までの間、チームで行動することが増える、と考えた場合、それはどっちにとつてもよくない。最悪、離脱者が出るかもね。その点、西住ちゃんのところは、まだマシと言える」

「マシ、ですか？」

杏の言葉に、柚子が首を傾げる。

「あそこは、仲良くなつてまだ数日。その上、秋山ちゃんと学年も一緒だ。まあ、武部ちゃんと五十鈴ちゃんは元から仲がよかったみたいだけど、そこに西住ちゃんが混ぜられても上手くやれてる、つてのは大きい。他ほど、出来上がつてるわけじゃないし、数もまだ3人。グルー

プ、ってほどの集まりじゃない」

「そうですね。武部さんも五十鈴さんも、懐の大きい方ですから、受け入れてくれる可能性は高いと思います」

杏の見立てに、桜が同意する。実際、昼の学食でも、優花里とみほの様子に驚いてはいたが、悪い感情は持つていないようだった。華に至っては、いつ殴り合いが始まるのか楽しみにしていた気配がある。

うんうん、と杏が満足そうに繰り返し頷いた。

「だから、問題は、井手上ちゃん関連なんだよね。ここで険悪になるとは、予想外だった。なんとか、今日のレクリエーションで仲良くなってくれればいいんだけど…。最悪の場合は、うちのチームに引き込むしかないかなあ」

生徒会チームもみほと同じく3人だ。数だけで言えば、優花里を加えて4人というのもありだろう。下手に仲の悪い二人を同乗させるよりはマシなようにも思える。

しかし、杏としては、あまり自分たちと関わりを深める生徒を作りたくなかった。

というのも、戦車に乗せるだけならまだしも、先述した通り、自然とチームで一緒に行動することが増えると杏は考えているからだ。自分たちと一緒に行動するということは、秘密を共有してもらおうことが必要になる。

それは、杏たちにとってはリスクであるし、優花里にとっては大きな負担だ。最悪の場合、心に傷を残しかねない。

「できれば、西住ちゃんのところをお願いしたいんだけどなあ」

当初は、みほの高いコミュニケーション能力に期待していたのだが、こうなつては、寧ろマイナス要素である。もしもの話をしてもし方がないが、みほが大人しい性格だったなら、こんなことで不和は起こらなかつたに違いない。

いっそ、騒動の種である桜を学校から追い出してしまうということも考えた。桜を取り合つて喧嘩をするのなら、横合いから取り上げてしまえば、ふたりの喧嘩は収まるのかもしれない。しかし、その場合は、一緒にみほも出て行ってしまうだろう。それでは本末転倒だ。

どこかで都合よく、ふたりが仲良くなる世界はないものか。
もしもそんな世界があるのなら、その世界の自分にアドバイスを訊
ねたいと思う杏だった。

8話

「え、……はあ!? クレーン車あ!?!」

生徒会室に杏の叫ぶような声が響き渡る。

それは、杏にしては珍しいことだった。

杏は、携帯を片手に何事か報告のようなものを受けていた。

杏としては、それを報告とは認めたくない。

しかし、電話の向こうの阿呆は、至極真面目に話をしているつもりらしかった。

曰く、バレー部が戦車を見つけたらしく、その報告が桃に入ったということだった。桃も、いくら阿呆とはいえ、広報の仕事を任されるくらいだ。報告を受けるくらいのは朝飯前である。どこでどういうものが見つかったか。その状態。状況。そういったことを具に報告させた。

この場合、桃を責めることは間違いであろう。

杏は、携帯を耳に当てながら、空いた左手の人差し指をぐりぐりと自らの眉間に押し付けた。

戦車が見つかったという事は良い。良い報告だ。しかし、問題はそれが見つかった場所だった。

切り立った断崖の中腹。周りには戦車が通れるようなルートはない。どころか、人が歩いていけるような場所でもない。バレー部がどうやって見つけたのかと聞けば、ラペリングで崖を降下したというのだから驚きだ。彼女らは特殊部隊か何かか?

果たして、崖の中腹に洞窟があり、その中に戦車が転がっていたというのである。

桃がクレーン車を使いたい、と言い出すのも道理だと思った。しかし、現場を見てみないことには断言はできないが、たとえクレーン車を使ったところで回収することは無理だろう。どう控えめに計算したところで、クレーン車では高さが足りない。

もはや、下手に回収するよりも、中古で戦車を買ったほうが安いのでは? と思ってしまうほどだ。

「とりあえず、回収方法は保留。バレー部はさっさと切り上げさせて。…念のため聞いておくけど、けが人はいないよね？」

『はい。授業が終わったら、体育館を貸してほしいと言われました』

「あー…、後で他の部活に掛け合ってみる、って言っというて」

『分かりました』

桃の了解の声が聞こえて、杏は通話を切った。

当然だが、体育館の使用を他の部活に掛け合うつもりはなかった。

いや、彼女たちの功労を考えれば掛け合うのも吝かではないが、それにしたって戦車を見つけた手段がラペリングである。杏はラペリングなど当然したことはないから、その大変さが理解できているとは言いがたい。しかし、彼女たちは特別な訓練を受けたレンジャー部隊ではないのだ。体への負担を考えれば、今日はさっさと家に帰って休んでもらった方がいい。

「河嶋先輩からですか？」

桜が尋ねた。

「そ。バレー部が戦車を見つけたってさ」

「それにしても、反応が普通じゃなかったですけど…」

先ほどの痴態でも言うべきか、大声をあげ、頭を悩ませていた杏の姿を思い出しながら柚子が呟く。杏も、まあね、と言いながら頬をかいた。

しかし、訳を話せば、柚子も桜も苦笑いを浮かべることしかできなかった。

「それは、その、なんというか…」

「うん、まあ。行けそうな業者に片っ端から電話してみるよ」

杏は沈痛な面持ちだ。当初、運搬は自動車部に任せようと思っていたのだが、流石に今回は彼女たちの手に余るだろうと思われた。

しかし、これで戦車を見つけたのは3チーム目だった。

それは、大いに喜ばしいことである。

意外にも、最初に戦車を見つけたのは1年生チームだった。

なんでも、ウサギ小屋の中に放置されているのを見つけたということである。飼育委員経由で情報を手に入れたらしい。すっかりウサ

ギの住処になっているということだが、状態はそれほど悪くないと聞いている。飼育委員が定期的に掃除していたおかげかもしれない。

2番目が歴女の4人組だった。

これまた見つけた場所が驚きで、なんと池の底で見つけたと報告があった。昨年の選択科目で忍道を取っていたのが役に立った、ということらしいが、水遁でも披露したのか。杏としては、その戦車が池の底でどれだけの間放置されていたのか、ということが気がかりだった。

杏は、生憎と戦車の機構だとか、整備については全くの素人だ。ネットで調べられる程度の知識しか持っていない。そのため、整備についても自動車部に丸投げするつもりだが、果たして、年単位で池に沈んでいた戦車は整備したところで動くものだろうか。少なくとも、バッテリーをはじめとした電装周りの機器類はすべて使い物にならないだろう。これも、修理して使うくらいなら、中古の戦車を探したほうが安いような気がした。

「残るは、お嬢様のチームですか」

桜が呟く。

桜の言う通り、みほたちのチームだけが未だ戦車を見つけれなかった。
「ほんと、幸先が悪いというか…」

正直なところ、杏としても他の3チームが戦車を見つけれられたことは、寧ろ出来すぎと思っっているくらいだった。真正正銘、当てもなく送り出したのだ。まさか、たった半日の搜索で3輜も戦車が見つかるとは想定外である。杏は、生徒たちのバイタリティを侮っていたのかもしれない。

「こりゃあ、マズイかもね」

杏は、見つからないのならそれはそれで仕方ないと思っている節があった。言っってしまったら、今日の戦車搜索の時間はレクリエーションのようなものだ。最悪、他に回している予算をかき集めてでも、戦車を購入するという手段も考えていた。どうせ生徒会の悪評は学校中に知れ渡っていることだし、今更だ。多少、評判が悪くなったところ

で気にするようなことでもない。

しかし、他の3チームが戦車を見つけられてしまった、というのは、少々マズかった。特に、残ったのがみほと優花里のチームというのが最悪だった。よりにもよって、というやつである。

「変に拗れないといいんだけど…」

杏は、生徒会室の窓から空を見上げた。

遠い目をしながら、神様に祈ることしかできない。我ながら、都合のいい時ばかり神頼みだなあ、なんて考えながら。

◆ 「…はあ、困りましたね」

さて、杏たちがみほと優花里の仲を心配している頃、案の定とも言うべきか、優花里はみほとたちと離れ、ひとりぼっちで項垂れていた。困ったことに携帯も充電が切れていて、誰かに連絡を取ることもしかない状況だ。助けを呼ぶこともできない。

「痛っ…」

動こうとすると、捻ってしまった右足首から激痛がはしる。あまりの痛みに涙が零れそうだった。とてもではないが、歩くどころか、立つことすらできそうにない。

「まさか、足を滑らせてしまうとは…」

優花里はふう、と息を吐いて、地べたに腰を下ろした。スカートが汚れてしまうが、緊急事態だ。そもそも、既に体中傷だらけで、制服もあちこちが破れてしまっている。

優花里は、自分が足を滑らせた場所に目を向けた。

そこは、優花里が今座っている地面よりも目測で80cmくらいは高い場所にあった。小さな山、とも言えばいいか。或いは、高さは足りないが崖と表現してもよいかかもしれない。斜面はすっかり雨風で削れたのか、ほとんど直角で、下から見れば壁のようになっていた。

優花里は、その上から落ちたのだ。

普段であれば、そんなヘマはしないつもりだが、かつかと腹を立てながら、ぶつくさと文句まで呟きながら歩いてきたことと、夕暮れも迫り、日が落ち始めていたこともあって、優花里は目の前に道が続い

ていないということに気がつかなかったのである。

幸い、然程高さがなかったことと、土や葉っぱなどがクッションになったおかげで優花里が大けがをすることはなかった。しかし、どうやら足を挫いてしまったらしい。優花里はひとりで行動していたので、これには困った。

(誰か見つけに…は、来てくれないでしょうねえ)

優花里がひとりで行動しているのには、理由があった。

というのも、最初は優花里も、みほたちと一緒に行動していたのだ。流石に一人で行動するのはマズイと思って、気は進まなかったが、みほと一緒にいる沙織や華に声をかけた。ほぼ唯一、戦車道の履修者の中で見知った顔は彼女たちだけだったのである。すると、みほだけはやはりというか、嫌そうな顔をしたが、沙織と華は笑顔で歓迎してくれた。人手は多い方がいいよ。と、みほのことも説得してくれたのだ。

そんなこんなで一緒に行動する以上、たとえ気に食わない相手であっても喧嘩をするわけにはいかないと、優花里は少しだけみほと距離を置きながら戦車の捜索に加わった。

しかし、残念ながら、戦車の捜索は順調とはいかなかった。

「うがーっ！かゆいっ！虫に刺されたーっ!？」

森の中を歩く、みほと沙織と華と優花里の4人組。なんの意味があつて学園艦の上に森なんかを作ったんだ、と思わずにはいられないが、戦車が廃棄もされず放置されているのだとすれば、それは一目につかないような場所にあるだろうと当てを付けたのだった。

いい加減、森の中を歩き続けるのにも疲れた頃だったが、しつこい虫の羽音にもいら立つ気持ちも助長されていた。

もう、我慢できない。沙織が叫んだ。

「あ、それなら、虫刺されの薬を持っていますから、使ってください」
「え、本当？」

優花里がどこに持っていたのか、虫刺されの薬を取り出した。

「ありがとー。助かったよー」

「どういたしまして」

慣れた手つきで薬を塗ると、お礼を言いながら沙織は優花里に薬を返す。

すると、みほがむすうつ、と頬を膨らまし、機嫌を悪くするのだった。それを見かける度、沙織と華が、まあまあ、と宥めるのだが、それも優花里からすれば面白くない。

みほは今のところ、ボコられグマなるキャラクターのテーマソングを歌いながら、森の中をひたすら勤に任せて先導するのみで全く役に立っていないかった。杏たちに渡された地図を一度だつて開こうともしていない。

一方で優花里は、今のように虫刺されの薬を持ってきていたり、森での歩き方をアドバイスしたりと、みほに比べれば役に立っているという自覚があった。

それを、沙織も華も、友人だからという理由でみほばかりを鼻屑して甘やかすのだ。これには、まったくひどい仕打ちだと思った。

(やっぱり、私の友達は、井手上殿だけですね)

桜ならば、自分を蔑ろにはしないだろう。そんな風に優花里は考え、戦車を見つけたなら、自分のことをどんな風に褒めてくれるだろうかと夢想した。

しかし、もしもこの場に桜がいたならば、沙織や華以上にみほのことを鼻屑しただろうし、甘やかしただろう。学校や通学路では周囲の目もあるため、優花里を粗雑にあしらうわけにもいかなかったが、実のところ、みほの一番のシンパは桜である。幸いとも言うべきか、優花里は桜の本性を目の当たりにしたことはなかった。

それはさておき、戦車の搜索は楽ではなかった。

本当にあるかも分からないものを探しながら、歩き慣れない森の中を一心不乱に歩き続ける、というのは、想像以上に気力を削る苦行である。ある程度、ゴールのようなものがあれば違ったかもしれないが、生憎と目的地は定かではない。湿気とか、虫の羽音とか、それに加えて、一向に戦車が見つからない、というストレスやら焦りやらが溜まってしまい、やがて、風船が割れるかのように破裂した。

きつかけは本当にくだらないことである。

確か、分かれ道をみほが勘で選んで進んだ結果、途中で舗装された道が無くなってしまった時だった。

優花里が、「違いましたね」と言ったのだ。

それに、みほが噛みついた。

ふたりにも乙女の尊厳というものがあるので、詳細にどんな言い合いが起こったのかは割愛させてもらうが、簡潔に言うならば、互いに互いを痛烈に罵倒し合ったのである。そこには、戦車の捜索のことだけでなく、桜についてのことだとか、まあ、大いに関係のない私情も混ざっていた。

当然、華と沙織は止めに入った。このときばかりは、華もタイマンだとかおどける気力はなかったようである。ふたりは手分けをして、みほと優花里、それぞれを宥めようとした。

それが、優花里の気に障ったのである。沙織たちからすれば、片方を落ち着けたところで意味がないと判断してのことだが、優花里はすっかり沙織たちがみほの味方をしている、鼻屑をしていると思いついでしまった。悪いのはみほで、自分はなんら悪いことはしていない。こんな扱いは我慢ならない。そんなことを言って、ひとりですんずんと違う道を歩き出したのだ。

優花里は、とにかくみほたちからさっさと離れたい一心だった。そのため、舗装もされていない道を進んで、どんどんと森の中へと入っていつてしまう。流石に木々の生い茂る森とはいえ、学園艦の上だ。危険な獣が生息しているということはない。けれど、奥へ踏み入れれば踏み入れるほど、道は歩きにくく、そして、自分がいる場所も分からなくなっていた。

そして、そのうちに足を踏み外して、今に至るのである。

冷静になれば、自分も言い過ぎたとは思おうし、沙織たちの行動も理解できる。ひとりで盛り上がって、勝手に飛び出してきたのだ。まさか探してくれるとは思わないし、どんな顔で助けを求めればいいのか。

いや、携帯も使えないので、打つ手はないのだが。そもそも、彼女らの連絡先はおろか、生徒会も、桜の連絡先すらも知らなかった。

流石に授業の終了時間までに戻らなければ、生徒会あたりが優花里がないことに気が付いて捜索隊を寄越してくれるだろうが、それまで優花里は、森の中で足を捻った痛みを耐えながらひとりぼっちで過ごすことになる。心細くて泣きそうだった。

(また、失敗してしまいました)

いつも自分はこうだ。優花里は、致命的に集団に溶け込むことが苦手だった。

人と話すことが怖いとか、自分のことを話すことができなくて孤立するとか、そういう苦手意識はなかった。ただ、空気を読むということとは苦手だった。

むしろ、優花里は自分のことを語りたがる性質だ。好きなことであれば饒舌すぎるくらいに話し出すし、その場合に、相手が見知らぬ相手であることなどお構いなしである。

落ち着いて、相手の話を聞く。そういった受動的なコミュニケーションの能力に欠けていた。だからこそ、優花里の周りから人が離れていったのである。

その点では、実は、優花里とみほは似た者同士だった。

みほは、幼い頃から自分勝手のわがまま大王である。自分の思い通りにならないことは大嫌いで、自分の欲望に忠実だ。高校生になった今でも、その本質は変わっていない。人の話なんてどうでもよくて、自分の話ができれば満足である。

そんな彼女の周りから人が減っていかなかった理由など、周囲の人間が大人だったということに尽きる。周囲まで子供だったなら、きつと喧嘩になっただろう。その実例が、優花里とのコンタクトである。

詰まるところ、どちらも不器用なのだ。

相手に合わせるということができない以上、満足のいくまで互いにつつかり合うしかない。行くところまで行って、分かり合うか、もしくは、拒絶し合うかのどちらかだ。

そういう意味では、ふたりが息をするように喧嘩をしてしまうことも、必然というか、必要なことなのかもしれない。

(仲良くしたい気持ちだが、うん、ないわけではないんだけど)

もともと、優花里は戦車道のファンである。そして、西住みほは戦車道界限では有名な選手だ。憧れの相手と言っても過言ではない。けれど、今の優花里には井手上桜しか見えておらず、それ以外は二の次、三の次というのが本音だった。

そもそもが、優花里にとって桜は、生まれてはじめての友人であるために上手く距離感がつかめていないし、普通の友人なら、どのくらいの速度でその距離を詰めるべきなのかということも分かっていない。頼りになるのは、偏見にまみれた己の歪んだ知識のみである。

それが盛大に失敗しかけていることなど、優花里には気づけるはずもなかった。

「何がいけないんだろう…」

「全部じゃない？」

優花里が弱音を吐いていると、人の声が聞こえた。

まさか言葉が返ってくるとは思っていなかった優花里は、当然ながら驚いた。

びくりと跳ねるように反応して、声のした方へ視線を向ける。そこには、呆れたような顔をした西住みほが立っていた。

「にし、ずみ殿…?」

「まったく。ひとりでどこに行ったのかと思ったら、こんな森の中まで…。秋山さんは、もしかしてお馬鹿さんなのかな？」

優花里には返す言葉もなかった。

「…はあ。足、片方だけ伸ばしてること、痛めたんでしょ。見せて」

そう言って、みほはしゃがみこんで、優花里の足首を触り始める。存外、慣れた手つきである。持ち上げたり、軽く押したり、携帯の光で手元を照らして、足の腫れの状態を確認したりした。

「腫れはそんなに酷くない。触っていなくても痛い？」

「じんじんします」

「押したり、捻ったりすると、痛みは増す？」

「涙が出そうになります」

そっかそっか。そんな風に呟いて、みほは優花里に寝っ転がるように指示を出した。

「下は地面なんですけど…」

「いいから。言う通りにしなさい」

有無を言わせぬ口調である。尤も、すでに地面の上を盛大に転がった後だ。髪を地面につけることは少し嫌だが、制服が汚れることに關しては今更である。

意を決して、優花里は地面の上に仰向けになって転がった。

すると、みほは、その手に持っている優花里の足首を少しだけ持ち上げた。みほ自身も、スカートが汚れることなんて気にせず、地べたに正座をする。持ち上げた足首は、ゆっくりとみほの膝の上に乗せられた。

「わたしはお医者さんじゃないから、滅多なことはいえないけど。たぶん、軽い捻挫だよ。靭帯が切れてる、ってことはないだろうから、安静にすればすぐに治ると思う」

「そ、そうですか…」

みほがやっていることは、捻挫の場合の基本的な応急処置だ。本来は、患部を冷やすことが大事なのだが、生憎と濡れタオルもなければ水筒の類も持っていない。しかし、そのままに放置していれば、人体の体の機能としてケガをした箇所には血液が集まってきてしまうものである。すると、痛みが悪化するのだ。最悪、腫れや内出血まで引き起こす。そのため、血が集まらないよう、心臓よりも高く上げておくことが大事だったりする。

「ちよつとは楽になった？」

みほの口調は穏やかなものだった。少し前には、感情に任せて喧嘩をしていた相手とは思えない。

「西住殿は、どうして…」

「秋山さんを探しに来たんだよ」

優花里には信じられないことだった。

優花里はみほと喧嘩をしていたのだ。みほには当然嫌われていると思っていたし、何なら優花里はみほのことが嫌いになりかけてい

た。

「他のお二人は…」

優花里はふたりの名前を呼ぼうとしたが、さて、どんな名前だったか思い出すことができなかった。とんだ薄情者である。

「森は広いからね。連絡なら、携帯があればできるし」

そう言いながら、携帯を持ったみほの指は機敏に動いている。おそらくは、沙織か華にメールを打っているのだろう。

みほは、優花里に目も向けることもなく、その携帯を優花里に向けて突き出した。

「……は？」

その画面には、発信中の文字が躍る。——繋がった。

『秋山さん、無事!』

携帯の向こうから大音量で沙織の声が聞こえた。

それはとても焦ったようなもので、まるで優花里のことを心配しているように聞こえる。

優花里は、そんなことはありえないと思った。何かの間違いだと思った。

だって、優花里は薄情者なのだから。

優花里と沙織は、友達ではないはずだ。

「ええと、大事な事です」

『本当!? 本当に本当!!……良かったあ』

絞り出すような声。優花里は困惑した。

これまでの人生において、親以外にこれほど心配されたことはなかった。

『勝手にいなくなるから、心配したんだからねっ!』

沙織が怒ったような声を出す。けれどそれには、どこか優しい響きが混じっている。優花里のことを責め立てるような口調ではない。

『すぐに向かいますから、少し待っていてくださいね』

電話の向こうから、今度は華の声がした。

どうして。この人たちは、みほの味方ではなかったのか。

自分のことは、邪魔者に思っていたのではなかったか。

優しい言葉をかけてくれる、その理由が、優花里には皆目分からなかった。

「こんなの、別に普通のことと、特別なことじゃないよ」

電話を切つてから、みほが言う。

「友達なんだから。探しにくるのは当然でしょ」

「友達、なんですか…?」

優花里は、目を丸くした。

すると、みほはそっぽを向く。

「…さあ。わたしは、違ふと思つてるけど。秋山さん、意地悪だし」

そして、それきり、ふたりは黙りこくってしまった。

優花里は仰向けのまま空を見上げ、みほはそっぽを向いたまま、けれど、優花里の足首は離さなかった。

優花里は、何か話さなければ、とは思うのだが、言葉がでてこない。それこそ、感謝か謝罪か。そのどちらかをするべきだと頭では分かっているのだが、言葉にしようと思うと引込んでしまうのだった。

「秋山さんは、さ」

沈黙を破り、ぽつりと話し出したのは、みほだった。

「桜ちゃんのこと、好きなの?」

「ふえ…?」

途端、優花里の顔は真っ赤に染まった。

「そ、そそそそそ、そんな。すす、好きとか、そんなの…」

優花里は目をぐるぐると回し、焦つたみたいに手をわたわたとさせて何も無い空中をひつかいたりしている。

ばたばたと動くせいで、ケガをしているはずの足にみほは蹴り飛ばされそうになった。

「ああ、もう。大人しくしてよ、危ないなあ」

文句を言おうと、みほは優花里の方へ視線を向けた。

そこには、顔を茹蛸のように赤くして、今にも気を失いそうになっている優花里の姿があった。

その反応を見たみほは、たぶん、自分と同じだな。と答えを出した。文句を言おうとした口は、言うべき言葉を失って、その代わりに、誰

にも言ったことのなかった心のうちを吐き出した。

「わたしは好き。桜ちゃんのことを、好き」

じい、つと優花里のことを見つめて、みほが話す。

優花里は、自分が告白されているんじゃないかと勘違いしてしまうほど、みほの瞳は真剣そのものだった。

「ずっと昔から一緒だったから。もう、桜ちゃんのない毎日なんて考えられないよ」

「西住殿…」

「秋山さんは、桜ちゃんと仲良くなったのなんて昨日のことですよ。それまで、桜ちゃんはいなかったんですよ。だったら、いいじゃない。：桜ちゃんがいなくても、いいじゃない」

みほは、今にも泣きそうになっていた。

それはまるで、親とはぐれた子供みたいだった。

「桜ちゃんを、取らないでよお…」

それは、みほの本音だった。

罪悪感のようなものが、優花里の心の中に芽生えた。

けれど、優花里にも譲れない理由というものがある。

みほに比べればちっぽけで、人には笑われてしまうかもしれないけれど。

それでも、優花里だって、桜のことが好きなのだ。桜しか、いないのだ。

優花里は、みほの視線から逃れるように、頭をすっきり地面につけて空を見上げた。

「私は、ずっと友達がいませんでした」

今度は、優花里の番だった。

「人とは話が合わなくて、話しかけても面白くなくて。そのうち、ひとりでもいいかな、って思うようになりました。だけどやっぱり寂しくて。今は我慢だ。高校を出たら、大学に行って、好きなことに打ち込もうって。そうしたら、友達ができるんじゃないかって。そのため

に、ひとりで色々やってみたけれど、だけど、やっぱり不安で。…そうしたら、井手上殿は褒めてくれたんです。秋山さんは、凄いつて。秋山さんは、頑張り屋だって。それが、嬉しかったんです」

言葉はまとまっていなくて、ぐちゃぐちゃだった。はじめて聞くみほには、きつと優花里の言葉の意味は半分も分かっていないだろう。けれど、優花里の声が弾んだのを聞いて、どれだけ桜が優花里の救いになったのか、なっているのか。みほには分かってしまった。

「…そんなの、桜ちゃんじゃなくてもよかったじゃない」

「そうですね」

優花里は、みほの言葉を肯定した。

「きつと、その言葉をくれるのは、井手上殿じゃなくてもよかったんです。もしも、それが西住殿だったら、私はきつと、西住殿のことを好きになっていたでしょう」

「それじゃあ——」

「それでも」

だけどそれは、敗北の宣言を意味しない。

諦めるつもりなんて、優花里にはない。

「それでも、都合のいい言葉をくれたのは、井手上殿だったんです」

誰でもよかった。それはその通りだ。声をかけてくれるなら、それは誰でも良かった。

けれど、ずっとずっと、その誰かは現れてはくれなかったのだ。

待って、待って、待って。待ちくたびれた果てに、ようやく声をかけてくれた誰かこそが、井手上桜だったのだ。

欲しくて欲しくて堪らなかった言葉がくれたのが、桜だったのだ。

「運命だと、そう信じてもいいじゃないですか」

ああ、きつと。みほにも宝物のような思い出があるように、優花里にとつては、昨日の出来事こそがそれなのだ。

みほは、嫌だなあ、と思う。

桜を取られることは、本当に怖い。想像するだけで、恐ろしくて恐ろしくて堪らない。きつと、井手上桜がいなくなってしまうたら、この「西住みほ」は死んでしまう。

そしてそれは、優花里も同じなのだ。

井手上桜という、甘い毒に溺れてしまった。

桜を失うことの怖さを、みほは誰よりも知っている。
だからこそ、みほは優花里が恐ろしかった。

みほはわがまま大王だ。

自分の思い通りにならないことは大嫌いで、自分の欲望に忠実だ。
だけど、人の心が分からないほど、人でなしではなかった。

「それでも、わたしの方がずっと有利だもん」

優花里は、目をぱちぱちと瞬かせた。

優花里には、みほの言葉が処理できない。

かち、かち、かち。と頭の中で音が鳴る。

随分とかかって、優花里の頭の中のコンピュータが煙と一緒に計算の結果をはじき出した。

「あの、それって…」

「桜ちゃんはあげないからっ！あげない…、あげないけど…」

みほの声はしりすぼみにどんどんと小さくなっていく。最後は、耳をすまして、ようやく聞こえるような音量だった。しかし、優花里にはそんなことは関係なかった。期待に満ちた瞳で、優花里はみほの言葉を待った。

やがて、小さな、小さな声で、みほは言った。

「話しかけるだけなら、許可してあげる…」

満面の笑みで、優花里はお礼を言った。

それは、ふたりのことを探していた沙織たちにも聞こえたらしかった。



そして、次の日のことである。

倉庫の前に戦車が並ぶ。

みほたちは、体操服姿でホースやらブラシやらを手に持っていた。

「とりやああああー」

「わぶっ!?!」

みほの楽し気にはしゃぐ声が聞こえた。

優花里は足首が治りきらず、戦車の上にのぼることは許されていなかった。しかし、歩くくらいは問題ないということで、地面に足を付けて、届く限りの箇所をブラシでこする。

すると、不意にみほがホースを振り回して、盛大に水をぶっかけたのだった。おかげさまで優花里はすっかり濡れ鼠だ。

「いきなり、何をしやがりますかっ!?!」

「あははー。秋山びしょ濡れー!」

「あなたがやったんでしょうがあ!?!」

優花里が吠え、みほは笑いながら逃げていった。

あれから、沙織たちと合流したみほと優花里だが、すぐ近くで偶然に38tという戦車を発見した。華が、鉄の匂いが近いと言っただ。だ。

辺りはすっかり暗くなっていたが、華の嗅覚ならば問題なかった。

そして、授業はとづくに終わった時間だったが、戦車を見つけたと生徒会に報告が入った。

これには、杏も胸を撫でおろしたことだろう。

さて、肝心要のみほと優花里の仲であるが、喧嘩をしているように言えば、依然、喧嘩をしているようにも見えた。しかし、表情は楽しそうというか、すっかり陰が取れている。

杏が視線を向ける先では、濡れ鼠になった優花里が沙織に羽交い締めにされて、みほは華の後ろに隠れて舌を出していた。

「これは、うーん…。仲良くなったのかな?」

「ええ、おそらく。お嬢様も楽しそうにしてらっしゃいます」

桜が言うのであれば、そうなのだろう。杏は、みほに関する一切は、桜を信用することに決めている。

「…ところで、今日の朝も秋山ちゃんと一緒に登校したって聞いたけど?」

「ええっと、まあ。お嬢様も楽しそうにしましたから」

苦笑しつつ、桜が言う。

杏は、導火線の火はついたままみだねえ、と呟いた。

最悪の事態は去ったと思ったが、どうやら先延ばしにされただけの

ようだった。

杏は肩を竦め、干し芋片手に歩き出す。

「リア充爆発しろー」

ただし、自分の見ていないところで、だ。

自分が卒業した後でなら、好きにやってくれという気分だった。

9話

「むう…、秋山離れて」

「なんでですか！西住殿ばかりずるいですよ！」

「あの、いい加減離れていただけないと歩きにくいのですが…」

時間は朝である。

学校に向かおうとマンションを出た桜とみほだったが、当然のように待ち構えていた優花里と出入り口でぼったり遭遇した。

いったい、出入り口の外でどんなやりとりがあったのかは、いい加減割愛するとして、気がつくと右腕はみほに抱かれており、左腕は優花里に抱かれていた。傍から見れば、女子同士の可愛らしい戯れ合いに見えているだろうが、その中心にいる人物は実のところ多感な思春期の少年である。これで少年の恰好が男子のものであったなら、よう見せつけてくれてくんじゃねーぞ、とでもヤンチャをしている方々に絡まれるところであった。

当然、桜の恰好は大洗の指定の制服だ。つまり、スカート姿である。それも、太ももが半分は見えているようなミニスカートだ。すうすうとして、未だに慣れなかった。

みほと優花里は桜を間に挟んでの言い合いを続けながら、のそりのそりと学校への道を進む。互いに譲らないものだから、桜はふたりに潰されそうになりながら歩くはめになった。腕はふにふにと幸せな感触を楽しんでいるが、生憎と桜の本意ではない。頭は茹るように沸騰して、正気を保つのがやつとの有様だ。ふたりの会話に耳を傾けつつも、思考力のほとんどは素数を数えるのに費やした。

先日の一件以来、みほと優花里は和解を成立させ、ふたりで会話する場面も増えていた。

入り口が入り口だっただけに和解した後も互いに遠慮はないものの、とげとげしい物言いは減って、その距離は一気に縮まったようだった。とはいえ、こうして桜を取り合うことは変わらないようで、暇があれば桜にちよつかいを出し、もう一方がそれに突つかかるというのは日常のワンシーンになっていた。しかし、それも彼女たちに

とっては、良好な関係を築くためのコミュニケーションのひとつなのだ。巻き込まれる桜としては、たまったものではないだろうが。

朝は充分に余裕を持ってマンションを出たはずである。しかし、桜の体感時間が正しければ、そろそろじやれるのは終わりにしないと学校に遅刻するような時間だった。

と、そのとき、桜は見た。

陸に揚げられた蛸みたいにだらりと体中の力が抜けきって、今にも車道に飛び出してしまうようなほどふらふらと歩く少女の姿である。恰好からして、同じ学校に通う生徒のようだ。白と緑のセーラーを着ている。歩く度、少女の体は左右に不規則に揺れて、腰まで届きそうな黒髪が合わせて踊る。まるで酩酊して駅のホームに転落する酔っ払いのようだ。

今にも倒れそうに思えて、桜は慌てて駆け出そうとした。

「だ、大丈夫——?!」

しかし、桜は忘れていた。ふたりが桜の両腕を抱え込んでいるのだ。非力な桜では、その拘束を抜け出すことは難しかった。

「んあ?」

桜の声に気がついたのか、黒い髪の少女が桜たちの方へと振り返る。

その目は今にも閉じてしまいそうなほど細くなっていて、遠目にも眠いのだということが分かった。

果たして、彼女の目に桜たちの姿は映っているのだろうか。映っているのだとしたら、さぞ珍妙な光景と思っただろう。

みほと優花里も少女に気がついて、ようやく桜の両腕は解放された。

「あの、どうかしましたか?」

「ひらひら…」

「え?」

桜が駆け寄ると、少女は地の底から響くような低い声で呟いた。これが夢の中ならいいのに、などと続けて、地面にへたり込みそうになる。向かい合っていたために、桜が倒れそうになる少女の体を抱きと

めた。

「んなっ!?!ズルいです!!」

ぴよんこぴよんこと背後で優花里の飛び跳ねる音が聞こえる。何を馬鹿なことを、と思ったが、口にすることは憚られた。

一方、みほはゆっくりと近づいて、桜越しに少女の様子を覗き込む。こちらは、心配半分、興味半分という様子である。

「その子、どうしたの?」

「分かりません。ぐったりとしているみたいですが。…あの、具合が悪いですか?」

これで病人だったらと思うと、下手に体を揺らすことは躊躇われた。かといって、抱きかかえたままでは動くこともできない。このままでは遅刻は確定だ。いっそ、救急車を呼んだ方が早いかもしれない。

すると、少女がもそもそ動く。見知らぬ少女が腕の中にいるという違和感に、桜はどうにもくすぐったいものを感じてしまった。

「でも、行かね、ば……。ああ、でも、眠……。すう……」

「ちよ、ちよっと!」

「すう……。う、すう……」

あろうことか、少女は桜の腕の中で寝息をたて始めた。みほは、あらま、と驚いている。

「起きてください、起きてください!」

どうやら具合が悪いということではなさそうだ、と判断した桜は、一切の遠慮を度外視して少女の体を強く揺すった。がくん、がくん、とむち打ちになりそうな勢いで少女の頭が前後に揺れるが、肝心の少女は一向に起きる気配がない。想像の10倍は強敵だった。

「任せてっ」

ぐるんぐるん、とみほが右腕を大袈裟に振り回す。自信に満ちた顔で笑っている。何をするつもりですかっ、と桜が訊ねると、叩けば直る!という答えが返ってきた。昭和のテレビか。

「だめですよっ、おじよ…みほさんの力で叩いたら、本当に眠ってしまいます!」

「えーっ」

不満そうに口を尖らせるみほ。しかし、桜の心配も尤もだった。みほとて、装填手を問題なくこなせる程度には体を鍛えているのだ。優花里程ではなくとも、平均的な女子よりはずっと力が強い。ましてや、力加減が苦手というきらいもある。優花里はそのあたりうまくやれそうだが、この状況、嫉妬に狂って何をしでかすか分かったものではない。

結局、桜がどうにかするしかなかった。

「起きてくださいー！じゃないと大変なことになりますよっ！」

これは脅しではない。心からの心配である。或いは、焦燥である。ぺちぺちと少女の頬を叩く。意外にも、もちもちと柔らかい感触が返ってきた。赤ん坊のような肌だ。桜は引つ張ってみたい、という衝動に襲われたが、今はそれどころではなかった。誘惑を跳ね除け、桜はぺちぺちと少女の頬を叩き続けた。

「う、うん…っ？」

さほど強い力では叩いていないが、あまり続けると赤く腫れるのは、と心配になった頃、ようやく少女が反応を示した。ぼんやりと目を開いたが、焦点が合っているとは思えない。

「ほら、立てますかっ？」

桜は少女を起こそうとするが、持ち上がらない。いや、少女は小柄だったから行けるかと思ったのだが、自分もしゃがんでいる状態ではうまく力が入らないようだった。

「じゃあ、私と西住殿で肩を貸しますから。西住殿、そっち持つてください」

「はいはい」

みほと優花里がそれぞれ少女の脇の下に手を突っ込み、起き上がらせようとした。寄りかかられていた分の体温が剥がされていく。

「ちよ、ちよっと待つてください。それなら私が」

「でも、桜ちゃんよりわたしたちのほうが力持ちだよ」

「うぐっ…」

みほのストレートな物言いは、時にぐさりと刺さることもある。実

際、持ち上げることができなかったばかりなのだ。負け惜しみ以外に、言い返せる言葉はなかった。

しかし、男として、女子ふたりに力仕事を任せるのはどうなのだ。という気持ちもあった。男のプライドというか、つまらない意地のよなものである。

しかし、優花里がいる前で、男だから、という理由を持ち出すことはできない。桜は女装をしていて、女子校に紛れ込んでいる立場なのだ。寝惚け半分の少女に知られるのもマズイ。

「では、せめておふたりの鞆は私が持ちます…。…持たせてください」
精一杯の妥協点がそれだった。



「またあなたなの？冷泉さん」

校門の前でおかつぱ頭の少女がタブレットらしきものを手に持っている。腕には風紀委員と書かれた腕章を巻いていた。みほと優花里に担がれた少女の姿を見つけると、タブレットを操作しながら呆れたような声を出した。

みほと優花里がふたりがかりで少女に肩を貸し、えっちらおっちらやってきたところだった。

「これで連続245日の遅刻よ」

にひや…?!と驚いたのは、桜だけではなかっただろう。みほと優花里も自分たちが担いでいるそれに目を向けた。1年間の授業日数から考えると、去年の入学式から毎日遅刻している計算だ。

尤も、今日の通学路での様子を見る限り、それも納得のいく数字だった。この、みほと優花里に現在進行形で担がれている少女ときたら、足の骨がこんにやくに変わってしまったのではないかと思うくらい、うまく歩くことができないのだった。みほと優花里のふたりがかりでなかったら、校門が閉まる前には到着できなかったかもしれない。

「朝は何故来るのだろうか…」

「朝は必ず来るものなの！」

至極全うな意見だが、地味に名言のような発言をする風紀委員の少

女である。それらしく言い回しを整えて、文末にニーチェ、とでもつけければ完璧だ。

彼女の名前は園みどり子と言った。

桜は学校では品行方正を是としているので、風紀委員のお世話になったことはない。というか、なつたらヤバい。身体検査でも受けようものなら、即座に男であることが判明して大事件になるだろう。全国ニュースになってもおかしくない。

そのため、(女装の件は別として、)悪いことをしているつもりはないのだが、見かけると背筋に汗をかいてしまうような相手だった。

「ええと、西住さんと秋山さんと井手上さん。あなたたちも不運だったわね」

「いえ、そんなことは…」

「今回は、冷泉さんが原因みたいだから、見逃してあげるけど、今度からは冷泉さんのことは無視して先に登校するように。分かった？」

「あ、はい。分かりました」

桜としては、彼女の心象を悪くさせたくはなかった。仲良くしておけば、あるいは抜き打ちの検査などで手心を加えてもらえるかもしれないからだ。見られて困るようなものは持ち込んでいないが、難癖をつけられては堪らない。

しかし、みほにはそういう計算ができない。というより、するつもりがなかった。

「嫌です」

「はあ!?!」

余計なことを、という顔で優花里がみほの顔を見る。

冷泉と呼ばれた少女もみほの発言の真意が掴めず、ぼんやり半開きの視線を向けた。

「困ってる人がいたら助けます」

桜は頭を抱えた。

いや、みほの言わんとすることは分かる。立派な心意気だ。平時であれば、流石はお嬢様。と感動しているところだろう。拍手をしたかもしれない。

みほは我儘ではあるが、基本的に善良なのだ。素直と言ってもいい。それこそ、小学生の頃の道徳がそのまま判断基準になっているくらいには純粹だった。

「…はあ、もういいわ。ともかく、遅刻はしないこと。次は見逃さないからね」

いじわる。と呟いて、すれ違いざまにべーっ、と舌を出す。そんなところまでみほは子供だった。

「ありがとう、助かった。この礼は必ずする」

「いえいえ、気になさらないください」

「困ってる人を見かけたら、助けるのは当然のことだもんね！」

みほは声を少し大きくして、わざとみどり子に届くように言った。桜は、みどり子の視線がこちらに向いたのでは、と思つて、背筋をぞくりと震わせる。振り返る勇氣はなかった。

「まあ、融通が利かないだけで、そど子も悪い奴じゃないんだ」

「そど子？」

「そのみどり子だから、そど子」

「へえ、変な名前——」

「あの、聞こえますから…」

珍しいことだが、優花里がみほを窘めた。

みほは意地悪な人間が嫌いだ。しかも、やられたならやり返す、という子供っぽい性格だ。ねちねちと嫌味を言われるのなら、こちらも嫌味を言つてやる、というのがみほである。

みほとしては、良いことをしたのだから褒められるべき、と思つているだけなのだ。それなのに、遅刻だから、規則だから、というつまらない理由で嫌味を言われるのは我慢ならない。

尤も、みほの悪口の語彙は小学生なので、傍目には微笑ましく映るだけなのだった。

もう大丈夫だ。と言つて、冷泉と呼ばれた少女はみほと優花里から離れた。相変わらず足元はふらふらと波に揺れるクラゲのようであるが、通学路での様子よりはマシなように見える。

「あなたも。…ありがとう」

「私は、その。何もできませんでしたから」

恥ずかし気に桜は頬をかく。この少女も知らないことだが、桜は内心で密かに凹んでいた。小柄な女の子ひとり担ぐこともできなかった、己の非力さについてである。

しかし、少女は、そんなことはない。と言った。

「最初に声をかけてくれたのはあなただ。私は冷泉麻子、2年F組」

「2年C組の井手上桜です」

「A組の西住みほだよ！」

「井手上殿と『同じ』クラスの秋山優花里です」

心なしか「同じ」という単語を強調するように言った優花里に対し、みほは剣呑な視線を向ける。

しかし、麻子はふたりの小競り合いには目も向けず、何か別のことに気づいたようだった。

「ああ、あなたたちが沙織の言っていた」

「沙織さんを知ってるの!？」

仲の良いお友達の名前が聞こえて、みほの興味は一瞬で麻子に移った。

麻子はほんの少し表情を柔らかくして、穏やかな口調で答えた。

「友人だ」

大切な宝物を誇るようなその様子に、隠しきれない特別な感情があることを桜は察した。



キンコーン、と予鈴が鳴る。昇降口にも辿り着いていない桜たちは大慌てだった。

HRに間に合わなくなる、ということ、慌てて教室まで走った桜たちであったが、努力の甲斐もむなしく、階段を上りきったころにはそれぞれの教室から担任の話す声が聞こえはじめた。

尤も、普段は品行方正、成績優秀で通っている桜は、大したお咎めを受けることもなく席につくことができた。普段の行いというものは大事である。優花里も桜と一緒に怒られたため怒られることはなかった。

ちなみにみほは、というと、教室に駆け込んですぐに、またお前か西住い！と担任から怒られるところだった。みほとしては、HRに遅刻したのははじめてである。しかし、しょっちゅう別のことに夢中になってしまふみほは、授業の開始時間に遅れてしまうことは少なかつた。だが、今回ばかりはみほにも言い分がある。HRに遅れた理由を素直に話すと担任は途端に笑顔になって、よくやったな西住、と頭を撫でられたということである。

果たして、それは本当に高校のHRの風景なのだろうか。小学生と言う方が違和感がない。尤も、みほは誇らしげに語っていたので、まあいいか、と桜は思っている。

「ところで、誰か冷泉さんについて詳しい方はいませんか？」

授業の合間の休み時間、桜は周囲のクラスメイトに尋ねていた。

朝のこともあり、最初は優花里に尋ねたのだが、当然、戦車に關係ない事柄では優花里はまったくの戦力外なのであった。まあ、クラスメイトのことも碌に知らない優花里に、他のクラスの生徒について尋ねたこと自体がそもそも間違いである。人には向き不向きがあるのだ。

聞けば、流石は女子校。どこにでも詳しい人はいるものであった。

そもそも、冷泉麻子は学年ではそれなりに有名なということである。

曰く、頭脳明晰、テストの点数では常に学年主席であるが、低血圧で朝に弱く、遅刻・サボりの常習犯。風紀委員にも目を付けられていて、進級も危ぶまれているということだった。

ちなみに、身長は145cm。誕生日は9月1日のおとめ座。血液型は、当然AB型、ということである。桜としては、特に必要のない情報だった。何が当然なのかも分からない。

「王さんは、…ええと、普段から冷泉さんとは親しくされているんですか？」

「いや、全然？」

放送部員だという彼女は、校内の噂や事件についてはアンテナを張っているのだ、と答えた。その情報をどうやって集めているのか、

ということについては機密事項ということである。からからと笑った。

桜は、彼女の動向には注意を払い、カメラや盗聴器には気を付けようと固く決心した。とりあえず、今日は部屋に帰ったら、押し入れからラジオを引っ張り出さなければ。確か、母から貰った古いラジオがあつたはずである。

「ちなみに、冷泉さんの交友関係は狭いようで、私が知っている限り、仲がいいのはA組の武部さんくらいですね。その分、お互いの家を行き来するような仲だとか。むふふふ、興味深いです」

そう言つて、今度はにやにやとやらしい笑みを浮かべる。眼鏡が光を反射させたので、余計に怪しく映つた。

桜は、彼女のことを心の中で「歩くスピーカー」と呼ぶことに決定した。

10話

冷泉麻子にとって、武部沙織とは特別な人間だ。かけがえのない人間だ。

その関係性を言葉にするならば、月並みな言葉だが「親友」になるのだろうか。あるいは、「恩人」かもしれない。少なくとも、「他人」でないことは確かだった。

物心がついた頃から、麻子の優秀さは凶抜けていた。所謂天才というやつで、文字を読めば一瞬で記憶し、どんなに長い文章であっても簡単に諳んじることができた。全く役に立たない大道芸だが、やろうと思えば広辞苑の見開き1ページだって暗唱することができるだろう。

特に、麻子が優秀であったのは、その能力に自覚的であったことだった。あるいは、不幸なことだったのかもしれない。

当然のように麻子は浮いた。アヒルの群れに白鳥を混ぜれば然もありません。同じ年頃の子供が麻子の話題についてこられるはずもない。周囲のクラスメイトが数の数え方を必死になって覚えている頃、冷泉麻子は、とつくに数学という世界に足を踏み入れていた。

ある種の万能感。浮かれていた、と言っても過言ではない。その頃の麻子は性格が悪くて、他のクラスメイトたちが全部馬鹿に見えていた。いや、本当のところ、馬鹿に見えていたのは生徒だけではない。そんな馬鹿に物を教えている教師たちすら、内心では小馬鹿にして、心底見下していた。

分からないことなんて、何一つない。本気で麻子はそう思っていた。

できないことだって、自分にはないんじゃないかと思った。1000mを10秒で走ることだって、空を飛ぶことだってできるかもしれない。

だから、自分を叱る両親も馬鹿だ。口うるさい祖母も馬鹿だ。

本気で麻子はそう思っていた。

そして、両親が死んだ。事故だった。

悲しかった。

いつものように朝は喧嘩をして、いつてきますも言わないで家を飛び出した。

それが麻子の日常だった。

放課後に家に帰れば、どうせ朝のことなんか忘れて、母親は麻子の好物を食卓に並べるのだ。

笑った顔で、学校はどうだった？なんて訊ねるのだ。

すると、麻子は無然とした顔で、いつも通りだった、と答えて、箸を動かす。テストがあれば、見せてやる。当然100点だ。すると、何がそんなに嬉しいのか、父親は麻子の頭を撫でるのだ。流石俺たちの子供だ、なんて誇らしそうな顔で撫でるのだ。子供の麻子からすれば、その手は大きくて、ゴツゴツしていて、撫でられたって全然気持ち良くはない。だけど、気分は良かった。

そんな日々は、二度と戻って来ない。

不器用で温かい父の手は、二度と自分の頭を撫でることはないのだ。

家に帰って、ただいまを言って、そして、何も返ってこなかった。

その瞬間、麻子は世界の壊れる音を聞いた。

麻子は倒れて、過呼吸を起こして、そして、自分の部屋から出て来られなくなった。

どんなに頭が良くなったって、麻子にできることは何もなかった。何一つできなかったのだ。

事故が起こると予見することも、時計の針を巻き戻すことも、死んだ両親を生き返らせることも、何も。

当然だ。冷泉麻子は神じゃない。所詮、人より少し賢いだけの子供に過ぎない。

そうして、麻子の万能感は打ち砕かれて、外の世界が怖くなった。恐ろしくなってしまった。何もかもが未知のように思えて、足元の地面が全部崩れてしまったように感じられて、体の震えが止まらなくなった。

いつそ、もう死んでしまおうか、と思う。

こんな思いをするくらいなら、何も考えられなくなってしまうおうか、と思った。布団の中で、祖母のうるさい怒声にどやされながら、麻子は1週間くらい本気で悩んだ。死んだら、もう一度、あの人たちに会えるかもしれない。都合のいい逃げ道が見つかった気がした。

「麻子の馬鹿っ！」

突然、部屋の戸が開けられて、誰かがずかずかと入ってくる。

被っていた布団は引っぺがされて、思いつきり頬を叩かれた。

じんじんと痛い。熱を感じた。ひりひりと痺れる。

殴つたのは沙織だった。

沙織は、麻子のただ一人の友人だった。

「馬鹿っ、馬鹿っ、馬鹿あ…っ!!」

子供の力だ。どれほど殴られようと、大して痛いはずもなかった。だから、麻子の両目からは涙が零れない。その代わり、と言わんばかりに、沙織の目からは大粒の涙が零れて盛大に麻子の布団を濡らした。

訳が分からなかった。

どんなに考えたところで、麻子には沙織の泣いている理由が見当もつかなかった。

沙織は、確かに麻子にとってただ一人の友人かもしれない。しかし、それだけだ。麻子は友人が欲しいと思ったこともなかったし、面倒だからと沙織を無視したこともあった。友人としての交流は、あまり深いものではなかったはずである。一方で、沙織はクラスでも人気者だった。明るいし、人がいいから友達はたくさんいた。男女問わず、たくさんいたのだ。彼女にとって、麻子はたくさんいる友達のうち一人に過ぎない。

そんな沙織が、まさか麻子のために泣いているとは思えなかったのである。

沙織は、一頻り麻子を叩いたあと、べしやべしやの顔のまま麻子を抱きしめた。麻子にはどうすればいいか分からない。麻子は、自分人付き合いが苦手なんだとはじめて気がついた。ともかく、麻子はされるがままである。沙織は一向に泣き止まないし、おかげで麻子の服

は沙織の涙でぐしゃぐしゃになっている。ただ、久しぶりに触れた人のぬくもりに、安心感みたいなものを覚えたのは確かだった。

沙織が泣き止むまで、たつぷり30分はかかったと思う。その間、麻子は沙織の頭を撫で続けていた。訳も分からないまま殴ってきた相手である。理屈には合わないが、そうすべきだと麻子は思ったのだ。

やがて、沙織が泣き止むと、麻子は沙織に手を引かれて、しばらくぶりに部屋の外へ連れ出された。

電球の切れかかった薄暗い廊下をふたりで歩いて、別の部屋に向かう。そこは、リビングだ。ことん、ことん、と麻子のおばあがテーブルの上に皿を並べていく。

おばあと目が合った。

おばあは、麻子のことを見つけると、一瞬目を大きく見開いた。しかし、すぐにいつもの仏頂面に戻ると、早く座んな、とぶつきらぼうな声をかける。

沙織に手を引かれて、麻子はテーブルに向かった。

テーブルには、あきらかに一人分には多すぎるほどの食事が並んでいた。

「…いただきます」

麻子は、久しぶりに声を出した気がする。声はかすれていて、自分の声とは思えなかった。

ここしばらく、まともにご飯なんて食べていなかった。部屋にためこんだお菓子と、おばあが毎日運んでくれた食事の中から、水だけを貰って生き延びていた。

箸を使って、魚のフライに手を伸ばす。麻子は、大口を開けて魚のフライに噛みついた。しゃくり、と音が鳴って、魚のフライは千切れて麻子の口の中に入る。しゃくり、しゃくりと噛み潰して、麻子は気づくと泣いていた。

お母さんの作ったフライとよく似た味がした。

◆ ここ最近、何やら視線のようなものを感じている。

大抵、視線を感じるのには背後だ。しかし、いくら振り返ろうと見つかるのは、間の抜けた顔でこちらを見つめる優花里の姿だけだった。

「あ、どうかしましたか、井手上殿？」

「いえ、…何でもありません」

桜には、優花里の視線はもう慣れたものだった。

最初の頃はむず痒いと感じていたし、男ということがバレるんじゃないかと不安にもなっていたが、最近では気にするのも馬鹿らしいと思うようになっていた。

何せ、優花里の顔を見れば全部書いてあるのだ。かくしごとには致命的に向いていない性格である。

では、一体誰だろう。

みほたちや生徒会の面々でないことは確かである。彼女たちであれば、たとえクラスメイトとの雑談中であつてもおかまいなしに声をかけてくることだろう。

或いは、放送部の王大河。桜が内心で密かに「歩くスピーカー」と呼んでいる彼女はどうか。いや、彼女の挙動には注意を払っている。今だって、彼女は桜とは別のグループでおしゃべりの真っ最中だ。

気のせい、ということはない。

大抵、こういう視線を感じる時は、実際に観察をされているのだ。桜は、過去の経験から良く知っていることだった。

なにせ、ストーカー被害に遭つたのは一度や二度ではない。最初の頃は恐ろしくて泣いてしまったこともあつたが、最近ではすっかり慣れたものである。対処の仕方でも手慣れたものだ。

少なくとも、マンションに盗聴器の類いがなかったことは確認済みである。隠しカメラも見つからなかった。

そもそも、連日学園の中で視線を感じているのだから、学園の生徒か教師が犯人だと推定できる。しかし、隠れて観察をされるような心当たりはなかった。

(そろそろ、お嬢様にも話しておいた方がいいかな…?)

しかし、話した後のことを想像してみて、余計に話が大きくなりそうだと気がついた。みほのことだ。授業を抜け出してでも、そのス

トーカーを捕まえようと動くだろう。大事に思ってくれれば嬉しいが、迷惑をかけたとは思わない。

(まあ、観察が校内に限られるなら、僕がボロを出さなければいいだけの話か)

生憎と桜は、この数週間の間につきり女装での生活に慣れてしまっていた。最初は申し訳ない気持ちでいっぱいだった女子トイレも、もはや何の遠慮も、気恥ずかしさもない。今では、ほとんど無感情だ。それこそ、一緒の個室に入って桜の「アレ」を見られるか、密着した状態で体を熱心に触られでもしない限り、もはや男とバレることとはないだろうと思われた。もしかすると、裸の上半身を見られたつてバレないかもしれない。だったら、あとは根競べだ。なあに、これでもし、ストーカーがあまりにしつこいようであれば、生徒会さいしゅうしゆだんを頼ればいい。

そんな、如何にもなフラグを立てていることに、井手上桜は気づかない。

本来、井手上桜という人物はもつと慎重な性格である。しかし、大洗のお気楽な空気に感化されたのか。或いは、年相応の子供らしさが顔を出したのか。ここ最近の桜は、自らのネジが緩んでいることに気がついていなかった。

慣れというものは、必ずしも良い結果ばかりをもたらすとは限らないのである。

◆ さて、冷泉麻子と出会ってから数日が経過した。

その間、大きな動きは桜の周りでは起きていなかった。強いてあげれば、麻子が戦車道に参加するようになったくらいだが、桜は戦車道の練習には参加できないので、あまり関係ないといえば関係ない。お昼の時間に、食堂で一緒に食べる面子が一人増えただけのことである。

彼女の低血圧は筋金入りのようで、朝はおろか、昼食の時間になっても眠たげにしていることも多かった。廊下で麻子を見かけると、まるで夢遊病者のようにふらふらと歩いている。おそらくは、知り合っ

たからこそよく目に付くようになってただけなのだろうが、よく今まで、自分はこんな有様の生徒が気にならなかったものだ、と桜は不思議に思う。ここ数日では毎日のように見かけているのだが。

そして、今日も桜は、廊下をふらふらと歩く麻子の後ろ姿を見つけていた。

すれ違う生徒たちは、麻子の形相にびっくりして道を開けている。しかし、彼女がどこに向かうのかは知らないが、そんな様子で階段を降りようものなら、足を滑らせてしまうと桜は恐ろしくなった。

桜は今、実に珍しいことだが一人である。クラスが一緒なため、どこに行こうにも優花里と一緒にいてくるし、放課後は必ずみほと一緒だ。学校の中で桜が一人でいる時間は、意外なことに短い。それは例えば、体育の時間くらいなものである。桜は、体が弱いと嘘をついて、体育の授業は免除してもらっている（着替えを覗いたり、過度に接触しないための緊急措置だ）。たまに見学をすることもあるが、最近はおっぱら点数稼ぎのために先生のお手伝いだ。

「あの、冷泉さん…?」

「その声、井手上さんか。…どうした、そろそろ次の授業がはじまるぞ?」

「その言葉、そっくりそのまま冷泉さんにお返ししたいのですが…」

桜は正当な理由があつて、今は職員室にプリントを運んでいるところである。教師に見つかったところで、後ろ暗いところはない。もうすっかり、教師陣には共有されていることである。

一方、麻子には教室に急ごうとしている様子はなかった。

「自主休講だ。眠いので、保健室に行く」

「およそ堂々として言うべき台詞ではないと思うのですが…。ええと、大丈夫ですか?保健室、1階ですよ。その状態で階段を降りられます?」

ふるふると今にも閉じてしまいそうなまぶたが、あらん限りの眠気を訴えている。

桜は想像する。足を滑らせた麻子が、階段の下で潰れたザク口みたいになっている未来だ。それは、いつか実現してしまいそんな恐ろし

さがあつた。

桜は、麻子とは友人でもなんでもない。しかし、既に麻子は、みほとつての友人にカウントされていることだろう。麻子が死んだり、そうでなくても大ケガをすれば、みほはきつと悲しむはずである。

「あもう、少しだけここで待つててもらつていいですか？すぐに戻つてくるので」

「…？ああ、構わないが」

桜は、傍目に注意をされない程度の早歩きに移行し、さつさとプリントを職員室に届けようとする。幸い、職員室まではすぐだった。あとは、追加の仕事を頼まれないように具合の悪そうなフリをして、麻子を待たせた場所まで戻るだけである。嘘をつくことは苦手でも、演技をさせればフーディーニだつて見破ることはできないだろう。

事実、3分とかからずに桜は戻つてきた。

「はい、お待たせしました。それじゃあ、行きましようか」

「行くつてどこに？」

「保健室です」

麻子は、ぱちぱちと瞬きをした。明らかに驚いた様子である。

「井手上さん、具合でも悪いのか？」

「そんなわけないじゃないですか。風邪もひいたことがありませんよ、私は」

西住の使用人を務める以上、体調の管理は初歩の初歩である。生まれてこの方、桜は一度も体調を崩したことがなかった。みほやまほの看病をしたことがあるが、一度として感染したこともない。

ちなみに、桜は最初聞いたとき、目を丸くして驚いたのだが、西住家では風邪をひいた場合、無理やり10kmほどをマラソンさせ、汗をかかせるという慣習があつた。しかも、戻つてきたら水風呂で無理矢理熱を下げさせる。当然だが、そんなことをさせれば病状は悪化するから、良い子は真似をしてはいけない。西住流の人間は、きつと体のつくりが常人とは違うのだ。そんな、現代医学に喧嘩を売るようなしきたりを、みほもまほも桜に叱られるまで疑問も抱かずに続けたのだから、無知とは恐ろしいものである。

閑話休題。

「そんな様子の冷泉さんをお一人で保健室に向かわせるなんて、危なっかしくてできませんよ」

「…そうか。それはありがたいが、その、実際問題どうするつもりだ？」

「へ？」

「こう言ってはなんだが、井手上さんは私を背負うことも難しいだろう。背も私よりずっと高いし、肩を貸してもらっても歩きにくい」

「あー…」

麻子の言わんとすることは、桜にもすぐに分かった。

つまり、余計なお世話なのである。寧ろ、手を貸してもらったほうが歩きにくい、とまで言われてしまえば、桜にできることはなかった。実際には、桜の筋力でも廊下で麻子を背負うくらいのことではできない。できるが、階段を麻子を背負って降りるのは怖い。麻子だって怖いだろう。平らな道を歩くのが精一杯だ。

また、麻子の言うように背の問題もある。桜の身長は、男子にしては低い、それでも160cmはある。一方で、麻子は145cmしかない。同年代の女子の中でも特に小柄な体格をしているのだ。15cmも違っていれば、肩を借りて歩くのも一苦勞である。

だからといって、放置はあり得ない。

「この学校、エレベーターとかありませんか？」

「あると思うか？」

少なくとも、桜は見たことがなかった。

◆ 「や、…やっとなつきました」

桜たちはようやく、という思いで保健室に辿り着いた。扉を開けると、消毒液の独特の匂いがつんと鼻にくる。ゾンビのように両手を前にだらんと伸ばしながら、麻子は保健室のベッドを求めて部屋のなかに入ってしまった。

桜は、と言うと、おっかなびっくり保健室の中を覗き込む。保健室の中は無人大った。鍵もかけず、養護教諭はどこへ行ったのだろう。

「この時間は、先生も留守にしていることが多いんだ」

だからこそ、この時間は気兼ねなく保健室を仮眠室の代わりにできる。麻子は言った。

そこまで把握している麻子のことを、果たして感心すればいいのか、それとも呆ればいいのか。桜は、たぶん後者だろうな、と思いつながらも口には出さなかった。

結局桜には、麻子の手を掴んで転ばないようにする、というのが精いっぱいだった。麻子の右手は手すり、左手は桜に繋がれ、ゆつくりゆつくり、引つ越しの業者が洗濯機でも運んでいるみたいな足取りであった。たった1階分の階段を降りるだけのことで、あんなにも神経を使ったのは生まれて初めての経験である。下手な運動よりも、ずっと疲れたような気分だ。足なんか、がくがくに振るえているような気がする。

「どうだ、井手上さんも休んでいったら」

麻子は、気づくとすでにベッドのうちのひとつを占領していた。それでいて、保健室にはもうふたつ、空のベッドが用意されている。真っ白で、ふかふかのベッドである。

「では、少しだけ」

横になるつもりはなかったが、教室に戻ったところでクラスメイトはみなグラウンドで運動の真っ最中だ。確か、今日の種目は持久走である。優花里あたりは喜んで走っていそうだが、桜にも麻子にも、どうしてカンカン照りのグラウンドで延々と走り続けるだけの競技が存在できるのか、一生理解できる瞬間はやってこないだろう。

桜は、麻子の寝ているすぐ隣のベッドまで歩いて行って、スカートを押さえながらベッドの上に腰を下ろす。気持ち、ベッドの Springs が体が跳ねた。横になったら、さぞ気持ちがいいことだろう。

この時間、教室に戻ったところで、一人寂しく自習をするくらいしかやることはない。それならば、可愛い少女の寝顔でも眺めているほうが、よっぽど有意義な時間の過ごし方であるように感じられた。あるいは、こっそりみほの教室を覗いて、みほが学業に勤しむ様子を観察するのもいい。バレた時が怖いので、実行に移すような真似はしな

いが。

静かな時間が流れていく。

麻子は瞼を閉じ、静かな呼吸の音だけが聞こえる。わずかに外から授業の音、先生が教科書を読む声、黒板を叩く音、それらが環境音として耳に届いた。

「なあ、井手上さん」

「はい、なんですか？」

少し、桜も眠りそうになっていた。横になっていたら危なかった。あと数分、麻子が声をかけなかったら、桜は無防備にクラスメイトの前で眠っていたかもしれない。

「その、な。私が間違っていたら、申し訳ないんだが」

瞼を閉じながら、麻子が言う。

言いよどむような気配。桜は麻子と接した時間は短いが、らしくないと思った。麻子は優しい性格だが、言うことは言うタイプだ。けれど口数が多いわけではないが、寡黙というわけでもない。そのストレートな物言いは、桜は好ましいと感じていた。

それでも、それでもだ。

当然、それも発せられる言葉に依る。

時には心の準備が必要だし、オブラートも欲しくなる。結果は一緒かもしれないが、過程も大事だと井手上桜は思うのだ。何より桜は、予想外の事態が大の苦手である。

何かを決心して、麻子が言った。

「…井手上さん、男だろ」

桜は一瞬、耳が遠くなっただのかと錯覚した。

青春の音たちはどこかへと消え去り、まったく無音の空間に放り込まれたような感覚。現実感あまりに薄く、脳が理解するのを拒んでいた。

11話

井手上桜にとって、人生とは女装の歴史だったと言っても過言ではない。

はじめて女物の服を着させられたのはいつだったか。

本人に記憶はないが、それは生まれてすぐの頃である。

井手上の家は、両親とも働いている。桜の母親である井手上菊代は、戦車道の日本最大の流派、西住流本家の使用人であり、日本戦車道連盟の仕事も手伝っている。収入は、普通の家庭よりは多かつたはずだ。しかし、菊代の学生時代からの友人にして、今は雇用主である西住しほには、桜よりもひとつ年上になる娘がいた。しほは、昔から菊代には世話になっていたし、子を持つ母親としては先輩だ。つまり、ここは日ごろの恩返しをしなくては、と要らぬ気遣いを発揮したのである（この時、しほ自身も第2子を妊娠中である）。

結果、まほのお下がりが大量に送られてきた。それも、大抵は一度も使っていないんじゃないか、と思うような新品同然の綺麗な服ばかりだった。しほは、赤ん坊の成長する速度を勘違いしていたのである。あれもそれもと買い揃えるうち、まほはすすくと大きくなっていった。

尤も、赤ん坊のころは男とか女とか、そういう性差を一番無視できる時期だ。菊代にも、しほは善意でやっていることが分かっていたので、ありがたく頂戴することにした。彼女の善意を汲んで、桜にまほのお下がりを着せたのだ。

と、ここまでならよかったのだが。

しほは、その次の年も、その次の次の年も、次の次の次の年も、同じようにまほのお下がりを受け取ってきた。

どうやらしほには、菊代の役に立てたことが嬉しかったようである。しかも面倒なことに、桜に着せてみた感想を日々聞いてきたりした。これには、流石の菊代も苦笑いであるが、まさか着せていないとは言えない。しほは全くの善意なのである。だから、桜の写真を撮って見せたり、実際に西住の家に連れて行って、しほに抱かせたことも

あつた。その度に、しほの鉄面皮は少しだけ緩むのだ。

そんなやりとりが、桜が5歳になるまで続けられた。

5歳にもなると、流石に自我が芽生えてきて、桜も女の子の服は嫌だと言うようになった。ひらひらのスカートやピンクやオレンジのかわいい服ではなく、もつと男の子っぽいズボンなんかをはきたいと言ったのだ。その頃には、菊代も我が子のあまりの可愛さに感覚がマヒしていたところだったが、桜の言葉に正気を取り戻した。そう、我が子は男の子なのである。

しかし、その頃のみほとまほの服装はどうだったか、というと、スカートも全く履かないわけではなかったが、どちらかと言えば、ズボンをはくことが多かった。毎日外で泥んこになるまで遊ぶようなわんぱくな子供だったのである。つまり、ズボンもまほのお下がりだった。

これは、菊代も桜に話していない事実なのだが、実は、桜が小学生の頃の私服のほとんどがまほのお下がりである。まほがかわいい服を好まなかったことが幸いしていた。そして、聡い子供だったまほは、当然、桜の着ている服が自分のお下がりだということに気づいていた。気づいていたが、敢えて口にするようなことはなかった。まほとしても桜のことは気に入っていたから、桜が自分の服を着ているのは悪い気分ではなかったのだ。

さて、普通ならば、男児が女兒の服を着ても違和感がないのは、精々が小学生の低学年くらいまでの話である。それは当然、精神的な側面もあるが、外見的な問題も無視できない。男と女では、顔つきは違うし、体つきも違うのだ。成長するにつれて如実に違いが表れてくる。図形で例えるなら、女性は大丸で、男性は三角や四角だ。

しかし、中には例外もある。

ホルモンバランスの問題なのか、遺伝的な事情なのかは分からないが、ともかく、桜は一向に男性らしい見た目には成長しなかった。それどころか、桜は中学、高校と進学するにつれて、ますます女らしい体つきに変化していった。線は依然として細いままだが、体つきは心なし丸みを帯び、肌は柔らかくなった。ウエストも少しくびれてい

る。それは、神様が桜の設計図を間違えてしまったのでは、と疑わずにはいられないほどである。

要するに、桜の容姿を見て、男だと言いつてるのは非常に難しいことだった。挙げ句には、男子の制服を着ていても、男装を疑われる始末である。ましてや、容姿以外にも声だつて中性的だし、女系の家で使用人を務めていることもあつてか、所作も洗練されていてどこか女性的な色気を感じさせる。そんな桜を見て、まほはからかい半分、嫉妬半分の調子で、「桜に女らしさで勝てる気がしない」と言つたこともあつた。

家にいる時の、自然体でさえそれなのだ。幼い頃から家族のように接しているまほでさえ、たまに桜の性別を忘れる瞬間があるほどなのだ。女装をしていて、さらに女子生徒としての振る舞いを意識している井手上桜など、股間にあるアレを確認したところで、何か幻覚を見ただで済まされそうなものである。

だからこそ、角谷杏は、露見する危険^{リスク}を承知でしほの提案を受け入れた。

それこそ、桜の股間にあるアレを写真に撮られて、学校新聞に掲載でもされない限りは大丈夫だろうと思つたのだ。

角谷杏は、人を見る目には自信があつた。およそ一年、生徒会長として大洗学園艦の運営にも携わつてきたのだ。その経験値は、もはや学生の枠には収まらない。

その杏をして、桜の性別を見破れるとは思えなかつた。落ち着いた色合いの着物を見事に着こなした桜の姿は、事前にしほから男であると聞かされていたにも拘らず、やはり女性にしか見えなかつたのだ。知らされていなければ、二つ返事で桜の転入を許可しただろう。

だから、桜の性別が露見するとすれば、それは余程の事態だと思つている。

尤も、人は何かしらぼろを出すものだ。どれだけ完璧と思われた計画であつても、大抵1つか2つは、必ず粗が見つかるものだ。杏は承知していた。ましてや、杏は桜のことをよく知つているわけではない。どれほど理知的で注意深い性格であるかなど、一度の会話だけで

把握することはほとんど不可能だ。角谷杏は、臆病ちゆういびがひなのである。

最悪の場合、とかげのしつぽにされる準備があるだなんてことは、桜は当然知るはずもなかった。

◆ 「…井手上さん、男だろ」

保健室の真っ白なカーテンが風に揺れた。

窓の外には、だらだらに汗を垂らしながら、それでも健気に走り続けている級友たちの姿が映る。

静寂。

保健室の中には、音はなかった。

それでも、どくんどくん、と激しく脈打つ音が、自分の中から聞こえる。むしろ、うるさいくらいだった。

桜は何かを言おうとして、口を開く。しかし、桜の口は、ぱくぱくと開閉するばかりで、意味のある言葉は漏れてはくれなかった。

桜は、予想外の事態には滅法弱い。

何をするにも必ず事前の準備を欠かさず、頭の中で何度も何度もシミュレーションを重ねるタイプだ。あるいは、何かを真似る。大洗での生活においては、桜は記憶にある母の姿を模倣トレースしているのだった。母ならば、こうするだろう。こう答えるだろう。使用人として、母を手本に、その背中をずうつと目で追ってきたおかげだった。そんな桜に対し、突如放ほうられた爆弾は、あつという間に桜の思考力を奪ってしまった。

当然だ。母は生来きくよの女性なのだから、そんな質問が放られることはあり得ない。そんな事態のマニュアルは、整備されていないのだ。幸い、取り乱すということはなかったが、何も反応ができないという姿を見せては、麻子の言葉が核心をついていると認めるようなものだった。

けれど、桜には悪足掻きをする以外の選択肢はない。

たとえば、冷静に考えたところで、今更何を言おうと無駄だろうという結論に至ることは間違いない。

それでも、桜は認めるわけにはいかなかった。

もしも、ここで誤魔化すことができなければ、桜はこの学校にはいられなくなる。それどころか、最悪の場合、牢屋の中だ。二度とみほに会うことはできないかもしれない。

ぐるぐる、ぐるぐると最悪の想像ばかりが頭の中を埋め尽くす。

想像の中の留置所にしほが面会にやってきたあたりで、ようやく桜の意識は現実に戻ってきた。

「い、嫌ですねえ、冷泉さん」

桜は、どうにかこうにか、口を動かす。ふるふると唇が震えていることは、ベッドに横になった麻子からも分かっただろう。

背中にはじんわりと嫌な汗をかいていて、頭の中身は未だに大部分がマヒを起こしている。それでも言葉を紡ぐことができたのは、桜の意地のようなものだった。

「私のどこを見たら、その……お、おと、…男に……うう」

しかし、それはそれとして、自分が男に見えないなどという暴言を、他でもない桜自身の口から言うというのは、ひどく精神にダメージを受ける自傷行為のようなものだった。

桜は、一度として女らしくなりたいなどと望んだことはない。むしろ、男らしくなりたいと、涙ぐましい努力を重ねた過去があるほどだ。自分の容姿を必要以上に卑下することはないが、私服を着ていても女性と間違えられるのは、なかなか思春期の少年にとっては辛いものがある。

むしろ、女装をして大洗に通っているという事情さえなかったら、麻子の言葉に感動を覚えたかもしれない。恋愛感情を抱くということも、もしかしたらあり得たかもしれない。少なくとも、普段のすましたキャラクター性などは投げ捨てて、大声とともにガッツポーズをしただろう。

それくらい、桜にとっては衝撃的な言葉なのである。

「そもそも大洗は女子校ですよ。お、男が通えるわけじゃないじゃないですかあ！…あ、あははっ、あははははっ！」

小学校の学芸会だって、もう少しまともに演技ができるだろう。

桜の目は明らかに泳いでおり、声は震えてしまっていた。棒読みと

か、それ以前の話である。

やがて、麻子の目がかわいそうなものを見るような目に変化していると、桜は気がついた。

これは、演技にそれなりの自信があった桜にはショックである。

しかし、桜は負けを認めるわけにはいかなかった。

とにかく、思いつくままに言葉を投げる。どれだけ自分が女らしいのか、ということとを並べたてた。

その度、桜は自分の心を金づちで殴りつけているような気分を覚えたのだが。

そうしているうちに、桜の精神に限界が訪れた。

――

ほろり、と温かいものが桜の頬を伝う。

混乱が桜の臨界点を越えたのだ。

「井手上さんっ!?!」

これには、流石の麻子も目を大きく見開いて跳ね起きた。

靴下ということも忘れて、ベッドから床に足を下ろし、桜に駆け寄る。だからと言って、麻子にはどうすることもできなかった。

ただ、呆然とした表情で固まって、ひたすらに涙を流し続ける桜のまわりで、おたおたと慌てることしかできない。

その姿は、果たして桜の目に映っているのだろうか。麻子には、桜の様子が機能を停止したロボットのようには思えて恐ろしくなった。

「井手上さんっ!?!井手上さん!?!」

がくがく、と肩をゆすり、桜の反応を確かめる。

しばらくの間、桜はされるがままで、一切の反応を示さなかった。首ががくんがくんと前後に揺れる。

そのうち、麻子まで泣きそうになる始末だ。

そうして、1分以上は揺すり続けていただろうか。

桜の頭がもう少しで取れそうになった頃、ぼそりと力のない声が漏れ聞こえた。

「れい、せいさん…」

麻子は、何かに救われたような気持ちになって、それを待った。

果たして、弱り切った桜の口から聞こえたのは、何かを悟りきった上での、ささやかな要求だった。

「介錯をお願いしてもよろしいでしょうか」

「いいわけあるかつ！」

麻子は、自分がこんなにも大声を出せるのだ、ということをはじめて知った。



ようやく桜が平静を取り戻した頃には、授業の時間はあと半分もなくなっていた。窓の外では、級友たちが砂の上ということも気にせず寝転がって休んでいる。

桜と麻子は、隣あったベッドにそれぞれ座り、互いに向かい合っていた。

「お見苦しいところを……、すみません」

「いや、こつちもなんというか、すまん」

桜は、生まれたての赤ん坊のように顔を真っ赤にしている。

人前で泣いたことなんて、果たしていつ以来のことだったろうか。ともすれば、桜のメンタルが弱いように思われてしまうかもしれないが、それは誤解である。ただ、桜の状況があまりにも特殊であり、日々のストレスや蓄積されたプレッシャーが吹き出してしまったに過ぎない。

桜とて、普通の思春期の少年なのである。

周りは同年代の異性だらけで、しかも、桜は異性であるとバレてはいけないのである。

およそバレないだろうとは、桜自身も思っていた。しかし、意識をしないわけにもいかなかった。自分は異物であるという自覚、皆を騙しているという罪悪感。それこそ、スパイか何かの訓練を受けたわけでもなければ、自ら志願をしたわけでもない。桜の感じていた精神的な不安は、想像を絶するものであっただろう。

そんななかで、大洗の空気は心地よかった。女子校というのは、簡単に慣れるような環境ではなかったが、生徒はみな優しく、何より自然体だった。そんな空気に感化されたのか、そのうち、桜も演技を忘

れることが多くなり、肩の力を抜いて生活できるようになった。

当然、それは油断にも繋がったことだろう。振り返れば、桜にも自覚がある。しかし、桜が精神に抱える負担は、ずっと軽いものになっていた。段々と、大洗に通うことが苦痛とは感じなくなっていたのである。

そんなところに、これだ。

桜は自分の迂闊さを責め、後悔した。そして、自身のアイデンティティを崩すような発言を繰り返したことで、思考は負のスパイラルに陥った。

やがて、桜の豊かすぎる想像力は、自分を排除しようと痛罵するクラスメイトや沙織たちの幻影を作り出すに至る。彼女たちは、犯罪者を見るような目を向けて、執拗に桜のことを責め立てた。

意外だったのは、桜自身は友達とも思っていないが、沙織や華の幻影からの言葉に、胸が痛み、鼻の奥がつんとしたことだった。

「その、そういうつもりではなかったんだ…」

麻子が困ったように言う。

「どうしても気になってしまつて、確かめたくなくなった。誰にも言うつもりはないし、井手上さんを脅すつもりもない。安心してくれ」

その言葉に嘘はないのだろう。

現に麻子は、不器用ながらも桜を慰めようとしてくれたし、今もこうして話を聞こうとしてくれている。

そのつもりがあったなら、今ごろとつくに麻子は保健室から逃げ出して、警察に電話をかけている頃である。

『もしもしポリスメン。私の学校に女装をした変質者が入り込んでいます』

情状酌量の余地はない。

「だから、本当のことを教えてほしい。井手上さんは、本当に男なのか？」

「…はい」

もはや、桜に嘘をつき続けることはできなかった。それは、心に余力がなかったということもあるが、ここまでの醜態を晒した以上、言

い訳ができるとも思わなかったのである。

「はあ…。…本当に」

しかし、半ば確信していたであろう麻子は、意外にも驚いたような反応を見せた。じろじろと桜の顔を眺める。

「私が言うのも何だが、男には見えないな」

「え？」

これには、桜もびっくりである。

「え、男だと気づいたから、今日、話をしたんですよね？」

「そりゃあ、そうだが。…外見じゃあ、分かん」

「ええっ!？」

桜が素っ頓狂な声をあげる。てっきり、麻子には何もかもを見抜かれているのだと思っていた。それこそ、あれがいけない、これがいけないと、桜の思い上がり指摘されるものと覚悟していた。

「じゃ、じゃあ、どうして私が男と分かったのですか…?」

桜が訊ねる。すると、ああー、と何かを思い出すように目線を少しだけ空中に向けて、言った。

「はじめて疑いを持ったのは、一緒に遅刻をさせてしまった時だな」
「初めて会った時じゃないですか」

そんなはじめからぼろを出していたとは、桜にも予想外である。

桜は、あらゆることに自信がなくなってしまうそうだった。

「あのとき、井手上さんは倒れそうになった私を抱き止めてくれただけろう?」

「え、ええ、まあ」

思い返せば、そんな出会いだった。ふらふらと酔っぱらいのようになっただけで、駆け寄ったところで倒れこんできたのだ。

「そのとき、意図せず胸に触ってしまったな。…あまりに胸がなかったのと、下着を着けている感触もなかったから」
「!？」

桜は、咄嗟に自分の胸を両手で隠すようにして、気持ち麻子から体を逸らすようにした。…まるで、普通の女子のようである。これは、全くの無意識だった。

「悪かった。ただ、井手上さんは背も高…くはないのか。ともかく、女子としては高いから、胸が全くないというのも変だ、と思ったのがきっかけだ」

「けれど、それだけなら…」

女性に対して失礼かもしれないが、背が高かろうと、胸のない人は一定数いるものである。それこそ、ブラを必要としない人もいる。「小さい」、とかではなく、「ない」のだ。

そして、そんなことは麻子だって知っていることである。

「だから、それはきっかけ。それからしばらく、学校での様子を観察させてもらった。おかげで昼間も眠くて仕方なかったがな」

「…ああ、あの視線は、冷泉さんだったのですか」

桜は、ここしばらくの謎の視線の正体が麻子だと分かって、得心がいった。言われてみれば、あまりにも麻子と遭遇することが多かったのだ。これまで意識をしていなかったとしても、ああも具合を悪そうにした麻子を見かけていれば気になったはずだ。それこそ、初対面の通学路のように。

「すると、やっぱり私は、何かぼろを出してしまっていたのですね」「いいや」

麻子は首を振る。

「結局、確信が得られるようなことはなかった。所作は完璧。外見も女にしか見えない。ただ、着替えのときは、そそくさと教室を出ていくから、少し怪しいとは思ったが、証拠と呼ぶには弱すぎる」

「それじゃあ…」

「ここまで来るのに、手を繋いだだろう。少し、脈が早くなった」折角落ち着いたのに、かあつ、とまた桜の頬が赤くなる。

つまり、そういうことだ。

冷泉さんの手、ちっちゃいなあ、とか。

冷泉さん、体温が低いなあ、とか。

そういうことを考えたのがいけなかったのだ。

「正直、半分くらいかな、と思っていた。だから、心配することはない。井手上さんの女装は、滅多なことじゃバレない」

確かに、桜の所作や外見から違和感を得たわけでないのなら、不用意な接触到さえ気を付けていればよさそうである。寧ろ、麻子とて半分はかまかけだったのだ。備えるべきは、かまかけにも動じない心構えかもしれない。

しかし、そうは言っても、麻子には男ということがバレたのだ。

「れ、冷泉さんは、いいんですか？」

まるで、麻子は桜のことを許すと言っているようだった。

特に断罪しようというつもりも見られず、気持ち悪いと思っている様子もない。もつとも、あまり気持ちが悪く表に出るタイプではないのか、付き合いの浅い桜には分からないだけかもしれないが。

「いい、というの？」

「だって、冷泉さんは私が男だと知ったわけじゃないですか。ここは女子校ですし。…気持ち悪いとか思いませんか？」

「なぜ？」

「なぜ、って。だって、冷泉さんは、私が男かもしれないと思って、観察までしていたんですよね。それって、男だったら、私のことを追い出そうとか、最初はそういうつもりだったんじゃないんですか？」

桜がおそるおそる訊ねると、麻子は、まあそうだな。と言った。

「沙織、…友人の近くにおかしなのがいたら、警戒するのは当然だろうが。まあ、井手上さんがいい人だということ、この数日でよく分かったからな。井手上さんだって、おかしなことをするつもりはないんだろ？」

「それは勿論！」

桜は、迷うことなく言い切った。

ゆかりやみほどのあれやこれやは、不可抗力である。桜の意思とは無関係である。

「それなら、これ以上聞くことはない。男でも女でもどっちでもいい。…これからも、沙織とは仲良くしてやってくれ」

「そんな…。むしろ、こちらからお願いしたいことです」

桜が頭を下げる。すると、それきり、麻子は話は終わったと言わんばかりに、ベッドに横になって寝転がってしまふ。

あまりに拍子抜けな展開に、桜はぽかんと置いていかれたような気分を味わった。

麻子は、本当にそれきり、桜に訊ねることはしなかった。

桜がどうしてそんな格好をしているのか。することになったのか。誰がそれを知っているのか。みほは桜とどんな関係なのか。そんなことは、一切気にしていない様子である。

本当に、沙織に害が及ぶか及ばないか。それだけが分かれば、麻子には十分だったのだ。

こうして、桜は解放されたはずである。

桜は、最大の危機を乗りこえたのだ。

それなのに、桜の心臓のどきどきは、まだ治まらなかった。

「あ、あの、そろそろ次の授業がはじまっちゃいますよ」

時計の針を見れば、もうすぐ授業の終わりを知らせるチャイムが鳴る寸前だった。そのあと10分間の休み時間が挟まって、すぐにも次の授業が始まってしまう。あまり悠長にしていたら、次の授業にも遅刻してしまうかもしれない。

すると、顔を桜に向けることもなく、麻子は言い放つ。

「……いいんだ。寝た気がしないからな。次も自主休講だ」

桜は、そんなことをしているから、進級が危なくなるんだ。と言いかけた。沙織がいつも麻子のことを心配していたから、たぶん、本当にまずいのだろう。

けれど、麻子が眠いことも本当だ。そして、その原因のいくらかは、桜なのだ。もしかすると、桜の知らないところで、相当麻子は気を揉んでいたのかもしれない。そう思うと、野暮を言うことは躊躇われた。

「おい、次の授業がはじまるぞ」

チャイムが鳴っても、一向に保健室を出ていこうとしない桜に、しびれを切らして麻子が言う。ぐるん、と半分だけ体を転がして桜の方を向いた。視線がぶつかった。

「あ、いえ。少し、疲れてしまいました」

桜の頬は、赤いままである。

もしかすると、本当に具合が悪くしたんじゃないか、と麻子が心配になるほどだ。

桜は、頬を赤くしたまま、言う。

「わ、私もっ！次の授業が終わるまで、ご一緒してもよろしいでしょうかっ！」

まるで、一世一代の告白をするみたいである。

麻子は、何がなんだか分からなくなつて、思考を全部放り投げた。

「……好きにしろ」

それきり、麻子はもう一回体を転がして、桜がいるのとは反対の方を向いた。背中に、何か視線を浴びているような気がしたが、それはきつと気のせいである。